



はしがき

私は心身障害児二人の親である。息子政章はすでに二十三歳、娘葉子も二十歳である。

子供達二人は、私が創立者である精神薄弱者更生施設社会福祉法人薄光会豊岡光生園の園生となったが、四年過ぎた今も、二人共最重度障害児であることに変わりはない。

しかし、人の悲しみは時と共にその質が変わるものなのか、今では正直、我が子達のために涙の出ることはあまりない。むしろ、笑うことのほうが多いと言いたい。多分、子供達が、私を変身させてくれたのだらうと思う。

人はみな、楽しいときには夢中になる。施設を開設して以来、私は、とにかくみんなが楽しく生きること、特に職員達がいきいきと働いてくれることを願って、四年を過ごした。

事実、自分で言うのも変な話だけれど、豊岡光生園は実に面白い施設である。そして、この際紹介しておくが、日本中で重度、最重度障害の人所希望者に対して、一番良心的に門戸を開いたユニークな施設だと、うめばれてもいる。精神薄弱者更生施設で、入所者四十人が全員重度加算対象者という施設は、日本中でもめずらしいのではないかと思う。

ユニークさについては、ほかにまだ紹介したいことがある。そのひとつ、職員達が全員ど素人などというのも、読者のみなさんには興味あることと思う。その素人職員集団と重度心身障害児(者)達が奏でる未完成変奏曲が、この本のあらすじであることを、申し述べておく。

人は集い、学び、そして行動する生物である、と言われている。どのような人々が集うかによって、学ぶ中身も起こす行動も、おのずと違わずである。決して、社会復帰のための作業訓練のみが、施設生活者の目標のすべてではないことも、この際、理解してほしいと思う。

開園当初、ある先輩の施設経営者に、「重度者ばかり入園させては、円滑な施設運営ができない」と教えられ、私もそのように考えていた。しかし、蓋をあけてみると、入園の切なる願いを持って訪ねてくる親子は、みな重度、最重度障害児(者)ばかりだった。

どのケースも、今までどここの施設にも受け入れてもらえず、差別され、のけ者にされ、もうなかば諦めていた様子で、その哀しい姿を目のあたりに見せつけられると、身に覚えのあるこちらは断ることができず、「えーままよ、もう一人、もう一人」と言って入園させていくうちに、ついに全員が重度、最重度障害児(者)ということになってしまった。

「よし、それなら我々が、日本で多分最初の重度者ばかりの精神薄弱者施設運営

を手がけてみよう。どうせ見本がないのだから、好きなようにやってみるさ！」という開き直りが、豊岡光生園の出発であった。

ところで、この本の題名を決めるにあたって、職員達に、「生きよ天使達」というのはどうか、と意見を求めてみたことがあった。すると、「天使というほど気高くもないし、純真でもないよ」という答が即座に返ってきた。

職員達に言わせると、子供達は「もっと底辺にどっしりと生きている」感じなんだそうで、なるほど、そう言われてみると私も同感で、彼らは、少なくとも「天使」というほど、ハイカラで崇高な感じではないような気がする。

それから、もう一つついでに申し上げると、施設を開設して、すでに四年過ぎてから、この本を書いているわけだが、豊岡光生園では、職員達が私と妻の喜代子のことを、父ちゃん、母ちゃんという愛称で呼んでくれている。したがって、本文中の父ちゃんは私であり、母ちゃんは私の妻である。そして入園者達はほとんどみな大人であるが、親達の愛と願いを込めて、子供達と呼ぶことにしている。

さて、ここで改めて、我が豊岡光生園の生い立ちから、めざす将来について、簡単に紹介しておこうと思う。

豊岡光生園は、千葉県下に居住する年長障害児（者）の親二十世帯が、私と一緒に我が子達のために自ら立ち上がって、およそ一万五千人の一般社会の人々の温かい支援を受けながら、四年三カ月の運動の末に、ついにその夢を実現させた施設である。その経緯は、やはり日本放送出版協会から刊行してもらった『生きよわが子たち』と『生きよ仲間たち』にくわしく書いてある。

昭和五十五年七月、豊岡光生園は、千葉県富津市豊岡の大地に、象徴的な

“人”形をかたどることによって、“人を大切にしよう”という願いを込めて、建設、開園することができた。

この地に刻んだ“人”の文字は、障害児（者）の親とそれを支えてくださった多くの人々が、福祉に対する血みどろの戦いの末に勝ち取った金字塔であり、障害児（者）とその親と職員、希望の家“光ある家”でもある。

そして今、その戦いの真摯な精神は、その後、この施設に働く若い職員達にしっかりと受け継がれ、重い障害児（者）達の驚異的な発達を生み出す底力となって、現われ始めてもいる。

想い起こすと、四年前に施設が開園した当時、子供達は様々な面での重度障害児（者）であったが、今では、全員が、まがりなりにも落ち着いて、それぞれの個性に合わせた生活訓練にも励むという、素晴らしい効果も出てきた。

バスを主役とした本書の題名の由来は、障害の重い子供達に、せめて何かひとつぐらいみんな楽しんでくれるものとして、バスによるドライブを導入したことにある。この企ては予想以上にみんなに受け入れられ、訓練効果を発揮してくれている。

おかげ様で、この施設に我が子を預けた親達は、みな感謝と幸せな気持ちに胸をふ

くませることができた。

近年、障害児（者）の問題は、特に重度、最重度の成人について取り残され、このことのみが未解決のまま放置されて、年老いて力を失ってしまった年長障害児（者）の親を、悲しませ、苦しませているのが、実状のようだ。

「私達だけが、幸福では申しわけない。一人でも多く、この悲しんでいる仲間たちを救出してあげたい」という思いが、私の胸に実感として、わき上がってくる。

かようなわけで、今ふたたび、この子達のために倒れてもやむを得まいという決意にもえて、私は新たなる、大いなる、熱き戦いの火蓋を切ることを誓っている。

すでに始まっているが、昭和五十八年度、南房地区重度心身障害児療育相談、デイクアサービスのための地域交流ホームの建設、昭和五十九年度、第二薄光会の悲願、豊岡光生園の増設。そして、それに続く、将来この子達が寝たきりになった時のための、新たな施設作り、重症心身障害児（者）施設の建設計画などである。

最初の時も、建設自己資金三百六十万円で三億円の資金調達という、とてつもない大事業であったが、多くの人々の温かい援助に支えられて、無事に乗りきることができた。そして今回も、次回も、そのまた次も、借金だらけの社会福祉法人薄光会にとつては、前回と少しも変わらないと思われる。

人はみな、美しいこと、豊かなこと、幸せなことを望むものである。しかも、己れのみ幸せや豊かさを追求することが、どれほどこの社会を不幸にすることなのか、よくよく知っている。

しかし、私達は不幸のどん底にいる者を、どれほど助けてあげたことがあるだろうか？ いや、助けないまでも、同じ人間である、という当たり前のことさえ、どれほど理解しているだろうか？

言葉を話すことも、理解することもできない、二人の重度障害児を持つ私は、この我が子達二人が人並みに幸せになってほしいと、いつも心に手を合わせて祈りながら生きている。

そして、私と同様に、重度障害児（者）を持つ年老いた親達が、今日もちまたの町や村で、泣いて暮らしている。

「同じ人間だぞ」という在宅重度障害児（者）達の無言の叫びを、共に生きる連帯感を失ってゆがみつつある、日本の社会に対する大いなる警鐘として、心にききみ続けていきたいと願うものである。

昭和五十九年七月

鈴木 栄

目次

第二章 人間生存協奏曲序曲

ぼくらの大切なこと

オープニングセレモニー

入園者達

便所が主戦場だ！

職員達と施設運営のプロフィール

第二章 豊岡光生園の光景

光ある家 のいわれ

生きる日々

アンコバスは園の花

教育・手を握って、眼を見て、語りかけろ

医療・生死との対決

親子・ごみ山を背に

自閉・やるせない気持

楽しいことが生きることだ

第二章 素人福祉論

見学者達

重度者処遇について

福祉・父ちゃんの言い分

土に生きる日の夢

装丁 中島敏夫

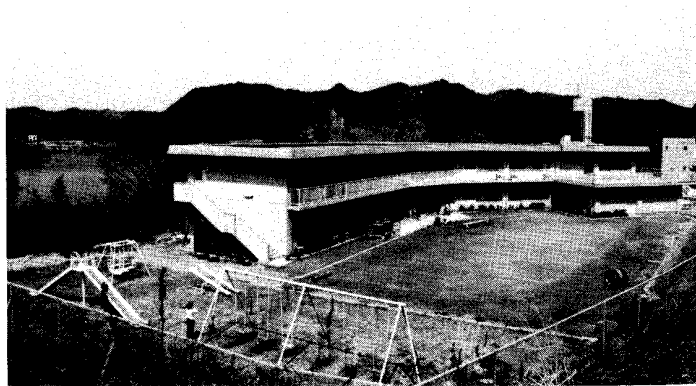
イラスト 入川 捷

撮影 菅原蓼子

編集協力 市村慶子

第一章

人間生存協奏曲序曲



険しくても、信じて進む道に、
行き止まりはない。

この本を、若き福祉施設職員達に、
限りなき感謝を込めて贈る。

ぼくらの大切なこと
ぼくらは 歩き方が

とても遅い

みんな 走っていても

ぼくらは ただ歩くだけ

もし 誰かが

「遅い」と言ったら

「ぼくらは 足元を見て

歩いているからだ」と言う

もし 誰かが

「幼い」と言ったら

「ぼくらは 正直だからだ」と言う

もし 誰かが

「大切なことは？」と聞いたら

「ぼくらは 生きることだ」と言う

オープニングセレモニー

(一)

昭和五十五年七月七日は、朝からやけにむし暑い日だった。

空は晴れていて雲ひとつなく、風も吹かずで、豊岡の野山にはセミの声だけがやかましく、みーんみーんスコールが、あたり一面に響いていた。

それはまるで、父ちゃんがこの場所で人々を集めて、これから指揮する予定である人間生存協奏曲の、序曲を思わせるふしがあった。

四年三カ月の歳月と二億四千万円という巨額の建設資金を吸い込んでしまった、

精神薄弱者更生施設豊岡光生園の建物は、戸面原の人造湖を眼下に見おろす小高い丘の上に、真新しいクリーム色の巨体を静かに横たえて、今日のオープニングセレモニーを待っている風情に見えた。

目にしみるような青葉の中に、屋上の白い給水タンクと屋根のコバルトブルーの色がひと際目立って、一瞬、立ち止まりたくなるほど美しかった。

父ちゃんは少し興奮していた。それは幼い頃、学校の演芸会で自分の出番を待つ時の胸のときめきに似ていて、晴れがましさと不安が微妙に混じり合った、何とも言えない気持だった。

建設準備会発足以来、四年の長い日々の苦闘の末にできあがった施設を目の前にして、当然、想い起こすべき過去のことが多いはずなのに、父ちゃんの胸の中は、そのことについては、むしろ不思議なくらいからっぽだった。そして、晴れがましさは別として、これから始まるこの場所での未知の仕事に対する不安な気持と責任の重さに、特々胸がぎゅーっとしめつけられるのだった。

開園式は、午後一時から始まることになっていた。式に参加する客の数は、最初の予想では、招待状発送数の約三分の一の百人ほどと思っていたが、蓋をあけてみると、その予想をはるかに越えてしまつて、出席通知をしてきたお客様は、二百五十人にもなっていた。そのため、プレールームの外に継ぎ足しの特設ステージ二基を仮設して、一部のお客様を収容せねばならなかった。

いよいよ式が始まると、十二人の新しく採用された職員はもちろんのこと、親達まで、あまりにも多いお客様の数に圧倒されて、すっかりあがってしまった。式の司会者は父ちゃんであった。父ちゃんは、マイクを片手に客席に向かって立っていた。式典の物品調達係として活躍してくれた館野先生は、父ちゃんの立っているすぐ横の紅白幕の陰に、音響装置調整のために待機していた。

「ただいまより、精神薄弱者更生施設、豊岡光生園の開園式をおこないます」

式場に、父ちゃんの少し高いマイクの声が響きわたると、一瞬、張りつめたような空気が会場にみなぎり、厳かな雰囲気の中に、緊張がその極に達していた。

父ちゃんの親指の動きが館野先生へのサインで、君が代のレコード演奏、が始まることになっていた。

「それでは、君が代を斉唱いたしますので、みな様全員のご起立をお願いします」
もう一度、父ちゃんのピーンと張った大きな声が会場に響きわたり、お客様達が「ごそごそ」と立ち上がった。

父ちゃんは、じーっと幕のすき間からこちらを覗いているはずの館野先生に向けて、親指の合図を送った。

会場は、しーんとしていた。

十秒ぐらいの静止した時間が、ものすごく長く感じられた。

……………（早く、君が代！）……………

（どうしたんだ、何をやってるんだ）と叫びたい気持で、父ちゃんは先ほどから親指をくしゃくしゃとくねらせ通しだった。そして、「あー、もう駄目。困った！どうしよう」と思った時、いきなり会場のスピーカーから音声飛び出してきた。しかも、スピーカーから流れ出した君が代のメロディーは、一足飛びに飛んで「千代に八千代に」のところなのだった。

どうやら館野先生もやはりあがつていた様子で、自分では合図に従ってレコードに針を乗せて、これでよいと思ったのだが、途中でアンプのスイッチを入れ忘れて音が出てないことに気づいたらしいのである。ただでさえ短い君が代を、半分切りつめてしまったから、妙な具合だった。

お客様達は緊張がどっとほぐれて、げらげらと笑い出してしまった。そして、笑いながら間のびした調子で、「石の巖となりてー」と歌い出した。

式はのっけからこんな調子で始まったので、もうあとは言うに及ばずで失敗また失敗、客席は時々わいわいがやがやと騒がしくて、司会者の父ちゃんは、ため息と冷や汗ばかりだった。

当日、我々がいかにへまばかりをしでかしたかを数えあげると、ざっと次の通りだ。

まず第一に、大切なお客様の祝詞がおこなわれている最中に、急場こしらえの特設ステージの床が、予想以上に集まった人の重みに耐えかねて、めりめりと音を立てて技けてしまったこと。

次に、外の駐車場では収容しきれない車また車で、一日中、駐車場係が怒られっぱなしだったこと。

それから、少々あがり気味だった司会者の父ちゃんが、せっかく頼んであった祝詞予定者を二名ほど忘れて、うろぬいてしまったこと。

やはりあがり気味の理事長の木村さんが、建設功労者に感謝状を渡す時、うっかり手をすべらせて感謝状を落としてしまったこと。

そして、最後にへまの圧巻は、何と言っても園長の挨拶であった。

加藤園長、前の晩から挨拶の原稿をふところに暖めて、何度も繰り返し読んですっかり準備をしてあったのはいいのだが、いざ段上に上がってくだんの原稿を取り出そうと胸のポケットに手を入れてみると、これはまたどうしたことか？

……………（ない？）……………（ない！）

あわててズボンのポケットまで捜しても、やはり「ない！」

これぞ、万事休す。まさに一世一代の大失敗！

新園長殿は最高にのぼせて、顔面真っ赤。もうそれからというものは「あのー、あのー……あのー」「えーと、えーと、えーよ」ばかりの、連続エラーの巻！

関係者一同としては、「うわー、これはひどい。見ちゃられないよ」「いいかげんにして、早く降りてこいよ」と、どなりたい気持なのだった。

開園式の前日、理事の中村さんが、かずのり君を連れてきた。もちろん、晴れの開園式に出席のためだった。

彼は最重度児で、おまけに時々テンカン発作を起こす子だった。

発作第一号は、かずのり君と母親が園に到着して間もなくのことだ。テンカン発作を誘発させた犯人は、食堂に九十万円もかけて取り付けたシャンデリアの光であつた。

知らないということは恐ろしいことで、このシャンデリアのために、彼は一日のうちにも三度もテンカン発作を起こし、そのため、しまいにはすっかり寝たきりになつてしまつて、翌日の開園式には親子共々、ついに出席できずじまいとなつた。

シャンデリアは、食堂の天井に六十ワットの電球を合計九十個も使つて取り付けたたいそう豪華なもので、中でも、右と左の各中央に電球三十個ずつを使った二個の大シャンデリアのまばゆいばかりのきらめきは大変見事、多分、福祉施設の食堂にこんな立派な照明設備を施すのは、うちが最初じゃないだろうかなどと、なかばうぬぼれて計画を実行にうつした代物でもあつた。

テンカン第一号の発生は、あつという間の出来事だった。

夕食前に園内いっせいに電気が灯されると、明日の式典に参加するために泊まりがけで来ていた親子連れ達から、「わあーっ」という歓声が上がった。

かずのり親子は、その時まだ園に到着したばかりで、ひとまず食堂で休んでいた。ちょうどその時、食堂のシャンデリアがいっせいに灯つたのだつた。

「ウィーン」と奇妙な声が出て彼が倒れたのは、その直後だった。

「うわーっ、大変だ、かずのり君が倒れたぞーっ」と、そばにいた者が叫ぶと、園内はひとしきり騒然となり、そのうちに誰かが体重六十キロの彼を抱きかかえて、居室のほうへ運んでいった。

一度のテンカン発作は、個人差にもよるが、百メートルを全力で走ったくらい体力を消耗すると精神医学書にはあるが、その時の彼はどういふわけか、五分もたたないうちにけろっとして起き上がったしまった。

「かずのり君、まだ起きちゃ駄目ですよ」と言つて、川田看護婦がやんわり制したが、本人、何もなかったようにすたすた歩いて食堂に来てしまった。

それでも一応、川田さんが彼をマークしていた。そして彼女が「シャンデリア、きれいなねー」と言いながら指さす方向を、かずのり君が見上げた途端に、「ウィーン」と声を張り上げながら、その場に「ずーんと引っくり返つてしまった。」

さすがのかずのり君も、二度目のテンカン発作ですっかり参つてしまつたらしく、それから約三時間ほどは、ベッドに横になったままびくりとも動かず、大いびきをかきながら寝込んでいた。

そのまま朝まで寝てしまえば、どうということもなかったのだが、二度あることは三度のたとえ通り、その日、彼は食堂のシャンデリアの下で、もう一度倒れることになる。

彼が目をさましたのは、もうかれこれ夜の十一時を少しまわっていた頃であった。明日の開園式を前に少し興奮している親達は眠れないらしく、園内の一番にぎやかな食堂で、ざわめいていた。そして、今度も彼は自ら起き上がって、そろりそろりと食堂のほうへ足を運んだ。

母親も川田さんも、彼を寝かせておこうと必死に制したのであるが、精神薄弱者特有のパターン化されたような一途さについて負けてしまって、「困ったね」「寝ていてくれればいいのにね」などと言いながら、しぶしぶ彼を支えて三人でまた食堂に現われた。

「あれーっ、大丈夫かい」

誰かが心配そうに声をかけたが、彼は気持の上では一向にへこたれた様子がないらしく、明るい電気の光のほうに向かって、相変わらずそろそろ足を運んで、ついに椅子に腰かけてしまった。

食堂の中にいた親の一人が彼のそばに寄ってきて、特参のお菓子を与えながら話しかけていた。

「大変だったねー」

「……………」

彼は相手の言葉は少し理解できるのだが、自らはまったくしゃべれない。日がな一日黙っているか、あるいは「ウィー」とか「ウーン」とか「ウィーン」の声の強弱だけである。

「食堂、きれいだねー」

「……………」

「ほら、天井のシャンデリア、見てごらん、すごいだろう」

これが、このひと言がいけなかった。かずのり君はその人の指さす方向を見上げながら、またもや「ウィーン」ずでーんと倒れてしまった。

川田看護婦が最初に、このことに気づき「かずのり君にシャンデリアを見せると、倒れるのよおー」

と、金切り声を上げていた。

父ちゃんは彼の介抱を職員達に指示しながら、「ちょっと照明を派手にやり過ぎたかなあー」といううしろめたさやら妙なやり切れなさに、心を痛めていた。

(三)

開園準備は、昭和五十五年七月七日を遡ることちょうど三カ月前から始められて

いた。

その頃、父ちゃんと母ちゃんは二人共、まだ薄光合設立事務所に頑張っていたのだが、園からは七十キロも離れた千葉市内の県庁のそばであった。

すでに三月中に職員九人を採用し、自宅待機させてあった。五月に入ると父ちゃんは彼らをいっせいに呼び出し、同業施設に見習いに出すことにした。

第二陣は男子職員二人で、以前から父ちゃんの知り合いであるM園の斉藤園長のところに決まった。

「かまわないから、びしびしやってください」と言って頼むと、斉藤園長は、「やめられても知りませんよ」と言いながら、にこにこ笑っていた。互いに、この仕事は大変だという理解があるだけに、冗談も手きびしいが、心が通じ合うさわやかさでもあった。

引き続き第二陣、女性四人の行く先が決まった。福祉センターだった。

母ちゃんは見習いに向かう新職員達に、旅費のこと、日用品のこと、電話番号や連絡先のことなど、細かいところに何かと気を配っていた。

第二陣の女性四人を送り出して三日目の晩、施設建設地の豊岡から父ちゃんが事務所に戻ると、母ちゃんが青い顔をしてうなだれていた。

「あんた大変よ。見習いに行った女の子達みんな、帰らせてほしいと言ってるわよ」父ちゃんにしてみりゃ、寝耳に水であった。

「何だ、どうしたんだ」

「あのねー、福祉センターの中で子供が行方不明になったんですって」

「それがどうした？ だから先方で帰れと言うのか？」

「いいえ、そうじゃないんですけど、一日中子供捜しばかりさせられて見習いにならないから、彼女達、帰らせてほしいって言ってきたの」

父ちゃんは腹が立った。同時に情けないと思った。見習いに送り出す時に施設職員はまず子供の命を大切にすることを覚えてほしい、と言って聞かせたのに、そのことがまだ理解できてないことに対する腹立たしさであった。

しばらく黙っていた父ちゃんは、「俺、これから福祉センターに行ってくるよ」と言って立ち上がった。母ちゃんも、「私も行くわ」と言った。

その頃、夫婦は目がまわるほど忙しかった。特に父ちゃんは、やってもやってもこなしきれない書類作りと資金集め、それに建設現場での打ち合わせなどに追われていて、もう体力の限界をはるかに越えていた。母ちゃんが「私も行くわ」と言ったのは、朝早くから一日中飛び歩いた夫が、夜中にまたこれから出かけると言い出したので、倒れてしまうのではないかと心配してのことだった。

事実、父ちゃんは当特、顔色がすぐれず、誰彼となく会う人に「大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ」と言われた。

二十四時間スーパールでお菓子を買った。それから、彼女達の一人がテレビもラジ

オも新聞もないと辛情を言つてたのを母ちゃんが想い出したので、家からトランジスターラジオを二台持ち出して、福祉センターに向かった。

真夜中、守衛さんに事情を話して彼女達がいるボランティア寮に案内してもらうと、四人共、もうすっかり帰る気で、荷物をまとめて寝ずに待っていた。

父ちゃんの顔を見るなり、女性四人はいっせいに不満を並べて、一刻も早くその場を引き上げさせてもらうことを要求した。

彼女達の不平をひと通り聞いた父ちゃんは、静かな調子で話し出した。

「君達、せっかく就職したのに、まだ施設で一度も働かないうちに、職場をやめるつもりかい？」

「……」女性達は一瞬、黙った。しかし、すぐまたいっせいに「違います。私達は、この見習いが意味がないから、引き上げさせてもらいたいと言っているのです」と言つて、一歩も譲りそうにない様子だった。

父ちゃんは、しばらく目を閉じて下を向いていた。若い彼女達にどう話したら、ここであと二週間我慢してもらえるかを考えていた。そして、何か思いついたように顔を上げると、

「君達、いいかい、今から僕が言うことだけを調べて、学んできてほしい。多分、それなら君達も納得して、ここで終わりまで頑張れるはずだよ」と言った。

四人の女性達は、「何だろう？」という顔をした。

父ちゃんはすぐ続けて、「あのなあ、みんなは、ここが県立だから、さぞかし立派な内容で立派な組織で、施設入所者にも立派な処遇をやっているだろう、という先入観を持ってしまったんだろう。それなのに、子供はいなくなってしまうし、子供捜しに右往左往するしで、がっかりしたのだろう。

がっかりしたことが、かえって君達には役に立つんだよ。いいかい、これからあと二週間、ここで君達が、これはいかなあーとか、がっかりするようなことだけ、全部拾い出してきてくれよ。そして、俺達、が運営する施設で、それをひとつ参考にしようと思うんだけど、どうだね」と言った。

彼女たちの顔色が急に明るくなった。母ちゃんが帰り道にほほ笑んでいた。

「あんだ、うまくいったみたいねー。女性に人のあら捜しをさせるなんて、いい思いつきねー」と言つて、また笑った。

(四)

豊岡から海岸に向かって十五キロほどで、上総湊という駅がある。その駅を中心に、人口約三千の小さな町がある。このあたりで町というところ、ここが一番近いわけなのだが、都会から来た我々がどうにも我慢できないことは、この町ののんびりさかげんである。

たとえば、こんなことがあった。

開園のための園の買物は、館野先生がほとんど一手に引き受けて、毎日ライトバンで園と町を往復していたのだが、ある日、買物部長の異名で通っていた彼の帰りがあまり遅いので、みんなで心配しながら待っていた。

晚めしをお預けにされて待っていた仲間達は、気が気じゃないのだった。

「遅いなあー、もしかして交通事故でも起こしたのでなければいいが」などと噂をしていると、「やあー、お待ちどう様」と言いながら、何もなかったような顔をして、やっと彼が帰ってきた。

たちまちのうちに、数人の職員から「何してんだ、遅いじゃないか！」などと、文句のいっせい射撃が浴びせられたが、館野先生は何か言い分がある様子で、平気な顔で笑っていた。

そして、夕食を食べながら、彼は身振り手振りよろしく、その日の買物先である金物屋のおじさんとのやりとりを我々に説明して見せながら、みんなを笑わせてくれた。

町ではどの店も、店員が店先にいたことがない。たいがい奥に引っ込んでいて、客が呼んでも、なかなか現われない。何回も大声で呼ぶと、ちっともありがたくなさそうに、もそもそと現われて、何だ、何か用か、といった顔をする。

館野先生、金物屋の店先で何回目かの大声で「ごめんくださいー」と言つと、奥からおじさんが、やっと現われた。

「鎌、ありますか？」

「あるよ」

「五丁、ください」

「……」

しばらく相手は、鎌を五丁も何に使うのかと言わんばかりに、こちらの顔をじっと眺めて、

「ちーっと待ってくんねーか、今、柄をつっからよおーっ」と言う。

さあー、それからが大変、金物屋のおじさん、少しもあわてる様子がなくそれは丁寧一本ずつ、サンドペーパーで磨きまでかけて柄を上げるのだそうで、その間にも、たばこを一服つけるなど、若い館野先生がたまりかねて「早くしてくださいよ」と言っても、まったく知らぬ顔らしい。仕方なしに彼もおじさんのそばにしゃがみ込んで、延々と時間のたつのを待っていた、とこう言うのだった。

彼はまた、次のようなことも話してくれた。

町での我々の買物は、すべて量において、町の人々をびっくりさせているらしく、たとえば、箒十本、ちり取り十個などと言おうものなら、「今、箒は五本しかない。ちり取りは三個しかない。二、三日したら取り寄せるから、それまで待ってください」と必ず言われるのだそうで、来客用スリッパ三百足などは、相手がたま

げてしまつて、しばらくこつちをじろじろ見つめて黙っている、と言つたのだつた。
結局、このことで学んだのは、ここは都会ではなく農村であるということ、都会式のあくせくした生活習慣を身につけてしまった我々が悪いのであつて、間に合わねばほかの店に飛んでいく式の生活様式は、ここでは通用しないということ、すなわち、「郷に入れば郷に従え」のたとえ通り、我々が、生き方を変えねばならないということだつた。

(五)

当時、開園準備に、もう一つ重要な仕事があつた。すなわち、入園予定者の家庭訪問だつた。

この仕事は、女子職員採用第一号の小平先生が受け持っていた。彼女はその年の春、四年制大学の社会福祉学科を優秀な成績で卒業したばかりのせい、少々、地域社会福祉論にかぶれ過ぎのところがあつた。そのため、日頃、言葉のはしほしに「障害児(者)は地域社会の中で、つまり家庭で暮らすのが一番良い」という意見を吐いた。

つまり、彼女は施設に勤めたら、親達と話合つて、障害児(者)を家庭に引き取つてもらふ運動を展開したいという夢を持っていた。そればかりか、訪問先で在宅福祉論を展開する始末で、親達は、「あんな先生は困ります」と文句を言つてくるに及んだ。

父ちゃんは、一度このことを彼女に根本的に考えさせるチャンスを狙っていた。いや、むしろ、あそこへ家庭訪問させれば、という期待感を持って、向かわせる訪問先を心に画いていた。

「百聞は一見にしかず」のたとえ通り、たあちゃんの家は、在宅福祉論を一発一撃のもとにこなごなにしよう威力を秘めた家だ。

ある日の午後、前ぶれもなしに、小平先生と父ちゃんは二人で一緒にたあちゃんの家を訪ねた。

たあちゃんの家は父親が医者で、入園予定見の家庭としては収入がトップクラスだ。家は千葉市内の高級住宅地の中にあつた。訪ねると、たあちゃんの家だけが、外から見ただけで異様な雰囲気だつた。

すなわち、真つ昼間から家のまわりの雨戸が全部締められ、雑草がところかまわず伸び放題になつていて、庭の木はすでに何年も手入れがなかったらしく、おい繁つて塀の外まではみ出してゐた。誰が見ても、中に人が住んでいるとは思えないのだつた。

小平先生はその家の前で、不思議そうに首をかしげてゐた。

もちろん、父ちゃんは以前にこの家を訪ねていて、このことはよく知っていたが

何度見てもその異様さに変わりはなく、内心、この荒れ放題の家があるからこそ、重度児は在宅させられないのだという確信を持っていた。

たあちゃんは、この大きな建物の中で、ほとんど勝手気ままに暮らしていた。この家の主はたあちゃん、ほかに二人の兄弟と両親がいるが、母親を除いたほかの三人は二階にそれぞれ個室を持ち、その個室に鍵をかけるという生活をしていた。家の中の空間のほとんどが、たあちゃんのものであった。日がな一日を、廊下から居間から食堂、客間、玄関という具合に飛びまわって、散らかし汚し、そして壊して過ごしていた。

母親は、すでに二十歳、体重六十五キロ、身長百七十センチになったたあちゃんの前ではなすすべがなく、まるで腫れものにもさわるようにしていた。すなわち彼女は、彼の食べものを用意し、彼の下の始末をし、そして彼が外に出ないようにすること以外は、すべてのことに対して諦めている様子だった。

部屋の中の掃除や片づけはとうの昔に諦めてしまったらしく、我々が訪問した時も、廊下も部屋の中も、どこもかしこも足の踏み場がないほど散らかしつはなしになっていて、それはまるで、ごみ処理場の中に足を踏み入れたような感じだった。

母親は我々に対し、「ひと言、おいでになるとおっしゃっていただければ」と、うらめしそうな口振りだったが、それがただの言いわけに過ぎないことは明白だった。

部屋の中があまり暗いので雨戸を少し開けてもらうと、昼開の光の中に、たあちゃんとその母親の顔が、気のせいかやけに青白くむくんで見えた。年中、閉めきった部屋の中で暮らしているから、それは本当なのかもしれないなかった。

帰りに、小平先生がうなだれていた。ショックだわー」を連発していた。

(六)

開園式の一カ月前、いよいよ千葉市の建設準備事務所を引き払って、新採用職員達と一緒に現地豊岡に乗り込んで来た時のことだった。

当時、まだ職員寮が未完成であったため、父ちゃんと母ちゃんが住むために先に建ててあった小さな平屋一軒に、とりあえず、みんなで暮らすことにした。総勢十二人がたった二十坪の家に暮らすわけだから、それは大変である。園からは三百メートルほど離れた場所だ。

毎日、男子職員達は草刈りと道路整備に狩り出され、女子職員達は教材の準備や開園式の飾りつけの製作に追われていた。昼間みっちり働いた彼らは、夜になると語り合い、飲み、そして歌った。

彼らは、完成間近になった豊岡光生園を、昼間の仕事の合間に覗いてきては、夜の話題とした。食堂は少しせまくはないか、プレールームの吹き抜け大井について

いる螢光灯は、電球の交換に困るのではないかなど、はてはトイレの便器の位置とか引き出しベッドの使い方にいたるまで、いつもにぎやかに、話題のつきない夜でもあった。

二十坪ばかりの小さな家に、若者達がそのエネルギーを発散させて、わいわいやがや言いながら暮らすと、そのやかましきときたら並大抵のものではなかったが、父ちゃんは、彼らの若さとの触れ合いが新鮮でうれしく、いつも目を細めていた。

毎晩の酒は、しまいには女子職員達に、どうやら不評を買い出したらしかった。

最初に男達に向けて実力行使に出たのは、千葉の私立福祉大学出身の色黒美人、内田先生であった。背が高くほっそりしたタイプで、くりくりした大きな瞳の持ち主である彼女は、外見からも気の強さがうかがわれた。

ある晩、彼女は男達の毎晩の酒について業を煮やして、飲んでいる最中のウイスキー瓶をさーっと取り上げるや、どこかへ持って行って隠してしまった。

初めに、「あれーっ、酒、もうないの？」とすっとな狂な声を出したのは、慎二先生だった。彼は子供が好きで、大学を出たあとの最初の就職が上野のオモチャ屋さんという変わり種であるが、数日のうちに、飲んべえナンバーワンを自他共に認めてしまったほどの酒豪でもある。

「いつまで飲んでもきりがいいから、お酒、捨ててしまったわよ」と内田先生、けろりとしている。

「うわー、そりゃーひでえーなあー」と男性陣、みなうらめしそうだ、内田女史の毒気にかなう者がいない。しかし、天晴れな奴が一人いた。男性陣みなすこすこ引き下がった中に、一人だけグラス片手に、内田先生にくだがっている。

「みんなに内緒で、僕にだけ、もう一杯くださいよ。お願いしますよ」

のちに生活指導主任になった館野先生である。

父ちゃんは、それを笑顔で見ながら、心の中で「したたかな若者に祝福あれ。頼もしき若者達よ、明日をになっておくれ！」と思うのであった。

入園者達

(一)

昭和五十五年七月十五日、開園二週目の初日に最初の入園者が来た。

K市在住の吉川親子だった。母親は中度もしくは重度で、子供は間違はなく重度のダウン症という感じだった。

あとになるが、結局、この母親のみが比較的軽度者で、あとはみな、来る子も来

る子も全部、重度、最重度者ばかりだった。

吉川親子は半年前に家族の大黒柱である父親に死なれて、二人で福祉事務所職員
の世話を受けて暮らしていたのだが、その間、何度も施設入所がころみられた。
そして、どの施設も、親だけならとか、親子入所は前例がないとか、作業訓練に適
さないなどと言い、県内中の施設から、彼女達二人は締め出されていた。

K市では豊岡光生園の建設に対し、わずかばかりだが補助金を出すことになって
いた。行きがかり上、父ちゃんにも当然、入所について相談がなされ、福祉事務所
職員と一緒に家庭訪問に向くことになった。

「こめんくさーい」玄関に立って何回呼んでも、返事がない。

勝手知ったる様子の福祉事務所職員は、「上がってみましょうよ」と父ちゃんを
うながして中に入る。

見ると、親子二人、昼寝をしている。「はーん、食っちゃ寝てばかりいるのか
な」と父ちゃんはある。

調書を見ると、母親かず江、娘さち子とある。

「さっちゃん」と呼んでみる。さっちゃんは、「はっ」と驚いたようにして起き上
がる。

目の前に座卓が置いてあって、親子と父ちゃんと福祉事務所職員が、それぞれ向
かい合って座る。父ちゃん、何か話すことを探す。座卓の上に菓子鉢が置いてあ
って、駄菓子が入っている。

「さっちゃん、今朝は何を食べた？」と聞く。さっちゃんは「これっ」と言っ
て、その菓子鉢を指で示す。

「じゃー、ゆんべは？」とまた聞くと、「これっ」と言っ
て、もう一度その菓子鉢
を指で示す。

「じゃあーねー、昨日の朝は？」とまたまた重ねて聞くと、やはり「これっ」と言
って菓子鉢を指さす。

「お菓子ばかり食べているの？」と聞くと、「うーん」と言っ
て、首を縦に振っ
て見せる。

福祉事務所職員がたまりかねたように、横から口を出して説明してくれたところ
によると、二日に一度ずつ御飯を炊きにこの家を訪れているが、いっぺんに大量に
食べる恐れがあるので、せいぜい二回分くらいしか炊いてあげることができず、か
といって福祉事務所も人手不足で、毎日来てあげられないと言っ
たのだった。

そして、目の前の駄菓子は、さっちゃんが買ってくるのだと言った。

父ちゃんは、かわいそうだと心底思った。親子を預かることのむずかしさなど、
どうでもよかった。ためらわずに、入園第一号とすることにした。

吉川かず江四十六歳、娘さち子十七歳、多分二人共、父ちゃんと共に、豊岡光生
園で生涯を生きることになったと思われた。

続いて、三日おきくらいに、ち代ちゃんとゆきちゃんと、父ちゃんの娘よう子ちゃん、県北の児童施設から措置替えになって入園してきた。

同じく、しん一君も養護学校から、学籍を残したまま入園してきた。

ち代ちゃんは片手が不自由で、色白ぼっちゃり美人型、ゆきちゃんは色黒重戦車型、父ちゃんの娘よう子ちゃんは自閉傾向重症型、しん一君は脳性麻痺による運動機能障害型などで、みんな重い知恵おくれ、言葉なしだった。

カリキュラムなんか、どうでもよかった。六人の障害者に十二人の職員が取り付いたのだから、これぞすなわちマンツウマンだと言って、父ちゃんはみんなを笑わせた。

おまけに、入園者家族に対し、入園時に最低三日の同居を義務つけたから、吉川親子を除いた母親達が、これにプラスされた。

万全の態勢の中で、すべて順調にすべり出したかのごとく思えたのだが、六人そろって十日もたたないうちに、最初の問題が起きた。

ち代ちゃんもゆきちゃんも、よう子ちゃんもしん一君も、みな施設やその他で団体生活の経験があるためすぐ慣れてくれたのだが、吉川親子だけ未経験者だった。案の定、六人中一番軽度者でものわかりがよいはずの吉川親子が、問題の発生源とたった。

仕方がないことかもしれないが、まず朝は二人共、起きない。起きないというよりも勝手に、好きな時に寝て好きな時に目がさめる。目がさめても寢床の中でぐだぐだしていて、さっぱり出てこない。次に、食べ過ぎる。食べ過ぎのため、動けない。口をきかない。職員の言うことを聞かない。さっちゃんなどは、腹いっぱい食べたあと、食卓に残っている食べものを盗むというおまけまでついた。夜、当直職員が見まわりに行くと、時々、食べ過ぎて、親子二人でげーげー吐いたりしていることもあった。

さっちゃんも母親も、毎日同じものを着ていて、それを脱ぎごうとしなかった。職員が見かねて着替えさせても、すぐまた同じものを捜し出して着てしまうのだった。さらに、この脱がないワンピースには大きなポケットが付いていて、天ぷらやその他の御飯のおかずを、このポケットに入れて持ち運ぶなど、職員を次々と驚かせた。

母ちゃんはそれを見ながら、入園前のこの半年間、父親に死に別れた二人に、いや応なしにのしかかった食生活の不安の重みを感じて、「不欄だ、不欄だ」と言いながら、はらはらと一人、涙をこぼしていた。

八月初旬、どかっと八人の子供達が加わった。

父ちゃんの息子政あき君を筆頭に、きよろきよろ外ばかり見てるとし明君、テンカン騒動第一号のかずのり君、慢性下痢のつかさ君、いたずらナンバーワンのみつのぶ君、重積テンカン患者なおと君、それから、作業能力なしのレットルを張られてよその成人施設を追い出されたい子さん、重症対人嫌悪症まち子ちゃんという、そうそうたるメンバーであった。

ほとんど全員、最重度者！

園は、たちまちのうちに大混乱状態に突入した。なかば予期していたとはいえず、十四人の重度、最重度者達は、十二人の直接指導職員を、あらゆる場面できりきり舞いさせた。

「敵は障害者経験平均二十年、対する職員は全員未経験者。勝敗の行方はおのずと知れたこと。全職員は集団玉碎せよ！」これが我が父ちゃんの、職員に対する最初の叱咤激励の言葉だった。

そして、職員達が最初に、好むと好まざるとにかかわらず取り組まれた仕事は、彼らに対する排尿便の訓練とあと始末なのだった。

ある日の朝、廊下で三人の女子職員が子供の便の始末をしていた。

「あーっ、駄目、駄目、ほら、手にうんちが付いてるわよ。いやーん、困っちゃう」どうやら、子供の手に便のひと固まりが握られているらしく、おまけに、その手でそこら中につかまろうとしている！

女性職員三人、大あわてで逃げまどっている。見てると結局三人共、便にまみれて、「臭い」「臭い」を連発。半泣きのいたらくで、着替えるため職員寮に逃げていく。

三人の職員が一人の子供の便の始末すら満足にできない姿を目のあたりにして、父ちゃんの施設観がぐらついていた。

親の会の要求である「他の施設経験者はいやだ」をばか正直に受けて、素人職員ばかり集めたせいなのかと、悩んでもいた。

(四)

最重度者の一人、まち子ちゃんの入園風景は、四年過ぎた今でも、古参職員達の語り草だ。

当時の日誌に、「まち子、女子二十一歳入園、玄関から園内にどうしても入ろうとせず、六時間しゃがみ込んだ末、ついに男子職員三人が、おみこしのようにかっぎ込む。その際、三人共、シャツをずたずたに引き裂かれる。二人部屋に入った彼

女 おしやか様のように座ったきり、動かず」と、こう書かれている。

実際、彼女は入園してから数カ月、日中は手ぬぐいを両手に持って顔を目まで隠し、部屋のすみにとつかとあぐらをかいて座ったきり、いっさい動こうとしなかった。

そして、人が近ようすると、自分に近づいてくる者はすべてが敵だと言わんばかりに、誰彼かまわずむしゃぶりついた。職員の誰かが近よると、必ず近づいた者の衣服や髪の毛を素早くつかんで、ねじるようにして力いっぱい引っ張るのだった。

体重八十キロ、身長一メートル四十センチの、あんな型の体格から繰り出される、むしゃぶりつく時の力には、はかり知れないものがあつた。そして、もちろん大小便はたれ流し状態で、彼女の着せ替えの時の騒動が、いつも見ものであつた。

人間不信！

ひと言でいえば簡単であるが、その症状に現われるものの奥深さに、職員達は息をのんだ。それからまた、彼女の行動の裏側にある人間らしさにも、はたと気づくものがあつた。

ある時、こんなことがあつた。何としても食堂に連れ出すことができなくて、食堂で園生の朝食が終わつたあと、いつも部屋で一人あとから食事をさせていたまち子ちゃんところに、小平先生が御飯を運ぶ前のごきげんうかがいのつもりでのぞきに行った。

ふと見ると、まち子ちゃんの座っている座布団の横に、太くてでっかいうんちがぽとんと落ちていて、部屋がすぐく臭い。

「うわーっ、これは大変だ」と小平先生、大急ぎで洗濯室にぞうきんと水バケツを取りに走っていつて戻ってくると、「ない」「不思議！うんちが消えてる！」

確かに、今さっきまで、まち子ちゃんの座っている座布団のわきに「ぽとん」と落ちていたはずの手榴弾のようなうんちの固まりが、どこかに消えてなくなつてゐるのだ。

「あれーえー？おかしいなあー？」

小平先生、きよろきよろとその辺に目をこらして例の物体を捜すと、「あらまあー、本当に不思議！」その物体、こちらのほうからあちらの部屋の中央まで、移動しているではないか！

多分、まち子ちゃんが自ら、こんなものは邪魔臭いと思って、例の手榴弾を敵前投下のごとく、引っつかんで「エイヤーッ」とばかりに投げたに違いない。

(五)

九月になると、またどっと重い子供達七人が入ってきた。

職員はすでに四人やめて、新たに三人補充されたから、差し引きすると前より一人足りない状態での受け入れだった。そのため、父ちゃんも母ちゃんも、毎日ぞうきん片手に、園内を一日中走っていた。

入園者の中に、北海道の施設から来た子が一人いた。

やっちゃんといって、慢性気管支炎、虚弱体質に加えて、足のしもやけ、凍傷のための歩行困難、重度知恵おくれの子だった。

「どんな事情があるか知りませんが、障害児だった一人を北海道の施設に預けておいて、七年も面会せずとは、あまりにもひど過ぎますよ」と言って、入園相談に来たやっちゃんの両親を前に、父ちゃんは怒っていた。

「なぜ、会いに行つてあげなかったのですか？」と、また語気を震わせながら、まるで自分の子が虐待されてきたかのように突っかかっていった。

夫婦はうなだれたままだった。見ると、二人共、涙をいっぱい目に溜めていた。しばらくの間、やっちゃんのお父さんが涙ながらに話す内容に、父ちゃんは黙って耳を傾けた。

「先生、私達だって人の親ですもの、我が子に会いたい気持は変わりありませんよ。だけど、会いたくても会いに行けなかったのですよ。あの子が生まれたばかりの時、高熱が出ましてねー、私達夫婦は医者に見せようとしたのですが、あの頃はおばあちゃんが元気で宗教やってたもんですから、ご祈禱すれば治ると言つて、その時、医者に見せられたかったんですよ。」

その後、おばあちゃんは、子供が障害児になったのは自分のせいだと言つて、自分が預かるからおまえ達夫婦はこの子から手を引けと言い出して、私達夫婦には子供をさわらせようとしないのですよ。

それからしばらくして、やっちゃんを北海道の施設に預けたのですが、その時も自分が保護者だと言い出して、私達には一步も近づけさせまいとするのです。

もつとも、私達も世帯持つてからこつち、いつも仕事がなくて食うや食わずだったから、最初はおばあちゃんに子供を預けて、それでいいことにしました。

北海道に住んでる頃は、それでも女房がおばあちゃんに内緒で、年に一、二度は子供に面会に行きました。だけど、私が出稼ぎに出るようになり、しまいに女房もこつちに一緒に出てくるようになってからは、もう会うことがなくなってしましました。

毎年、今年こそはやっちゃんに会いに行こうつて女房と話し合つたのですが、第一、汽車賃が稼げないんですよ。やっとうどうやらめどをつけておばあちゃんに電話をすると、来ちゃいけない、来ても会わせないと、こう言うのですよ」

聞き終わった父ちゃんは、しばらく黙っていた。どこか納得のいかないところがあった。（障害児の親は、なぜこみんな諦めてしまうのだろうか）とも思った。そして、やおら顔を上げると、「おばあちゃんが何と言おうが、自分の子供では

ありませんか。生活がどんなに苦しかろうが、置き去りにされた子供はどうするのですか。子供がかわいそうじゃないですか」と、また怒った。

面接の席に沈黙の時間が少し流れた。相変わらず、夫婦は下を向いたまま、並んで座っていた。

それから急に、やっちゃんのお父さんが椅子から立ち上がった。そして二、三歩横に出ると、床に正座するや手をつけて、父ちゃんを見上げた。

「先生、助けてくれ。俺達夫婦が七年間、どんなに悩んだかわからねーのは、そのことなんだ。子供がかわいそうで、子供に会いたくて会いたくて、寒きや寒いで、あいつまた、しもやけこさえて痛くて泣いているんじゃねーか、暑きや暑いで、汗もで痒くて眠れねーんじゃねーか、腹へらしてんじゃねーか、病氣してんじゃねーかって、俺達夫婦は、あいつを思い出しちゃ泣いてばかりいたんだよ。俺、この町に来て、これで二年目になるが、ここへ来るまでは、はえーとご飯場歩きやめて、同じところに住んで、あいつを連れてきて、一緒に暮らしてえと、どんなに思ったかわかんねーよ。先生、おねげーだ。こっちの施設で入れてくれると言やー、ばあちゃんも子供を手放すと言ってるし、俺も、施設にずーっと預かってくれてもくれなくても、今度はもう死ぬまで離れねーと、女房とも約束したんだ。おねげーだ、助けてくれ、助けてくれーっ」

やっちゃんのお父さんは、男泣きに泣きながら、訛りの強い言葉で、ここまで一気にしゃべった。そして、何度も何度も父ちゃんに向かって頭を下げた。いつの間にか、やっちゃんのお母さんも夫の隣に土下座して、うつむいたまま泣いていた。

夫婦の手を取って立たせようとしながら、父ちゃんも泣いていた。

「わかった。子供なんか、見なくてもいいよ。必ず入れてあげるよ」と念を押すように言いながら、あふれ出る涙を、拭こうとしなかった。

(六)

言葉があっても単語ばかり、あとはほとんど母音の騒音の中に、会話のできる子が一人、入園してきた。

誰が見ても可愛くてあどけない感じで、名はきみ子と言った。

入園の日、母親が「きみ子が、もしかしたら、しゃべれなくなってしまうのでは」と言った。

多分、園の子供達の大半が「あー、うー、いー」ばかりなので、そんな心配をしたのだらうと思うが、聞いていた父ちゃんは少しむっとした。

しかし、母親の心配も仕方ないと思ひ直して、「お母さん、心配いりませんよ。子供達はしゃべれないけど、うちの先生達は必要以上によくしゃべるから」と言っ

てあげた。

きみ子ちゃんは母親の心配などどこ吹く風と言わんばかりに、翌日からぺらぺらとのべつまくなしだ。

「おい、その彼氏ーっ、ちょっとおいっ」呼ばれた職員は一瞬きょつとして振り返る。

「まったく可愛い顔して、何て口が悪いのだろう」とたまげているところへ、「ねーねー、ビール飲んで、ジュース飲んで、結婚しようよ」と追い打ちをかけられ、二度びっくりする。

二、三日のうちに、光生園の男子職員、総なめの被害に会う。

中でもひどい目に会ったのは、父ちゃんだ。きみ子ちゃん、何を思ったか、父ちゃんにまで「ねーねー、結婚しようよ」と言うので、茶目っ気を起こした父ちゃん、ちよつとからかってやれとばかりに、「うん、しようよ」と返事すると、「おじいは、いやだよ」と言われ、「ギャフン」となってしまった。

以来しばらく、父ちゃんは老齡嫌悪症にかかってしまって、立ち直れない。

それにもう一人、被害者を紹介する。

慎二先生は園一番の女性恐怖症！女性に「ねーねー」などと言い寄られたら、それこそ大変。相手が誰でも、心臓がドキーンと鳴って、みるみるうちに顔が真っ赤になる。

本人、一生懸命、照れ隠しながら、「こらーっ、何てことを言うんだ」などどどなりつけてはいるが、まんざらでもないらしく、顔はにしゃらにしゃら笑ってる。彼もやつぱり、青春真っ盛りらしい。

それを隣で見ていた渡辺先生、「えへっへー、慎二先生、照れてる。女性に求婚されるの、あとにも先にも、きみ子だけかもねー」と茶化す。

「うわー、それはひどい、ひどいよ」と慎二先生、渡辺先生を追いまわす。

二人の職員が、プレールームの中を「ギャー、ギャー」と騒ぎながら、追いつ追われつしている。

今度は、それを見ていた子供達、「わあーっ、わあーっ」と歓声を上げて、はやす。まったく、光生園はにぎやかだ。

便所が主戦場だ！

(一)

開園の年、子供達は、七、八、九月に引き続いて、十、十一月と増え続けて、十二月には三十二人になっていた。

その間、職員も若干増加したが、その比においては、すでに二対一を割っていた。

すなわち、直接処遇職員十四人に対して、園生三十二人であるから、マンツウマンは、すでに昔の話となった。

そして、たびたび書いてきたが、ほとんどの子供は言葉を持たず、その上、御飯が一人で食べられない、おしっこがたれ流し、着脱衣ができないなど、それぞれこれらの症状をあわせ持ち、おまけに虚弱体質やわずかしか歩けないなど、中には二十三年間在宅で親以外の人間と交わったことがないというすごい者までいて、どの子も命を守るだけが精一杯というぎりぎりのところで、職員達の彼らに対する処遇は踏みとどまっていた。

いったい園はこれからどうなるのかと、心配される日々でもあった。

当時、すでに、加藤園長の指示で、本格的な排泄便の管理と訓練がおこなわれていたのだが、もひとつ効果が上がらず、彼らは時と場所を選ばないで、ジャージャー、ポタンポタンと、勝手にやりまくっていた。

ずーっとあとで部屋割りは重軽混合になったが、当時は少し軽いほうが二階、重いほうは一階という具合に分けられていて、一階の重度者居室は、まるで便所と化し、その臭いにおいに鼻をつまむほどになっていた。

臭くない施設を経営したいという父ちゃんの夢は、開園半年にしてあえなく消え去らんとしていた。

とにかく、臭いにおいを消さねば！

ある日、母ちゃんが、昔、子供が家でおしめをした頃、そのおしめ洗いの時のおい消しに塩素系漂白剤を使ったことを思い出し、これを薄めて床を拭き取ることを考えついた。

以来、毎日、職員達は水バケツに漂白剤を割り、ぞうきんを入れて持ち歩くようになった。

時々、父ちゃんは、朝礼の席などで職員達をつかまえて、「便所が主戦場だ」と叱咤激励もした。

(二)

豊岡光生園の職員は、重度者の排泄便介助を、男女の差別をしないでやることになっている。

すなわち、女子職員が男子園生を、男子職員が女子園生を、男女のこだわりなく、介助できるようにせよ、ということなのだが、これがなかなか、言うは簡単だが、おこなう段になると大変むずかしい。

若い女子職員が、髭もじゃの自分より背の高い大男をトイレに連れていく姿などを見ると、実際、父ちゃんはいつも心の中で、「すまないなあー」と思うのである。

男女差別のことで、最初の頃こんなことがあった。

開園後、確か三回目の保護者会の日だったと思う。親達がごった返してる中で、男の子がロビーの中央で、おしっこをしたままお尻を濡らして座っていた。たまたまその時、どういうわけか男子職員がその場に一人もいなくて、女子職員のみが三人働いていた。

どうやら三人共、気がついていらしいのだが、誰も、彼を着替えに連れていくとしない。そのうちに、施設建設に参加した父兄がこれに気づいて、いたたまれなくなったらしく、事務所にどなり込んでくるに及んだ。「いったいこの施設は、職員の教育をどのようにやってるのですか」と、すごいけんまくである。多分、こんなことを言うてくる父兄がいるのも、豊岡光生園の特徴なのだが、言われた父ちゃん、さあー大変！ 緊急職員会議を招集する。

そして、なかば強引に、男女差別なしを押しつけることになる。
さて、ある日、こんなことがあった。

慎二先生が、女の子の排尿介助をすることになった。

彼、いつものように子供を便器にしゃがませると、どうも様子が変わた。最初、怪我でもしたかなと思っただが、すぐ、月に一度のあれと気づく。しかし、あれと気づいても、若い男が、いきなり手が出せるものじゃない。男にしてみりゃ、一大事なのである。

「まず、気持を落ち着けよう」そう思った彼は、しばし、連れてきた子供のそばにしゃがみ込む。そして考えてみる。「えーっと、何だっけ、あっそうだ、ナプキンとかいふものが必要なんだ」

それから、急いで物置庫に行つてナプキンをひとつ持ってくる。包装を取り、じっくり眺める。はてさて、どちらが表か、はたまた裏か、そして前後は？ 男の彼にわかるうはずがない。

女の子は、依然として座らせたままだ。そうこうしているうちに、またもうひとつ悩みが増える。「いったいこのことを、女子職員に聞くべきか、否か？」という悩みだ。どう考えてみても、年頃の男が年頃の女性に、これ、どっちが表で、どっちが裏かい」などと、照れ臭くて聞けるもんじゃない。

慎二先生、時間の経過と共に少々あわてて、例のものをポケットにしまい込むと、事務所の父ちゃんのところへすつ飛んできた。

すでにせっぱつまっている彼は、父ちゃんに來客中のことなど、眼中になし。「あのう、これ、どっち、が表ですか？」と言いながら、いきなり例のものをポケットから取り出して、父ちゃんの目の前に突き出した。ちやうどそこに居合わせた保険外交員のおばさんは、「キャーッ、やだわ、もう」と叫びな、がら、目をそむけて飛び上がった。

例のもので、もうひとつエピソードを話そう。

渡辺先生は、奥さんも子供もいるが、やはり例のものなど知るはずがない。

ある時、重慶棟一階の女子便所(重慶棟の便所は扉の上平分が切り込んであって、外から覗けるようになっていて)で、ゆきちゃんがナプキンを壊しているのを発見! 「こらーっ、ゆき江ーっ、何してるんだ、そんなもの壊すんじゃないよ。レットルなんかは、がしちゃ駄目じゃないか」と言ってる。注意したのはいいのだが、ゆきちゃんの持っていたナプキンを取り上げてじーっとよく見ると、「このレットルをはがして、お使いください」と書いてある。見ているうちに、レットルをはがした下の部分の接着剤が布地に張りついて、ずれないしくみになっていることに気づく。

「しまった」と思ったが、あとの祭り。

渡辺先生、ばつが悪くなって「ゆきちゃん、ごめんな。これ、はがして使ったほうが、いいみたいだね」と言いながら、頭をかいている。

(二)

排便訓練は、なかなか大変な仕事だ。

それこそ、訓練中の園生と職員は、文字通り、臭い仲にならねばならない。下痢などのおつき合いをし、食事にカレーライスが出ると、たいがいのは「うえーっ、げーっ」となるのだが、我が光生園の職員は「平気、平気」とばかりに、お替わりする猛者もいる。

いつの頃からか、訓練対象者も一人減り二人減りして、十四、五人はいたのに、近頃はあと三人というところまでこぎつけたらしい。

あと二人、このところ職員達、この三人にめがけて、総攻撃を開始する。

三人共、まだいき張ることができず、定時排便のスケジュールに乗らない。必然的に、大小共に、時々失敗する。

ある日のこと、女子棟の便所で、三人のうちの一人であるあけみちゃんが、排便訓練の真っ最中であつた。小さい体だが達磨スタイルの彼女、また少し太り気味で、いよいよしゃがむのが大変!。今しも、「あけみーっ、ほら、しゃがんで、しゃがんで」と声かけに余念がないのは、川崎先生だ。どうやら、やつとしゃがんだようだが、まだ中腰の様子。先生はあけみちゃんの肩に手を添えて、ぐぐーっと下に押えつけている。

「うーん、うーん、うーん」

いき張りの合図を見ると、「ブーッ」と大きな空砲が一発。あとは、さっぱり手応えがない。頃合をみて、今日はもう駄目らしいと諦めた川崎先生、「いいよ、ほら、立ちなさい」と言いながら彼女を立たせようとすると、「あわわーっ、あわわーっ」とあわてふためいた様子で、両手で空を泳ぐしぐさをしている。よく見ると、あけみちゃんの少しとんがったお尻の一部が、便器にはまって抜けないのである。

(四)

前著『生きよ仲間たち』にも書かれてあるが、光生園のトイレは、せまいたがらも実に機能的にできている。

汚れたお尻を洗うために、四季を通じていつも出る温かいシャワーとか、汚物を一気に洗える大きい汚物洗い場などだ。そして、何といっても父ちゃんの自慢は、トイレ内部の設計である。便器の前には、ちょうど手でつかむのに手頃なパイプのバーが取り付けてあって、おまけに便器の据え付け方が、職員が子供と一緒に入って、顔を見たりお尻を見たりするのに都合良くできている。すなわち、入口から見ると、便器が斜めに据え付けてある。

がしかし、いくら設備が良くても、これをうまく使ってもらわねば、何にもならない。

最初の頃、便所はうなり声が充満していた。つまり、排尿便訓練で最初に父ちゃんが職員達に対して出した指示は、「子供と一緒に便所に入って、自分のうんちが出なくなるほど、うーんうーんとうなって、いき張って見せろ」だった。

職員達は、毎日毎日、たれ流し状態の子供達を排尿便管理表に合わせて便所に連れ込むと、「うーん、うーん」と盛んにうなり始めたのだった。相当あとになってから、大は「うーん」、小は「しーっ」になったが、当時は、「うーん」一本やりだった。

「うーん」のことで、こんな話がある。

ある職員「ぼくは、あのいき張りの合図の『うーん』という声を出してるうち、父ちゃんの『自分のうんちが出なくなるほど』という言葉通り、本当に出たくなってしまうのです」と言う。

そして彼、重ねていわく、一度などは本当に自分のほうが忙しくなってしまうって、始末に大わらわだったとのこと、これなどは、便所の前の廊下で彼の「うーん」の声を聞いたたびに、父ちゃん一人で「くすくす」と想い出し笑いをしている。

(五)

とし明君は二十七歳、少し情緒障害気味だが、園ではわりあい知能が高いほうだ。言葉も少しある。

入園の時、それまで措置されていたK児童施設の先生が、付き添いで一緒に来た。彼は、光生園に到着するや五分もたたないうちに、「おっこちた」「おっこちた」と、かん高い声で騒ぎ出した。

何事かと光生園職員一同、あ然として見ると、付き添いで来たK児童施設の先生が、実はうんちをパンツの中に落としたと言っているのだ、と教えてくれた。

以来約一年、彼は光生園でも、「おっこちた」「おっこちた」「すみません」「すみません」と言って、職員達を悩ませ続けた。

開園の翌年だった。一周年記念日を前に福祉祭りを企画、そのためのグラウンドの整備に職員、園生の総力を上げていた時のことだった。

とし明君は前の施設でみっちり仕込まれたらしく、土運びの一輪車押しでは園内随一、かなう者がいないほど、うまい。すいすいと土運びにすっかり調子に乗って、時々、男子職員と一輪車を並べて競争までしていた。

急ぎ過ぎたのか、それともあつちのほうが忙しくてゆれたのか、いずれにしてもちょうどその時、土の固まりがひとつ、一輪車から「ころころっ」ところがり落ちた。そして、彼は押していた一輪車を急に止めると、「おっこちた。おっこちた」と黄色い声を張り上げた。

並んで一輪車を押していた職員は、立ち止まると土の固まりを指さして、「落ちたら拾えばいいじゃないか」と言った。

しかし、彼は妙な顔をして、違うと言わんばかりに首を横に振っている。

「なんだ、おっこちたのはうんちのほうか？」

「すみません、すみません。あはははは」

どうやら、職員が土の固まりとうんちを間違えたことが、とし明君はおかしらしい。職員にしてみりゃ、「冗談じゃないよ」と言いたいところだ。

そんなとし明君にも、大のほうの「おっこちた」に、とうとうおさらばする時が来る。

二年目の夏休み、父ちゃんは家に帰れない子を自宅に引き取った。

夏休みは、家に帰れる子にとってはうれしいが、帰れない子は寂しい。父ちゃん、一大決心をして、園残留組全員と我が子達を連れて、旅行に行くことにする。

行き先は鬼怒川温泉！

いよいよ明日、出発の前の晩。

とし明君が数日前より排便がないのをしおに、父ちゃん、彼の排便訓練をおこなう。

最初やさしく、「おい、とし明、明日みんなで旅行してる時、途中で『おっこちた』になっても始末に困るからな、俺と一緒に便所へ行って、『おっこちた』をしようよ」などと語りかけているが、敵はなかなか、そんな程度では言うことを聞かない。

半時もやりとりしているうちに、父ちゃん、ついにどなり出す。

「ころっ、うんちをやらないと、明日、旅先で、『おっこちた』になるじゃないか。やれーっ、やれーっ」

しまいにはお尻をまくって、ぴしゃりぴしゃり叩く始末。もう、そのすさまじさといったら、今までの職員達の、こういう時の対決の比ではない。

おまけに、お尻を見ると、少し「おっこちた」が覗いているので、父ちゃん、今がチャンスとばかりに、益々エスカレートする。

とし明君は、「ひえーっ、ひえーっ、助けてーっ」と悲鳴を上げながら逃げまど

う。

それでも、父ちゃんはやめようとしな。あまりのものすごさに逃げまどつて

いた彼、何を思ったか、和式便所に飛び込むや、いきなりしゃがみ込んでしま

う。今まで、和式便所には絶対にしゃがめなかった。もしかしたら、和式便所に何かこたわりか恐怖感を持っているのか、それでなければ、ひよっとしたら膝の関節に何らかの欠陥があつて、それでしゃがめないのじゃないだろうか、などと思つていたほどだから、さあー大変。ばれてしまったからには、職員達、放っておくはずがない。

「こらーっ、今まで、この一年間、先生をだましやがって、おまえ、しゃがめるじやたいか、しゃがめーっ、しゃがめーっ、いき張れーっ、うーん、うーん」

まあ、ざっとこんな調子で、職員達からの十字砲火を浴びて、あれよあれよという間に、「おっこちた」とおさらばする。

時々、「できた」「できた」と言いながら、自ら手を叩いていると、職員に、「えらいぞ、よしよし」などとほめられている。



▲食事準備。さっちゃんは盛り付けも大変上手になりました。

▼「先生、これハードルには少し高過ぎないかい」



(一)

こんな山奥に、特別優秀な人が集まるわけではない。
がしかし、父ちゃんに言わせると、我が愛する職員達は、折紙付きの特級品ということになる。

多分それは、ここの重度の子供達が職員達に対して、無言の影響を及ぼすせいなのかもしれない。

「もたもたするな。しっかりやれ」

「人の立場になって、判断しろ」

「生きるこの意味を、まじめに考えてみる」

日頃、園生達は、職員達を見つめるそのまたぎしで、こんなふうに語りかけているのかもしれない。

そんな雰囲気の中でも、何人かの人はそれぞれの理由で挫折して職場を去り、何人かの人は結婚や家庭の事情で、やはり去っていった。中には次の飛躍をなしとげた者もいるが、今いる者も去っていく者も、若者達の将来を思うと、父ちゃんの胸はきりきりと痛む。

そして子供達を守るために、毎年、何人かの新規採用職員を迎える。

忙しさにまぎれて、園長も父ちゃんも、新しく迎えた彼らのための新職員研修を、充分にやってあげることができない。けれど不思議なことに、彼らは三カ月もたつと、もういっぽしの職員となり、まるで水の中の魚のように、すいすいと園内を泳ぎまわる。しかも、プロ意識まる出しで、そこらのボランティアなど足元にも寄せつけない。

もちろん、古い職員達が手とり足とりで新職員に一生懸命に教えるのだが、ただそれだけではない。最重度障害児(者)の最後の砦に來たという実感は、新職員達の意識をすっかり改革してしまいうらしい。

ちなみに、こんな話がある。

豊岡光生園では、毎年、女子短大生の職場実習を引き受けているのだが、彼女達が十日間の実習を終えて帰ると、必ず大学の先生やその父母達から、何がしかの問い合わせやお礼の電話が入る。

「いったいお宅では、実習教育をどんたふうに行っているのですか？ 学生がすっかり見違えるほど立派になってしまいましてねー」などとお世辞を言われると、何もやってない父ちゃんほどまどってしまふ。

実際に、実習生達は、我が園生達がおぼつかない手つきで食事をしている風景などをを見ると、思わず涙ぐんでしまいうらしく、園生達の暮らしている様子が、すべて

感動の対象になってしまふようだ。

そんなわけで、十日間の実習が終わっても、彼女達は誰一人として、まっすぐさっさと帰っていく者などいない。別れを惜しんで、たいがいはいつまでもぐずぐずして、もう一日もう一日と、泊まり込んでしまふのである。

(一)

職員紹介の手始めに、加藤園長就任の話からせねばなるまい。もともと加藤さんに、園長をやってもらう予定ではなかった。

昭和五十五年七月開園当時、父ちゃんは施設創設者として、三日にあげず千葉県社会部障害福祉課に呼び出されて、あれこれと指示を受けていたのだが、いつも係官の前で小さくならざるを得ないことがひとつあった。すなわち、園長が決まっていなかったのである。

精神薄弱者更生施設の園長は、その資格基準が大変やかましい。ちなみに法律の一部をここに一記すと、「精神薄弱者援護施設」の長は、社会福祉事業に五年以上従事した者であつて、施設を運営するに適切であると認められる者。もしくは、精神衛生に関して、相当学識経験を有する医師」と、こう書かれている。つまり、施設で五年以上働いた者が精神科の医者を探してこなければならぬ。

もともとは決まっていたのだが、途中でキャンセルされたまま、あと釜が決まらなかったのである。

「園長、決まりましたか？」

係官はにがりきつた表情で、父ちゃんをせめたてた。

「はい。いいえ」

父ちゃんは困りはてて、消え入りそうだった。十指にあまる候補者を訪ね歩いてすべて断られ、もう処置なしと思っていた。腹の中では、せっかく苦心して建てた施設だから、それにふさわしい人物をと思いつながらも、あんな山の中じゃ誰も来ないさなどと、ふてくされてもいた。

六月の終わり頃、あと十日で開園式というある日の職員会議、いや多分酒盛りパーティー気味の打ち合わせ会だった。

父ちゃんはどうやら、腹を決めたらしい。素人職員達の中に、ついひと月ほど前に自分で訪ねてきて採用が決まった、たった一人の有資格者がいた。

新潟県出身、この時三十歳、仏教大学社会福祉学科通信教育課程卒業、精神薄弱児施設の勤務経験七年である加藤さんだった。

何のことはない。父兄は経験者を嫌っているが、頭数が足りないから一人ぐらいはいいだろうという軽い気持で、採用を決めた人物である。

よし、もう彼しかいない。園長には少し若すぎるようだが、そのうちに年もとる

さと思った父ちゃんは、職員達に酒をすすめながら、

「おい、みんなどうだろう。加藤さんに園長をやってもらおうと思うのだけど」と話しかけた。

職員達は酒のせい、軽く受け流していた。

「あ、いいですね。園長なんか誰だっていいじゃないすか」

「そうだそうだ」「賛成」「賛成」

加藤さんは、まったくそんなつもりなどないのに、父ちゃんがいきなり酒の席で大変なことを言い出したので、びっくりしていた。

「おい、おい、冗談がきついよ。園長は、もっと立派な人を父ちゃんに捜してもらおうよ」と、加藤さんは酔っぱらったいきおいで自分が園長にされてしまうのを、懸命に防ごうとしていた。

父ちゃんは強引だった。

「やかましい。命令だ。加藤さん、今日から園長。みんな文句あるか？」

「ない、ない」「わあーい賛成」「賛成」

ぱちぱちと拍手が鳴った。こうして園長が決まった。

(三)

浅黒、長身、若さはつらつの園長に率いられる職員達の紹介に移ろう。

生活指導主任の館野先生のこととは、すでに多少紹介済みなので簡単にしておく。

彼は栃木県の農家の三男坊だ。ちよつと甘いマスクが特徴で、頭はきれるがなぜか気分屋で、落ち込んだり浮かび上がったりが激しい。開園の時、男子職員中最年少だったが、四年過ぎてみると、人間がひとまわり大きくなったようだ。

そしてもう一人主任がいる。鳥居先生。特異な存在である。

小児麻痺による運動機能障害者で、日本社会事業大学を卒業した努力家であるが、障害がわずわいして、学校を卒業しても、まともな就職をすることができないでいた。

彼が父ちゃんの前に現われたのは、昭和五十五年の八月だった。

履歴書に一通の手紙が添えてあって、その手紙には「どこの職場も、面接するだけで、断られてきました。私を見ただけで追い返さないで、ためしてみたいだけだと思います。お願いします」と書かれてあった。

父ちゃんは実際、ちよつといやな気がした。まるで押し売りされているような気持ちだったが、相手の立場を考えると、仕方がないとも思った。どんなふうにテストしてほしいのかとたずねると、二ヵ月間、ただ働きをやりたいたいと言ったのだ。

さっそく翌日から彼のただ働き、すなわちボランティア活動が始まった。たどたどしい言葉は、初対面であがってしまった時に限るらしく、慣れるとまあ何とか通

常の会話には困ることがないことがわかり、父ちゃんもひとまず安心した。

一カ月が過ぎた。開園当時の一カ月は大変な日々だった。しかし彼はすっかり園になじんでしまって、誰もが、ボランティアであることを忘れかけていた。

ある晩、子供達をやっと寝かしつけて、父ちゃんが事務所で一服していると、鳥居先生が入ってきた。

「父ちゃん、俺もういいですよ。このへんで決めてくれませんか」と言うのだった。父ちゃんはそれを聞いて、にたにた笑っていた。

「何だ、二カ月のただ働きのはずだったじゃないか」と、少し意地悪くからかうと、「だって、これじゃ針のむしろですよ。毎日、雇ってもらうためのテスト中だと思うと、気が重くてやりきれないですよ」と言う。

翌日の職員会議での投票によって、彼の採用が決まった。そしてこの時から、豊岡光生園に就職する者はすべて、四日以上ボランティアテストを受けて、職員達の投票の洗礼を受けることが実施されるようになった。

次は二人の主事達である。慎二先生、岡田先生は開園組で、卓見先生は翌年採用である。

慎二先生のこととは前に書いたので、岡田先生から始める。自衛隊出身、年齢三十歳。いまだ独身で、とても気が若い。女子職員達に言わせると相当おしゃれであるそうだが、どうも父ちゃんには、彼の服装がなじめない。「岡田君、何だそのズボンのカギ裂きは」などと時々怒ったりしようものなら、彼氏、妙な顔をして見せる。あとで聞いてみると、ボロルックという流行なのだそうだが、どう説明されても、父ちゃんには最後までわからない。面倒臭くなって、「いいかげんにしろ、子供達に悪影響を及ぼすじゃないか」とまた怒ると、「はい。明日から着ません」と大変素直である。

卓見先生は男子職員中一番太っているのに、仕事の手が非常に速い。宙を飛ぶとは彼のような人をいうのじゃないかと思う。彼もやさしい人だ。代議士の秘書をやっていたという変わり種でもある。

(四)

直接子供達を指導している職員は十八人いて、間接職員の厨房、事務、洗濯、用務員などは九人いる。直接指導員のうち先ほど紹介した人のほかは五十七、五十八年採用組である。いかに人が入れ替わるか、これでわかと思う。したがって、この本に登場する職員の半分は、すでにやめた人達である。

職員の給料は安い。しかも仕事は大変きつい。だから、まるで消耗品のように彼らは消えていく。

施設職員の給料は、国家公務員の一般給与表が適用される。教職員のような特別

職給与ではない。

おまけに二十四時間、園で生活している子供達を処遇するためには、早出、遅出、当直、夜勤という具合に、めまぐるしく勤務が変わらざるを得ない。

彼らは子供達への愛情から、勤務時間外も園に残って何がしかの仕事をしているが、限られた者以外はほとんど無料奉仕である。退職金もわずかで、先の保障も公務員とは比べものにならない。

もうひとつ大変なことがある。就職して一年も過ぎると、ほとんどの者が腰痛を訴えるようになる。労災保険には加入しているが、その判定がむずかしくて、実際に適用された者は、我が豊岡光生園には一人もない。腰痛の原因は言わずと知れたことで、あの体重の重い我が園生達の介助のせいとはつきりしているのに、いつ、どこで、何をしていて、どうたったという因果関係が明らかにならないと適用されないのである。

そんなわけで、時々職員達から腰の痛みを訴えられると、父ちゃんはまったくもう、どうにもやりきれない気持ちになってしまふ。

給与の問題も同じだ。時々職員達と一杯飲むと、この話が出る。

「父ちゃん、今、給料いくらもらってるの？年齢は？」と、知ってるくせに意地悪く聞く者がいる。仕方なしに何度でも正直に答える。父ちゃんの給料は事務長職で、園長職に準じて決められ、今、五等級十九号俸、すなわち手取り約二十万円だ。

職員達は、「もうすぐ五十歳で手取り二十万円が見本じゃ、俺達、所帯を持っても、子供も育てられないよ。お先真つ暗じゃないか」と言う。父ちゃんにしてみれば、今のままでは若い彼らに対して、生涯かけてこの仕事をやれとは、口が裂けても言えないのである。

職員達がやめていくのは、もちろん給料の安さや仕事のきつさばかりではない。ほかにもいろいろ理由があるが、そのうち特に多いのは、女子職員の結婚退職である。おめでたいことだから祝ってあげねばならないことなのだが、父ちゃん、これまたやりきれない。せっかく仕事を憶えたと思ったら、退職してしまうからだ。

この項を書きながら、父ちゃんの胸には、彼らの労働条件もだが、せめて給料だけでも、仕事に見合ったものにしてあげたいという思いが、切ないほどわいてくる。

(五)

給料の話が出たところで、施設運営のことについて書いておこうと思う。

精神薄弱者更生施設は、費用徴収の方法が特別養護老人ホームの場合とよく似ていて、入所者居住地の市町村役場に対して、毎月決められた処遇費用（措置費という）を請求する方法をとっている。

そして、入所者の保護者は、施設に対してではなく居住地の市町村に対して、何

がしかの費用を支払うことになっている。保護者が市町村に支払う金額は、保護者自身が前年度に支払った所得税によって決められる。ちなみにその金額は、月に最低三千五百円から最高は措置費全額（約十九万円）まで十六段階に分けられる。

施設は入所者居住地の市町村から直接費用を一律にいただくしくみになっていて、収容人員かける一定額が施設運営費の基本となる。常に定員を満杯にしなければ、円滑な経営ができないしくみなのだ。

費用について、もう少し詳しくわしく説明しよう。

措置費は、事業費と事務費に分かれている。事業費は入所者の直接生活費や訓練費に当てられ、事務費は職員の給料と事務管理費に当てられる。そして事務費のほうは、施設が建っている場所によって、規模によって、単価が少しずつ違うという複雑なしくみになっている。

豊岡光生園では、昭和五十八年度現在、事業費が月額三万八千八百四十円で、事務費が十一万六千七百七十円である。通常はこれにいくらかの県補助金などが加わるわけだが、重度者の場合は、さらに人件費加算（重度加算費）が加わる。一律に三万二千四百円である。つまり合計すると月額約二十万円で、四十人だと年間約一億円にもなる。

県の指導によると、概略七五パーセントを人件費、事務管理費とし、二五パーセントを入所者の処遇に当てることになっている。そして指導の内容は細かく、その使い道についても分かれていて複雑である。しかも毎年、指導された通り使われているかの監査も実施されている。

そんなわけで、父ちゃんの開園の翌年から「お金がいくら入ってきて、何にいくら使うべきか、あらかじめほとんど決まっている経営なんて、誰がやっても同じだよ。今日から君達にすべての園の財政をまかせるから、みんなで相談して好きにやってくれ」と言って、施設会計の予算、決算のすべてを、職員達にまかせてしまった。つまり、自主管理方式としたわけで、毎年選出される四人の委員が、園の財政を切り盛りするわけである。

若い彼らは一億円の財政を握ることで、最初は大変張り切るのだが、実際に三月の予算編成時期になると、消沈してしまう。一番の難題は、自分達の昇給率を自分達ではじき出すという問題である。つまり給料を上げようとする、事務管理費、園生生活費、訓練費など諸々の費用を切りつめねばならず、かといって給料も上げないわけにいかずというジレンマに立たされる。

そして、予算委員達は口々に、「父ちゃんに一杯くわされた。好きにやってくれと言われても、ちっとも好きになどやれないじゃないか。これじゃ文句の持っていない場所もないよ」と言って嘆くことになる。

豊岡光生園の場合、法人会計は毎年二千万円以上の寄付金を集めて、施設建設の時に借り入れた借金年間元利合計一千五百万円を返済し、残りを使って措置費でま

かないきれない大型設備機器を整備し、おまけに施設会計の赤字まで補充するという大役を背負っている。

父ちゃんの一番大切な仕事は、金集めである。金集めはしんどい仕事だ。これだけは、若い職員達にまかせられないと思っている。だから風邪でもひいて寝込んだりすると、職員達は大騒ぎになる。

「大変だ、金づるが寝込んだよ」このくらいならまだいいほうで、中には「しっかりしてくれよ。借金まだ終わってないぞ。寝込んでなんかいられないだろう」と、おどかさず者までいる。

そこで父ちゃんも負けずに、「やかましい。おまえ達は俺のことを、集金器くらいにしか思っていないのか。借金がなくなったらお払い箱か」と言ってふてくされたりする。

父ちゃんの金集めは、子供達と職員と親達の限らない明日への夢にもつながっている。いつの日にか、最重度障害児(者)のための寝たきり施設を作るのが、最終目的である。

(六)

若い職員達に少しでもやる気を起こさせるために導入した自主管理方式は、園全体に活力を生み出したようだ。

その後、訓練指導面や行事、日用品の管理、新聞発行、職員研修制度など、あらゆる面でこの方法が取り入れられ、園の運営は表面上はすべてうまくいっているように見えてきた。

がしかし、一方では四年の間に、現代若者気質が生み出す、種々のトラブルが発生し、そのつど、父ちゃんはおおいに悩まされた。

開園の年、昭和五十五年は、職員達の派閥争いが問題化した。彼らは、学校別グループ、のんべえグループ、軽度者処遇グループ、重度者処遇グループ、男子グループ、女子グループ、お絵かきグループ、その他いろいろで、あらゆる場所で派閥を作り、その争いのために様々な問題を発生させた。職員達の中には、意見が合わないと言口をきかないという異端者まで出て、父ちゃんをいたく悩ませた。

思いあまった父ちゃんは、主任主事制度を導入して、彼らの身分の上下や役割をはっきりさせることによって、これを封じた。

翌年には、一人の男子職員と二人の女子職員の三角関係事件が発覚した。若い職員達から少々のこととは思っていた父ちゃんも、ついに「恥を知れ」と怒ったが、プライベートな問題だと言って、当事者達は聞き直って見せた。結局、親まで出てきて大騒ぎとなったが、三人共退職して今はいない。

さらにその翌年には、新人職員が子供を怪我させるなど、どこの職場にもありが

ちな事件が次々と起きている。

若者達と暮らしていきながら、父ちゃんは時々こう思うのである。時の流れには誰も勝てない。いずこも誰も同じじゃないか。若者達と数多く語り合いながら、一生懸命生きて見せるしか、方法がないではないかと。

第二章 豊岡光生園の光景



光ある家のいわれ

(一)

クリスマス夜想詩

雪の降る寒い夜
エルサレムの村に
赤ん坊が生まれました
玉のような男の子でした

生まれた子は
神の子イエスでした

お産婆さんが雪を握りしめて
天に向かって祈ると
油になりました

そして彼方から
ひとすじの光がさして
灯がともりました

一番初めのクリスマスイブは
きつとそんな夜だったのです

(二)

千葉県富津市豊岡と、遠い西洋のエルサレムには、どこも共通なところなどない。
今から約二千年の昔、神の子イエスが、エルサレムに生まれたという。はしがき
では、神の子、天使を否定したが、もしもふたたび、神が地上にその申し子を使者
として下げわたすとすれば、多分、今度は、何も言わぬ子を東洋の片すみに、ま
めて四十人、などと夢見る父ちゃん。

子供達と日々を暮らしながら、そのにこりなき瞳に、いつも魅せられてしまう。

生きる日々

(一)

光ある家の光景 その一

豊岡光牛園では

時々、二階の窓から

赤シャツと赤帽が

青空に舞い上がる

……

とし明君のものだ

……

とし明君は

黄金色のお宝を

パンツの中に落として

「おっこちたおっこちた」

「すいません」と言う

……

言われた先生

ぞうきん片手に

廊下を走る

政あき君のあだ名は

ベートーベンだ

時々 顔をゆがめて

頭を掻きむしるからだ

……

だけどいつもは

「エヘヘエヘ」とよく笑う

つかさ君も笑いながら

たったひと言だけ

先生に向かって「バカ」と言う

言われた先生

「俺本当にバカかも？」と悩む

ゆきちゃんは

散歩のたびに草をむしる

青汁にふれて

顔がかぶれると

先生が「変な顔」と教える

さっそく、来客に向かって

「変な顔」と言う

言われた客は

少し「むっ」となる

その時 間一髪

続いて「我慢 我慢」と軽くいなす

ひろ美ちゃんはひもみちゃん

ひも一本相手に

一日中たわむれる

たあちゃんは

トランポリンの王者

夜明けの五時から

吹き抜けの天井に

高く舞い上がる

光ある家の光景 その二

十二月

光生蘭のまわりの

山々の木が

葉を落として

はだかになると

子供達は

みんなそろって風邪をひく

よせばいいのに

職員達もおつき合ひ

ハアックシヨン

ヘックシヨン

鼻水 ジュルル

毎日南側の山を見る

杉木立の影に

お日様隠れんぼ

だんだん見えなくなつて

「おー寒 こ寒」

朝 七時

先生の早出は

寒くてきびしいねー

窓を開けて

子供達を起こすのは

かわいそうだねー

光ある家の光景 その三

「みなさん 今日は バスの日ですよ」

「わあーい きゃーっ」

中にはうれしさあまつて

飛び上がる子もいる

たい子さんは

なぜかバスを「バッチ」と言う

「バッチ バッチねー いいねー」

「ママママママ バッチねー」

初めて聞いた人

何のことやらさっぱりわからない

ながい君も「うんうん」と、言いながら
身振り手振りよろしく

バス運転の真似をする
ギヤーチェンジもできる

やすひろ君かた言だけど
バスに敬意を示して

「アンコバス」と言う
アンコバスは「観光バス」である

まち子ちゃんバスが走ると
床を「どーん」と踏み鳴らして
大声で「ウギヤアー」とうなる
しかし顔はにこにこ笑ってる

光ある家の光景 その四

食事中

「いーやっ いーやっ」
と言いながら

大きな体をゆするのはきみ枝ちゃん

「おい おい 御飯がこぼれるよ」
でもちよつとばかり言われても
まるつきり応えない

右手のスプーンが面倒になると
左手の素手で「エイヤッ」と
おかずをつかんで
お口の中に「ポイッ」

女の子なんだけど
お行儀なんかおかまいなし
「いやはや 元気 豪快」
「職員一同恐れ入りました」

施設の中を笑いで明るくするために、職員達はいろいろと工夫をする。時には、あだ名をつけて呼び合うことで、親近感を増そうとこころみる。父ちゃんのあだ名は、毒きのこ。すなわち、煮ても焼いても食えない、という意味だ。

「園長先生、はーげ」

ゆきちゃんが、数日前から新たに覚えた言葉、いや、正確には職員の誰かに教え込まれた言葉を口ずさみながら、廊下を行きつ戻りつしている。

職員達、それを聞いて、どっとわく。

園長は、後頭部が若はげなのだ。

「誰だーっ、ゆきちゃんに、また良からぬことを教え込んだのはーっ」と大声でどなりながら、本人もにたにた笑っている。

翌日、ゆきちゃんは、「園長先生、はーげ」に「内田先生、ブース」という新たな言葉を加える。

加藤園長、女子職員最古参の内田先生が教え込んだものと見抜いての、仕返しである。

さて、内田先生と園長、廊下でゆきちゃんをはさんで、ぼったり顔を合わせ。

内田女史、ここぞとばかりに笑みを浮かべて、「ゆきちゃん、園長先生は？」とわざと聞く。

ゆきちゃんは、どこでどう間違えたのか、「ブース」と答える。

今度は、園長、げらげら笑いながら、「内田先生は？」と内田女史を指さして見せる。

彼女、おもむろに「はーげ」と答える。

ゆきちゃんにとっては、どっちがはげでどっちがブースでも、かまわない。

朝七時、子供達はウエストミンスター式の鐘のメロディーで起床する。

もともと、以前はたあちゃんのように、朝の四時や五時に起き出してきてトランポリンをはねたりする者もいたが、今では早い者でも、六時半頃からもそもそ起き出してくる。

当直職員は、その時間にはすでに、子供達の部屋をまわりながら、着脱衣の訓練に入っている。

よし雄君ややすひろ君、目がさめるのは早いのだが、朝の仕度は一番びりになる。六時半から始まった着替えが七時半までかかる、よし雄君の様子から紹介しよう。

まず、鐘も鳴らないうちから起き出してきた彼、何をするのか見てると、せっかく前の晩に、当直職員が準備してベッドの横にきちんと並べてある衣服を、一枚ずつ一枚ずつ、筆筒の引き出しの中にしまひ込んである。それも、運動機能障害者特有の、ゆっくりしたペースだ。

そして今度は、自分のお気に入りの衣服を引っ張り出してくる。それも、一度持ち出したものをしげしげと眺めて、それから、おもむろに戻しに行き、またほかのものを持ち出して来るといふ具合だから、第一、今日着るものがさっぱり決まらない。どうやら本人はこれでいいと納得しても、職員が見るとそろえ方がちぐはぐだから、途中で見つかると、全部しまわされて、最初のものに逆戻りしてしまう。

それだけじゃない。時には、自分が一番遅いくせに、隣の子のおせっかいをやいたりする。

またまた、職員に叱られる。

「よし雄、おまえは一番遅いんだから、自分のことだけやれよ。人の世話やいてる場合じゃないだろう」

よし雄君、怒られると、いやーな顔して自分の衣服いじりに戻るが、さっきから寝巻のまま、さっぱり、進展がない。

「いいかげんにして、早く寝巻を脱げよ」と、また怒られる。こんな具合だから、やっとその気になって、よし雄君が寝巻のボタンに手が行く頃、すでに早い子は歯ブラシをくわえて、廊下に立っている。

もう一人、びりから一番目か二番目がいる。やすひろ君だ。彼も一応、何でも自分でできるのだが、動作がすべてこたわりでこり固まっただけで、次の動作になかなか進まない。靴下一足はくのに、大袈裟に言えば十五分かかってしまう。

すなわち、靴下を手で振ってみては前後を確かめ、もう一度振ってみては左右を確かめ、足に持っていてみてはまた振ってみるといった具合で、これも途中で職員の声がかかるくちだ。

「やすひろ、いつまで靴下を振ってるんだ。いいかげんにしろよ」

これで、やっと彼も、靴下振りをやめられるといった寸法だ。

さて、この二人以外の他の子供達の様子も、少し説明しておこうと思う。

自分で着脱衣ができない連中、職員に次々とパジャマのボタンを外され、半分だけ脱がされて放置されている。あとは自分で脱げという意味だ。そして、やっと脱げた子は、頭にシャツをかぶせられ、足にズボンやパンツを引っかけさせられる。あとは、袖を通せとか、ズボンを上げるとか、やかましく言われるのである。すなわち、半介助なのだ。

とにかく、七時半から朝食の配膳が始まるので、当直職員二名、早番出勤（朝七時）四名、計六名の職員は大忙しである。

全員を起床後、着せ替えて、トイレに行かせて、洗顔をさせて、歯みがきをさせ

て、居室を片づけて、食堂前のロビーに集めることは、並大抵のことじゃない。

園では、朝の歯みがきは訓練のため、夜の歯みがきは虫歯予防のためという具合に、目的を分けてある。

夜は風呂場で、職員がほとんどの子供の歯を見てあげながら磨いてあげて、朝は本人に歯ブラシの使い方を教えるのである。

ひろし君 今朝もチューブ入り練り歯みがきをペロペロなめていて、職員に怒られていた。歯みがきを食べてしまうのは、ひろし君に限らない。つかさ君も政あき君も、練り歯みがきを「くつくつ」と飲み込んでいた。

「やんなっちゃうなあー、おまえ達、歯みがきは食うもんじゃないんだよ」と、当直の岡田先生が文句を言いながら、子供達に歯ブラシを配っている。

しかし、こんな騒ぎの中でも、かしこいほうは、さっさと洗顔をすませて、掃除機で部屋の中を掃除している者もいる。

ながい君やきみ子ちゃんやさっちゃん、時にはじゅん次君 しん一君 ひろ子さんなどのメンバーである。

(四)

「うぎゃー」「あー、あー」「いー、いー」「ういー」「うわー、うおー」
これ、みんな、我が愛する子供達の声だ。

園内で一番やかましいところがロビーで、たいがい一日四回、彼らはここに集まる。三度の食事と一回のおやつのためだ。

ロビーは食堂の入口にあつて、手洗い場がついていて、正面玄関にも面している。

人文字形に設計された園舎は、もちろんここに住む子供達のことを第一に考えて設計されているが、職員が仕事を上でも、大変効率良く設計されている。

職員達にとっては、ロビー前に子供達を集めることが、最初からそんなに大変ではなかったようだ。そしてそれは、園舎の設計に起因するところが大きかった。

豊岡光生園では、ロビーに子供達を集める場合、たいがい二人の職員で間に合う。

すなわち、西の一番はずれから一階と二階に一人ずつ分かれて、東のはずれまで「御飯だよーっ、みんな、ロビーに集まれーっ」と声をかけながら追い込んでくると、行き着く終点がロビーなのだ。

そして、約七割、三十人の子供達は、残りの約三割、十人の子供達が二、三人の職員と一緒に食堂の中で配膳を終わらせるまで、ほかの数人の職員と共に、ロビーで手を洗って待つことになる。

すなわち、食堂の中で配膳をさせられるほうがエリート達なのだ。

いつもそうなのだが、この時、外にいる組の職員の数が必然的に手薄になり、やかましくなる。おまけに、みなそれぞれ個性が強いのも待機組であるため、こうい

う時に限って、日頃少し抑えられ気味のところが一気に吹き出してくる。

騒ぎの発端は、よし子ちゃんであったり、よしひろ君であったり、みつのぶ君であったり、その時によって違うが、とにかく、誰かが口火を切るのだ。

今日も今日とて、みつのぶ君が騒ぎ始める。

「あーっ、ばあーっ、うわーっ」やけに大きな声を出しながら、ついでに手まで叩いている。途中で「ペエーッ」とつばを他人に向けて吐きかけたりもする。

別に何の意味もあるとは思えないのだが、強いて言えば、「ひと騒ぎ起きんかな」という期待感かもしれない。

奇妙なもので、これが始まると必ず、すぐ連鎖反応が起きる。

かずのり君が、今度はちゃんと意味のある反応で「ウーーン、ウーーン」これまたでっかい声である。

「黙れーっ、やかましいぞ」ということなのだろう。

さて、この二人の「あーっ、ばあーっ」「ウーーン」のかけ合いが始まると、これに呼応する第二陣、第三陣ののろしがあちこちで上がる。

「やかましい、静かにしなさい」などと職員が言おうものなら、よし子ちゃんが「やかましい」「やかましい」と口真似を連呼しながら横っ飛びに玄関めがけて飛び出していく。

「こらーっ、よし子ーっ、待ちなさい」と言いながら追いかけていく職員を尻目に、今度はよしひろ君が長椅子を引っくり返す。じゅん子ちゃんが見ていて「あーあつ、あーあつ」と声を張り上げる。ながい君やしん二君が正義派を買って出て、制止に入る。「うるさいなあー、静かにしてくれよおー」と、手洗い介助中の職員がまたどなる。

そうこうしているうちに、誰かが小便を「ジャーッ」と漏らす。

言葉のあるゆきちゃんが「おしっこ漏らした、おしっこ漏らした」と言って、広報係を務める。

職員は、ぞうきん、尻拭き、水バケツ、着替え、エトセトラを取りに廊下を走る。しかし、こうしているうちにも、子供達は一人ずつ、みんな手を洗わせられていく。

声をかけただけでできる者には、盛んに呼びかけて一人で洗わせる。

「手を洗いなさい」「手を洗いなさい」と、何十回も大声を張り上げるのも、職員の日課である。

ロビーは騒がしい。がしかし、ここに集まって騒ぐことは、食べることを意味している。彼らの表情は、ここで一段と明るさを増す。父ちゃんや園長は、毎日この場所で待ち受けて眺めることで、彼らの一日を推測する。彼らの表情がすぐれない時は、たいがい、日課の流れや健康、食事内容のチェックをすることになっている。

「食べることは、まさに生きることだ」

(五)

朝、当直勤務だった鳥居先生が「ゆんべの当直は、ひどかったなあ」と言いながら、眠そうに眼をこすっている。

父ちゃんが「何かあったの?」と聞くと、まるでもぐら叩き遊びみたいに、子供達が寝かせるはじから、びよこたん、びよこたんときき出してきて、一睡もさせてもらえなかったと嘆いている。

このところ、ずーっと雨続きだったから、多分、運動不足気味で、夜眠れないのだろう。

「もぐら叩きとは、うまい表現だなあ」と、父ちゃん、感心している。寝かせるはじから、起き出してくる彼らの姿を想像しながら、おかしくなって一人でくすくす笑っている。

鳥居先生、仮眠できなかったのがよほど応えたらしく、「笑っている場合じゃないですよ」と、ちよつとむくれて見せたが、いつまでも笑っている父ちゃんにっられて、自分も笑い出す。

二人で「わっはは、わっはは」と笑っていると、廊下の奥のほうから、多分ゆうべの不眠組の一人であるはずのよし子ちゃんが、大きなかん高い声で、「政あきおじい、政あきおじい」という新しい言葉を繰り返しながら、走ってくる気配がする。「こらーっ、政あきおじいではないぞおーっ、政あきお父さんだぞおーっ」と、とっさに事務所の戸を開けて、父ちゃん、どなる。

彼女、一向におかまいなしで、歌のように節までつけて、「政あきおじい、政あきおじい」を繰り返しながら、走り去っていく。よし子ちゃんのあだ名は、九官鳥。彼女、何でもすぐ憶えるが、どうも意味はわかってないらしい。

「ちくしょう。また職員の話かのいたずらだな」と、今度は父ちゃんがむくれる。そして、鳥居先生がおかしさをこらえきれなくなつて、「わっはは、わっはは」と笑い出す。いつまでも止まらない。父ちゃん、怒ってはみたものの、やはりつられて、「わっはは、わっはは」と笑い出す。

(六)

園長の加藤先生、どうやら、ち代ちゃんに好かれたらしい。男性としてである。ち代ちゃん、用事もないのに、園長を見つけると、そばににじり寄っていく。園長殿は、色目美人のち代ちゃんの色香に、このところすっかり困りはてている。

「ち代、少し離れてくれないか」と、何とか牽制しようと努力するが、ち代ちゃん、一向に言うことを聞かない。それどころか、普段は人前で絶対に言葉をしゃべらないはずなのだが、この時ばかりは様子が違う。

「てめーが寄ってきたんじゃねーかよおー」と、自分が寄っていったのを柵に上げて、喧嘩ごしでくっついてかかる。千葉県の太平洋側の方言まる出で、すごいけんまくだ。「まったく、困っちゃうなあー、こういう時だけ、どうして言葉が出るの？」と、どうやら園長先生も手に負えないらしい。

ち代ちゃんの恋は、見ていると痛々しいくらいだ。でも、そのために言葉が出るのだから、はたで見ると、何とも妙な具合の効果だ。

「ち代、俺にはなあー、ちゃんと奥さんがいるんだよ。だから、ほかの人にしたら」と、園長はそれでも何とか言ってみせようとするが、ち代ちゃんは、そのくらいじゃ簡単にへこたれませんかばかりに、「何で奥さんなんか、いるんだよおーっ」と言いながら、またにじり寄っていく。

「助けてくれーっ」園長、笑いながら、たまりかねて逃げ出す。ち代ちゃんは少し体が不自由なため、ゆっくりとしつつこく、園長を追いまわす。

「父ちゃん、何とかしてくださいよ。これじゃあー仕事になりませんよ」と園長先生、父ちゃんに助けを求める。

しかし、父ちゃんは「いいじゃないですか、おかげで一人、言葉が出てきたんだから、おおいに語り合ってくださいよ。これで言葉ありが、合計六人になりましたよ」と言いながら、しゃあしゃあとしている。

(七)

何といっても、光生園の日課の中では、食事時が一番、大変である。

人は、なくて七癖というが、我が愛する園生達は、その三倍の二十一癖くらいはあるらしい。

今日も今日とて、三番テーブルでは恒例のひと騒ぎが始まった様子！見ていると、今しも鳥居先生のポテトサラダ一盛りが、隣のたあちゃんの左手でさあーっとさらわれて、すでに口の中に入ってしまったところだ。

「あつ、たあちゃん、駄目」と言ってみても、あとの祭り。本人、しごく平然と右手のスプーンで、今度は自分のポテトサラダを上手に食べている。

「うーん、もう頭にきちゃうなあー。たあちゃん、これは俺の、これがおまえの」と鳥居先生、それぞれのお皿を指で示しながら、懸命に教えようとしているが、どの皿も、たあちゃんの旺盛な食欲の前にひとたまりもない。すでに、両方共、空っぽ！ただの皿だけじゃ、俺のおまえのもの、あったもんじゃない。

やれやれと思って見ていると、今度はその一人向こうの、同じ右隣のよしひろ君が、ひと騒ぎ始めたらしい。

御飯の上にお茶をかけて、みそ汁をかけて、その上におかずまでのせて、両手で食器を持ち上げるや、ターンテーブルの上に「どーん」と置いて、頭を横に振って

いる。

「食べない」というジェスチャなのだ。

鳥居先生、「よしひろ、食べなきゃ駄目だーっ」と声をかけながら、今度は左側に目を配る。

今しも、左側のまー君が、どんぶりの底を、ユリゲラーのように曲げたスプーンで、「チントン、チントン」と盛んに叩いている。

「チントン」は、食べたものを口から吐き出す時の危険信号だ。

鳥居先生、あせっている。

「まー君、出すなよ、出すなよ、出しちゃ駄目だよ」と盛んに注意したが、止めることができない。

ついに「ベエーッ」とやられてしまう。

「チントン、チントン、ベエーッ」が、彼の癖である。

そうしてゐるうちに、もう一人向こうの左隣のひろし君、ちよつとのすき間に御飯をほお張り過ぎて、「げえーっ、げえーっ」とやっている。

これじゃあ光生園の先生方、食事時のストレスで、一人残らず胃潰瘍間違いないのだ。

(八)

女子棟の絨毯が、このところ相当痛んでしまった。

犯人はよう子ちゃんだ。

父ちゃんの娘よう子ちゃんは、絨毯のつなぎ目からわずかにほぐれ出た糸を、手でつまみ出して、引っ張っている。つづれ織りだから、糸がするすると抜けてきてしまう。

彼女は「キャー、キャー」言いながら、これを遊びのつもりで続けるから、たちまちのうちに我が光生園の一等室が三等室に、いきなり格下げとなる。

仕方がない、かくなる上は早く直して、せめて二等に格上げさせねばと、父ちゃん、一生懸命に修繕に励む。破れたところにカッターナイフを入れて、带状に絨毯を切りはがして、共ぎれを張っていると、よし子ちゃんが部屋に飛び込んだ。

父ちゃんは、先ほどまで切りはがしていた絨毯のくずを、ごみ籠の中に入れてあったのだが、彼女、何を思ったか、「えー、わざとおー、わざとおー」というかけ声もろとも、その籠を思いっきり蹴っ飛ばしてしまった。

「うーん」父ちゃん、いっぺんに頭に血が昇ってしまふ。

がしかし、この場合、ぐっところえて、我が身に言い聞かす。「相手は障害者だ。おれは教育者なんだ。我慢、我慢！」

そして、腹は煮えくり返っても、表面は抑えて、顔に笑みさる浮かべて（本人、

そのつもりでも、引きつっていらしいのだが）、「よし子ちゃん、どうしたの？」と、やさしい声で応ずる。

彼女、その辺をびよんぴよん跳ねながら、もう、一度、蹴飛ばした籠のところに引返してみると、今度はその籠を拾い上げて、開いた窓から外に向かって、「ぼい」と、放り投げてしまった。何の理由もない。ただの遊びのつもりらしい。

しかし、父ちゃんは怒った。もう収まらない。情けないけど、教育者一年生。たちまち豹変、ただの人間！

「こらーっ、このがきめーっ、何するんだあーっ」とどなりながら、よし子ちゃんをつかまえようと、追いかける。

彼女、脱兎のごとく、プレールームに向けて逃げていきながら、「こらーっ、このがきめーっ、こらーっ、このがきめーっ」と真似をして見せて、父ちゃんをくやしがるせる。

職員達、くすくす笑いながら、この光景を見ている。

(九)

ながい君は三十三歳、男子園生中、一番年が上だ。

髭が濃くて、一見、おじさんタイプだが、やさしい童顔にやさしい眼の持ち主で、どちらかというと、父っちゃん坊やという感じがする。少し腰をこめて、片足を引きずるようにして歩くのだが、動作は機敏だ。

「先生」の発音を「シェンシエー」と言うが、あとにも先にもこのひと言が、彼の言葉のすべてである。

いや、正確に言うと、もうひと言だけ言葉らしきものがある。

新聞、雑誌、絵本、何でも読むふりをして見せるあだが、その時の声が「デーデー」なのだ。そして、「デーデー」はその他の時にもよく使われるようで、たとえば、ものを数えるふりをする時とか、何か事柄を説明したり質問したりする場合も、同じ「デーデー」なのである。

だから、彼が職員と会話をする場合は、必然的に「シェンシエー、デーデーデー」が毎度のことで、職員達は、その時その時の状況判断で、彼が何を言おうとしているかを推測しなければならない。

しかし、不思議なもので、彼も職員も、しばらく一緒に暮らすうちに、あまり不自由が感じられなくなってしまった。

今日も、おやつ時間に、こんなことがあった。

毎週二回、子供達は園所有のバスで、全員が外に出かけることになっていて、彼らにとって、それは何よりも楽しみであるらしく、バスが出るたびにひと騒ぎになるほどののだが、あいにく、今週に限って、車検整備のため、その楽しみがお預け

になっていた。

ながい君は、しきりにバスのことを気にしていた。

円形テーブルに車座になっておやつが始まると、とうとうバスのことを我慢できなくなつたようで、職員に聞いてみる氣になつたらしい。

「シェンシェー、デーデー、うん？」例によって、ながい君の質問である。相手は館野先生だ。どうやら、手真似がハンドルをまわす素振りから察するに、「バスはどうしたのか？」という質問らしい。

「バスか？」と館野先生が聞くと、「うーん」と首を縦に振って見せる。

よせばいいのに館野先生、ながい君をちよつとからかってみたくなつたらしく、「バスなあー、売っちゃったんだ。バス売って、おやつ買ってきたんだ。ほら、ながい君が、今食べてるこのお菓子なあ、バス売ったお金で買ってきたんだよ」と言つてしまつた。

物の価値観がわからない彼らのことである。バスを売ってお菓子を買ったと言つても、本氣にしてしまう。

さあ大変！それを聞いたながい君、怒ること怒ること、ただの怒り方ではたい。顔を真っ赤にして「うー」とうなりながら立ち上がると、まず、こんなものを食つてはいられないとばかりに、目の前の菓子皿をポーンと放り出すや、足をどんとんと踏み鳴らしながら、「デーデーデーデー、うー、デーデーデー」

それだけでは足りない。たがい君の隣のしん一君も、ふみ技ちゃんも、やすひろ君も、「うわー、うーうー、うわー」と、これまた言葉にならない声を出しながら、いっせいに菓子皿を放り出して、抗議の姿勢を取つたのである。

「いやー、ごめん、ごめん、今のは嘘だよ」と館野先生、最初、照れ笑いをしながら打ち消しにかかったが、何しろ肝心のバスが目の前にないため、今度は、今言つたことが嘘だと証明することができない。彼、まったくの窮地に追い込まれてしまつた。

こんな時に限って、子供達は異常なほど、周囲の状況を把握するのが早い。

どうやら、この騒ぎ、隣のテーブルにも伝わつたらしく、あつちでもこつちでも、「わーわー、ぎゃーぎゃー」と声が上がる。床を踏み鳴らす者もいる。

「いやあー、参つたなあー、父ちゃん、こりゃあ困りましたねー」と、なかば父ちゃんと助けを求めながら、本人、とうとう両手で頭をかかえ込んでしまった。

（仕方がない、もうこうなつたら、どうでもバスを見せねばなるまい）そう思った父ちゃんは、「よし、俺、これから整備工場にバスを取りに行ってくるよ。多分、もう直つてゐる頃だろう」と言つて立ち上がった。

それから小一時間ほどして、バスが回送されて園の前の土手道に現われると、現金なもので、たちまち子供達の中から「うわーい、キャーッ」という喜びの声が上がつた。

子供達はみな、正直でたくましい。
職員はゆめゆめ、彼らをばかにしてからかったりなどしてはいけない。

(十)

豊岡福祉祭りは、光生園の一大行事である。
この山の中に六百人の人々が集い、歌い、飲み、食いと、一大騒ぎを繰りひろげる。

例年、八月の第二日曜日がそれに当てられるのだが、職員も父兄も、七月になると、すでに準備に忙しい。

お祭り準備の主役は、何といっても食べもの、飲みものを仕度する厨房職員達である。ここで、厨房の四人のメンバーを紹介しておこう。

まず栄養士の小倉さん。開園以来三人目だが、未婚の彼女が、今までで一番長く在職してくれている。小さい体で厨房の中を走りまわっている姿はこまねずみという感じで、いつも大きな眼で、子供達の食事風景をカウンターの外から眺めていてくれる。豊岡光生園が若い彼女に与えた権限は絶大なもので、何しろ年間一千四百万円に及ぶ一般の食事から、行事の時のお客様に出す食事まで、いっさいの予算の切り盛りをまかせてある。そのため、彼女は毎月、足りなくなりたいように、あまらないようにと、神経をすり減らしている。特に行事食は彼女にとっては頭痛のたねで、中でも福祉祭りは最大の難所らしい。

次に調理員。みんな地元の主婦達である。角田さんは五十五歳、石井さんは四十九歳、押さんは四十二歳、それぞれ子供さんがみな育って手が離れたので、就職した人達である。そして開園以来、三人はずーっと我が母ちゃんと一緒に、子供達と職員達の母親的役割をになってきた。とりわけ、地元民とのつながりを、この人達が一手に引き受けてくれた功績は大きい。タケノコが出る時期になると、地元の人達は誰彼となく訪ねてきて、まず調理のおばさんと呼んで話し込んでいく。帰ったあと、厨房の前にはタケノコの山ができていく。シイタケの時期も、その他の野菜も、といった具合である。

そんな具合のこの素朴な豊岡だからなのだろうと思うが、園生達が職員に連れられて外に散歩に出ると、時々道端で声をかけられる。

「ゆきちゃん、よう子ちゃん」などと呼ばれる風景は、都会の施設にはないのじやないかと思われる。

そんなわけで、お祭りに来る人達の中には、顔見知りが多い。

さて、お祭りの開始はお昼からだ。

お客様も園生達も、みんな厨房さん心づくしの寿司弁当をパクつきながら、プレールームでの素人演芸大会を見物することから始まる。

出演者は、十日前から集められた地元住民の素人演芸愛好家達と近所の子供達、それから光生園よりぬきの職員交奏楽団、時計バンド、そして園生代表のふみ枝ちゃんときつちゃんときみ子ちゃんの三人娘だ。もともと、歌らしい歌がうたえるのは四十人中この三人だけなのだが、彼女達が出演すると、拍手大かっさいが起こる。

演芸会場は開園式の時のように特設ステージを継ぎ足してひろげるのだが、収容人員はせいぜい三百人がやっとだ。夏のこと、満員になった会場は熱気がひどい。そこでお客様達は歌や踊りをひと時見物すると、勝手に出たり入ったりして園内をふらふら歩く。かしこい職員達、そのへんをちゃんと計算すみて、園内にはバザー会場を設けたり、写真パネルを展示したり、コーヒースタンドを作ったりしてある。素人演芸大会の五十組もの出演者がすべて終わり、それぞれ賞品が授与される頃になると、外はもう日が暮れて、園内には電気が灯っている。職員達は、この時とばかりに客の流れに気を配る。すなわち、それまでは外の電気を消してあるのだが、演芸会の終わりと同時に、中を暗くして外の電気をいっせいに灯すのである。

パークと数百個のお祭りちようちんの電気が山あいの谷間に灯る光景は、絵に画いたように美しい。

明かりに見とれてしまった人々は、わあーと外に向かってなだれ出る。

そうして、「どどんがパーク」「どどんがパーク」という調子のおぼQ音頭が、盆踊りの幕あけである。人々が気づいてみたら踊っていたという、心にくい演出である。

園生達、見物専門とは言ったが、結構楽しんでる。たあちゃんも政あき君も、ゆきちゃんもち代ちゃんも、みんな出てきて、踊りにはならないけれど、はねまわっている。

夜もふけて、遠い谷間の灯があちこちにちらつく頃になると、会場は盛況となる。夕食を終えた新たな地元民が、ぞくぞくとつめかけるからだ。こんな山奥のどこにみんな住んでるのだろうかと首をかしげたくなるほど、人々が集まるのである。

そして、その頃になると、厨房さんが下ごしらえした焼きとり、おでん、そばなどを売る夜店の女子職員の呼び声が一段と大きくなり、やぐらの上では、ながい君の少し調子のはずれた太鼓叩きが始まる。みんな笑っている。

ビールもジュースも、売れて売れて忙しい。地元の子供達に無料サービスしているかき氷売場などは、黒山の人のだ。

こうして福祉祭りが終わると、園は二週間の夏休みに入る。

その福祉祭りの余韻を残して、今年も、夏が駆け足で過ぎ去ろうとしている。町に用事で出かけるたびに、稲を刈り干してある田が増えて、秋の気配が急になってきたようだ。園生達、夏休みを親もとで過ごして帰ってくると、ひとしきり、

夏の名残の下痢や風邪をはやらせている。

布団を蹴飛ばして、寝冷えをするせいでもあるらしい。

当直の先生が、「たい子さんピー、ゆきちゃんピー、まち子さんピー、のりあき君力ーッ、つかさ君力ーッ、かず江さん力ーッ、やすひろ君力ーッ、かずのり君ピー」などと、朝のミーティングで報告をしている。

ピーは下痢で、力ーッが熱である。

四十人中ピーカーが十人も出ると、職員達はたちまち、野戦病院の看護婦のように忙しくなる。

「わあー、今朝はもうこれで、下痢の始末が九回目よ」などと言いながら、女子職員が廊下をバタバタと走っていく。

そんな時に限って、あばれ者やいたずら坊主が、この時とばかりに悪事をしかけてまわる。

「誰だあー、水道の水を出しっぱなしにしたのはー」とどなりながら、男子職員が手洗い場の水道栓を片っぱしから締めて歩くのもこんな時だし、監視の目が届かないのをいいことに、テレビのチャンネルつまみが引っこ抜かれて捨てられてしまうのも、こういう時である。

そして、事務所の机に向かって仕事をしている父ちゃんも、座っていても尻がむずむずして、落ち着かない。

「バリ、バリ、ガターン」

今しも、女子棟のほうで何か壊れる音がするので、急いで飛び出していくと、例のよし子ちゃんが部屋の洋服筆筒の扉を一枚もぎ取って、「ものを大切にしていえー、ものを大切にしていえー」と言いながら、運動場にめがけて投げつけたところだ。

「こらーっ、おまえ、ちつともものを大切になんかしてないではないか」と言っていて怒ると、「怒っちゃ駄目、怒っちゃ駄目」と言っていて、また父ちゃんをからかっている。いや、からかっているのではなく、「どこか頭の中の認知の関係に障害があって、行為と認知が合わない」これすなわち、精神科医の言葉なのだが、父ちゃんは、いちいちそんなむずかしいことなど考えちゃいられない。「目には目を、歯には歯を」とばかりに、お尻を一発ばちーんとぶっ飛ばしてくれようと手を上げて追いかけると、彼女、いつものように脱兎さんを決め込む。

その逃げ足の速いこと速いこと、あつという間にいなくなる。

次は、とし明君とみつのぶ君の二人だ。

「先生、大変よーっ」と言いながら、女子職員が父ちゃんのところへすっ飛んでくる。

報告によると、両名が協同で、園の網戸を片っぱしから破壊作戦行動中だという。父ちゃん、「あの野郎どもー」とうなりながら、二階に駆け昇っていく。

見ると、二階の廊下側の網戸はほとんど全滅！残るはあと二、三枚のところだ、

彼ら二人、楽しく？楽しく？まるでかけ合い漫才でもやっているがごとく、悪事を働いている。

やり方が気に入らない。いたずらがかしこ過ぎる。見てると腹が立つ！

まず、とし明君が引き戸の鍵を外して戸を開ける。戸が開いたところで、みつのぶ君が両手で網戸を思いっきり「バーン」とはたく。叩かれて外れた網戸がまっさかさまに下の階に落ちていくのを、二人で上から覗きたがら、「わあーい」と手を叩いて喜ぶ。

そして、また次の引き戸を、とし明君が開ける。みつのぶ君が「バーン」とやる。

「わあーい」とまた喜ぶ。

またまた、父ちゃんの「こらーっ」の大声で、彼らの悪事がやっと止まった。

「ちょっと、二人共、来いっ」

もうこうなったら、父ちゃんも腹を据えて、二人の教育をせねばならないと思う。よし子ちゃんみたいに、認知障害で見逃すわけにいかない。

それから半日、二人に、落ちた網戸を一枚ずつ、もとの場所に運ばせて、戸わくにはめ込む仕事を手伝わせる。

みつのぶ君は、どうやら先に参ったらしい。へばったのかいやになったのか、それとも罪の意識か、頭をがっくり下にしてよたよたしている。

「最後まで、全部終わるまで、勘弁しないよ」と、時々声をかけながら、やっと夕食前に全作業を終える。

「いいな、二度とやるなよ」と言っただけで無罪放免してあげる頃には、さすがのとし明君も参ったらしく、「はあーあ」とため息をついている。

二人共よほど応えたらしく、以来、園の網戸は、わりあい無事だ。

(十二)

しげ子さんは、筆筒の引き出しの中に何でも集めてきて、つめ込む癖がある。

いつ時、仲間の内ばきをやらと集めてきて、自分の筆筒の引き出しにつめ込むので、職員達は大弱りだった。

「あつ、あの子、内ばきどうしたのかしら？」などと女子職員が捜して歩くと、必ずしげ子さんの筆筒の引き出しの中に、目的のものがつめ込まれていた。

彼女、一日中、誰かの脱ぎ捨てたサンダルやズックを集めて歩くので、職員達は困っていた。

ある日、職員の一人在一計を案じた。

調書に、きらいなもの、ヘビ、ミミズ、昆虫類、と書かれてあるのを見て、ヘビ（ゴム製のそっくりのオモチャ）を筆筒の引き出しに、そっと忍ばせておいた。

そして、しかけた職員は、さっそく父ちゃんのところに来て、面白いことが始ま

るから見ないかと誘った。

「何、何、なんだよお？」

職員のにこにこ笑っているのを見ただけで、何か面白いことがありそうだなーと感じた父ちゃん、書類いじりを放り出してそそくさと女子棟に向かう。

職員と一緒に、物陰から部屋の中を覗いて待つ。

しばらくすると、そうとは知らないしげ子さん、いつものように拾得物をひとかかえ持って、部屋に入ってきた。そして、さっそく筆筒の引き出しをあけた。

「うわーっ」へびを見た彼女、びっくりして、目をまわして、腰を抜かしてしまった。

よほどおどろいたらしく、そのまま泣き出してしまった。

物陰から見えていた二人は、少しやり過ぎたかな？と顔を見合わせたが、その日から被害が急に少なくなったことは、言うまでもない。

(十二)

豊岡光生園では、時々、父ちゃんも園長も、当直のメンバーに組まされる。

父ちゃんは、年寄り扱いされているせいか、そうたびたびではないが、加藤園長などは、頻繁にやらされる。

ひとつには、数の足りない職員を効率よく勤務させるためだが、もうひとつには、責任者として子供達の夜の生活も見ておくという目的もある。

さて、それでは、ある日の父ちゃんの当直勤務ぶりを紹介しよう。

一月二十二日、当直勤務者、鈴木栄、川崎裕子。

午後九時、全員の入浴が終わって、遅番職員四名が帰る。あと園内に残る職員は、当直者二名だけ。

何事もなし。平穏な一夜がすべり出した感じ！「はい、みんな寝るよー、おやすみー」と、川崎先生が声をかけて歩くのを待っていたかのように、子供達はみんな、絵にかいたようにきれいに寝てくれる。

寝る前におしっこに連れていかねばならない子も、すべて順調にすます。

何とまあ、みんな、おりこうさんになったものだ、と感入る。

十二時、夜尿起こし、開始。

今日は、川崎先生に男の子の面倒をみてもらって、女の子は父ちゃんの係にする。

ひろ美ちゃん、いくら起こしても駄目！こんな時はかわいそうだから、目がさめるまでベッドから降ろして座らせておこうと思ったのが、失敗のもと。

じゅん子ちゃんとまちちゃんを終わらせて戻ってみると、寝ぼけたまま、お着小便をされてしまった。

「こらっ」と、小さな声でたしなめてみたものの、あとの祭り、かえすがえすも残

念。仏心が徒となる。

あと始末にひと苦労したあと、二階の居室にまわる。

しげ子さん、寝ないで部屋の中にうごめいている。「しげ子、どうしたんだ」と、声をかける。

内ばきのこだわりをやめてから、ずーっと便所ばかり気にしているらしく、父ちゃんの姿を見るなり、「脱脂綿、くんねーか」と言う。

「生理じゃないから、脱脂綿はいらないだろう」と言っただけ。

相手は、それでも諦めずに、「脱脂綿、くんねーか」を連呼してくる。

「脱脂綿、くんねーか」

「駄目！ないよ」

「脱脂綿、くんねーか」

「ないよ」

「木更津に、売ってるよ」

「売ってないよ」

「売ってるよ」

「お金、ないよ」

「大野さんにもらえよ」

（大野さんとは、彼女の父親である）

「今は、もらえないよ」

「脱脂綿、くんねーか」

「駄目、ないよ」

「脱脂綿、くんねーか」

「生理じゃないから、あげられないよ」

「脱脂綿、くんねーか」

……あー、いつまで続くのか、この脱脂綿問答！

彼女に脱脂綿を自由に与えたら、それこそ大変。園内中の便器に、脱脂綿をあるだけ全部、つめ込まれてしまうのだ。

数人しかいない言葉のある子との会話が、こんな具合なのである。

十二時四十分、父ちゃんはもう一度、女子棟の見まわりに行く。

無理矢理に押えつけて寝かせたしげ子さんを覗く。どうやら、やっと眠ったようだ。

帰ろうとすると、「お母ちゃん、お母ちゃん」と、半泣きの声で呼ぶ者がいる。たい子さんである。はっきり発音できる言葉が、いくつもない子だ。

「どうした？」と聞いても、黙っている。

やさしく頭をなでてあげながら、「寝るんだよ」と言っただけ。

ひとまわりして、それでも気になるので、もう一度たい子さんを覗きに行く。

「げーっ、げーっ」と声がする。彼女が吐いているのだ。

「おまえ、お腹が痛かったのか？」
言葉を話せないということは、不便である。「お腹が痛い」たったこれだけのこ
とが通じない。

彼女はそれから朝まで、六回も寢床を汚す。おまけに、隣の部屋の吉川さんも、
吐いたり下したりする。

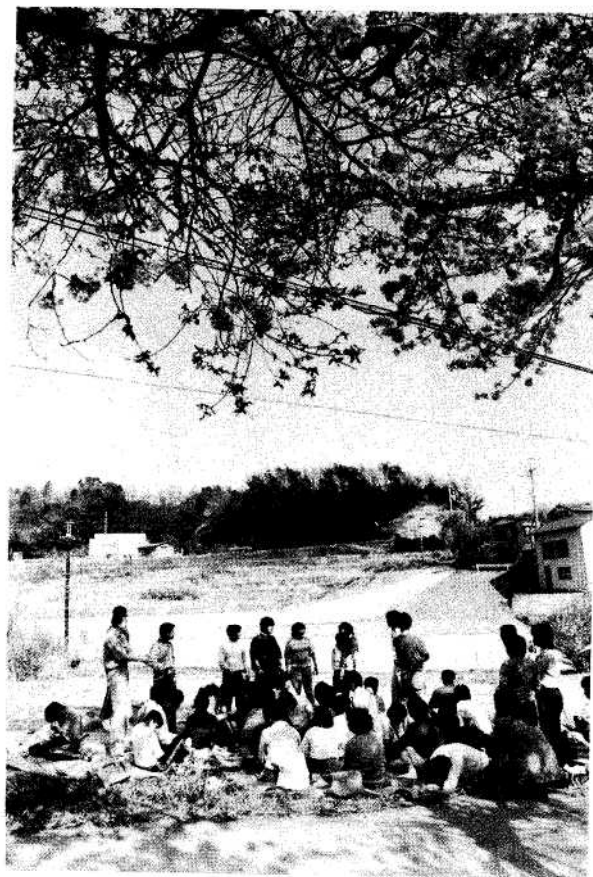
当直者二名、仮眠まったくできず。ひと晩中、介助で走りづめだ。

朝七時、早番で出勤した栄養士さんに、検査を保健所にまわすよう指示する。

「それにしても、ゆんべの下痢、嘔吐は、何が原因だろうか？」と父ちゃん、頭を
かしげる。そして「疲れたなあー」を連発する。

川崎先生、何事もなかったように、さわやかな顔で「父ちゃん、早く帰って休
みよ。私、もうひと仕事あるから」と言う。

若さとはすごいものだ、父ちゃん恐れ入る。



▲春4月。豊岡は花盛り。桜の木の下で、職員達、園生
を前に何やら協議中。「カラオケ大会でもやろうか？」

アンコバスは園の花

(一)

開園式に集まったお客様からいただいた祝儀で、六十万円の中古マイクロバスを買った。そして、これが思わぬ大活躍してくれた。

当時、入園予定者の顔ぶれがみな重度者だったのと、処遇する側の職員が未経験者だったのとで、いったいどう出発すべきか、さっぱりわからない、えーままよ、当分の間、中士のバスでも買って、今まで外に出してもらえなかった子供達だから、毎日、あっちこっち連れて歩いて遊ぶことにしようと、なかばやけくそ気味に始めたバス外出だった。

実際、開園当初の約半年間というものは、カリキュラムもへちまもなかった。とにかく、たらふく食べさせて、あとは毎日バスで出かける、こればかりだった。

朝、職員が集まると、「今日、何しようか」と一応相談するのだが、結局、一日中彼らをうまくまとめて指導する方法がわからない。職員達の頭の中には、みんな比較のおとなしくしてるのはバスの中だけ、という考えがある。

誰かが「バスにしようよ」と言い出すのを、待っているような感じだった。

そして、四年間のバス運行は、数々の花を咲かせ、大きな実をみのらせてくれた。

(二)

開園の翌年二月、二百目の二十九人乗り、ピカピカの新車が、清水基金から贈られてきた。

雨の中を、父ちゃん自ら新車を試乗して園の玄関前に止めると、水滴のたれてる食堂の窓越しに、子供達の大歓声がわき上がる。園のバスだと、みんなわかったらしい。

ながい君、いつものように、「うん、うん、デーデー？」とハンドルをまわす素振りを示しながら、目を細めたり首をかしげたりしてる。「新しいバスは、いつ動かすのか？」と聞いているのだ。

「明日」「バス、明日」「天気、良ければね」答はいつも簡単明瞭で、しかも繰り返すことがよろしいようだ。

納得したらしい。にっこり笑う。隣のしん一君も笑う。

やすひろ君が、ひと際大きい声で、「アンコ、バス」「アンコ、バス」と連呼しながら、指さしている。前歯がほとんどないため、空気が漏れて、観光バスが「アンコ、バス」になってしまうのだ。

それにしても連中、どうして、あれが園のバスだとわかるのだろうか？と父ちゃ

ん、不思議に思う。

新車が一台増えてマイクロバス二台になると、いつでも職員全員と子供達全員が一緒に出かけられるようになり、バス外出にはずみがついた。

南房の海辺や野山、それに見知らぬ町、デパート、お祭り広場といった具合に、次第に行き先のレパートリーがひろがっていった。

しかし、今でこそどこにでも行けるようになったが、最初の頃は大変だった。

当時、バスの中には毎度のように、子供達の小便の川が流れた。何しろひどい話で、五分おき十分おきに小便を漏らした猛者が、何人もいたのである。

光生園の付近は、山また山である。すなわち、坂を登ったり下ったりで、バスが走る。

ある時、こんなことがあった。

バスが光生園を出発して十分もたたないうちに最初の坂があるのだが、その坂にさしかかった時、どういうわけかその日に限って、三人の子が同時に小便を漏らした。昼食後に食べたスイカが原因らしかった。

三人分の小便は、バスが坂を登り始めると、後部座席にめがけて全部、川となって流れた。

「おい、シヨンベンが流れていくぞーっ」前のほうにいる職員、うしろの連中に大声で知らせる。

「うわあーっ」と、どよめきが起こる。後部に小便の溜め池ができる。かしこい子供は足を上げる。

今度は、バスが坂を下り始める。

うしろの職員、「シヨンベンが戻っていくぞーっ」とどなる。また、「うわーっ」と騒ぐ。

バスは、山道を登ったり下ったりだから大変だ。そのたびに、「小便が行くぞーっ」「うわあーっ」「戻っていくぞーっ」「うわあーっ」としばらく続く。

ドライパンツシステムの生活指導だから、いつまでもお尻を濡らしたまま、バスを走らせるわけにいかない。道の広い適当な場所に来るとバスを止めて、失禁した子供の着衣を取り替えることになる。

失禁者の着替えのためにバスを止めると、子供達はいっせいに騒ぐ。そんな時は、職員も騒ぐ。小便を漏らした子供に、あったけの罵声を浴びせるのである。

「みつ夫のあほー」「ばか」「まぬけー」「わあーい」「わあーい」と、まあこんな具合だ。

どんなに重い知恵おくれでも、いやなことはちゃんと知っている。せまい場所で、着替えのために立ったり座ったりさせられ、おまけに仲間にいびられるでは、たまったもんじゃない。第一、走らないバスは、ただの鉄の箱に過ぎない。

初めおしっこを漏らしていた連中、バスの中だけは、みんな我慢するようになって

てしまった。そして彼らは、ドライブインやその他公園など、便所のある場所にバスが止まると、便所にめがけて走り込んでいくほどになった。

はなはだしい時は、適当な場所がなくて、待たせながら三時間も走らせたのに、一人も失禁者なしという記録のおまけまで生まれた。

バスはどうやら、彼らにいろいろな場所での便所を提供することによって、今までの家と施設のみの便所を社会の中にまでひろげて、便所の概念をすっかりしみ込ませる役割を果たしたのであった。

そして、ある時は草原の中に棒切れで画いた仮の便所でも、おしっこをさせることができないなど、バスによる排尿訓練の効果には、はかり知れないものがあつた。

(三)

さて、バスの効用をもう一つ紹介しよう。それは専門用語でオペラント効果というらしいが、要するに、「餚とむち」の餚である。

彼らは普通、何をするのもまず遅い。それから勝手である。できることもやろうとしない。特に在宅組に多い現象で、何でも自分でやらないで、人にやってもらおうとする。

この場合、バスは職員達がくやしがるくらい効果を發揮する。

「おしっこに行つてこなきゃ、バスに乗せないよ」

「自分で靴をはかなきゃ、バスに乗せないよ」

「一番遅くなつた者は、バスに乗せないよ」

「お手伝いをしなければ、バスに乗せないよ」

「騒ぐと、バスに乗せないよ」

こう言つて、職員達はバスに引つけて、何でも仕込んでしまう。

少しわかる子には、明日出るバスも交換条件になる。

「はい、お洗濯を手伝ってください。明日、バスにしますから」

「はい、お友達の面倒をみてあげなさい。明日、バスにしますから」と言うのである。

さて、ほうぼう出かけて歩くと、職員達、行く先を決めるのに悩むようになる。今まで行けなかった場所にも行つてみたくなるのは、人情だ。

デパート見物に行くようになった最初の頃、帰つてきた職員に「どうだった？」と聞くと、「しっちゃんかめっちゃかだった」という答が必ず返つてきた。

エスカレーターに飛んでいってしまう者、商品を鷲つかみにする者など、いろいろだったらしいのだが、四年過ぎた今では、一階食品売場の休憩場や、時には屋上のレストランで、整然と全員が座つて、食べたり飲んだりして、帰つてこられるようになった。

これをむずかしい言葉で、「集団行動並びに社会性の発達」というのだそうだが、父ちゃんにとっては、そんなむずかしい理屈より、子供達が楽しい雰囲気です、どこからどこまでも、みんなで行けるようになったことが、何よりもうれしい。

(四)

昭和五十七年九月、一大決心のもとに、園創設以来初めての、バス長距離走行による全員一泊旅行を敢行する。

そして、光生園の園だよりには、「やった、やった。ついにやった。夢の一泊旅行！」という大きな活字がおどった。

以下は、父ちゃんが、そのさめやらぬ感動を筆に託した記事である。

――出発――

いつもと違う大袈裟な準備、職員達のあわただしさに、もの言わぬ彼らも、何となく気配で察して、これから始まる大旅行を知ってる様子。

「みんな、わかってるんだね」

――服装――

よう子ちゃん、白いズボンに赤いシャツ。

さっちゃん、流行のモンペスラックス、えんじ色。

じゅん子ちゃん、ピンクのそろいの上下。

女の子の服装は、花が咲いたみたいだ。

「きれいだね」

――お母さんのひとり言――

「子育て二十年、娘と一緒に観光ホテルに一泊旅行なんて、夢のようだよ……」
「ジーン」

ゆきちゃんのひとり言、この場合、本人関係ないけど、いつもの口癖……「よかったね」

――ホテル到着――

夕刻六時、四台のマイクロバスは、職員、園生、父兄の一行九十五人を乗せて、

予定通り無事に、栃木県鬼怒川温泉松屋ホテルに到着！

何せ、荷物の多いこと多いこと、着替え各目「着分、寝巻、シーツ、おねしょパット、タオル、歯ブラシ、石鹸、口拭き、手拭き、ちり紙、薬、まな板、包丁、スプーン、お椀、どんぶり、コップ、前かけ、その他エトセトラ、エトセトラ。迎えの老番頭、たまげていわく、「三十年、番頭やってるけど、こんな荷物の多いお客様は、初めてだあー！」

―夕食会場で―

園長の言葉「今日だけは、全介助で結構ですから、思う存分、食べさせてあげてください」

期せずして、親達から「うわーっ」の大歓声。あるお母さん、小さた声に感情込めて、「食べさせるの、久しぶりだわー」……憎まれ屋のひとり言「自分で食べるのは下手だけど、人に食べさせてもらうのは、みんな上手だなあー」

―入浴―

普通、旅館の客は入浴のあとで食事をするのだが、我が光生園の一行は、いつもの日課通り、一般客とあべこべの、食後に入浴！陰の声「あまり、こだわるな、どっちでも同じだよ」

―睡眠―

みんな疲れて、よく眠りました。「シーツ」内緒話。一人だけ、ホテルの社長さんと奥さんと三人で、夜通し酒を飲んだ人がおりました。

陰の声「帰ったら、おきゅうを据えてやろう」

当の本人「このところ、年のせいで油切れしたのか、ひざが時々痛むので、そこへひとつ頼む」

―ウエスタン村―

翌日、鬼怒川観光コースのひとつである、ウエスタン村に行く。

花もはじらう乙女、春口先生が、西部劇のおとりに引き出されて、首に縄をかけられた。あわや、春口嬢の命は風前の灯！

そこで園生達、「ウエーン」と泣き出す者も出る始末！

「愛されているんですねー」

別に、他意はない。中国ふうに言ってみたままでのことだ。

一号車、二号車、三号車、四号車、全車光生園職員運転—整然と隊列を組んで、十六号国道を走行中だ。一号車と四号車には、無線機もついている。

「えー、こちら四号車、四号車、一号車どうぞ」「こちら一号車」「四号車から連絡、ただいま乗車中の客一名、脱糞失禁につき緊急停車願います。応答、どうぞ」「四号車、四号車、こちら一号車、ただいまの件、了解」

後部座席の陰の声「何のことはない、これじゃまるで、自衛隊の旅行だね」
もう一人陰の声「臭い旅ですね」

—帰園—

往復六百キロの長い旅、無事で何よりと、ひとまず言っておこう。帰ってきた職員達、開口一番「疲れたなあー」

翌朝、のりあき君、相も変わらず「ブーブーブー」

「たまげたねー、まだ、バスに乗りたがってるよ」

(五)

昭和五十八年二月、今まで使っていた中古のほうのバスが修理不能で廃車になったので、丸紅基金の補助により、六百万円の四十七人乗り中型デラックスバスを購入した。

いいものは断然、理屈なしにいい。

子供達の喜びようは、並大抵のものじゃない。

今まで二台のマイクロバスに分乗して出かけていたのが、一台で全員が一緒に乗れる。必然的に、バスの中は二倍やかましく、にぎやかになった。

マイクを使って「わーわー、きゃーきゃー」やってる様子は、どこかの団体さんの観光旅行そっくりで、これを週三回もやってれば、当然、目立つ。

ある日、見知らぬ人から電話がかかってきた。

「園長さんか理事長さん、いますか」

「はい、私は理事長ではありませんが、まあ言ってみりゃー、そのような立場にいる者ですが、何か？」と、父ちゃんが応対に出る。

「実は、お宅の園の教育方針のことで、ひと言申し上げたいことがあるのですが」これは穏やかでない。うちの教育方針と言われても、説明に困る。

とりあえず「遊べ、遊べ」ですなどと言おうものなら、実状を知らない人が聞い

たら、貴重な税金を使って「遊べ」とは何ですか、と怒られかねない。

「もしもし、実は私、お宅のバスがいつも通る道すじに住んでいる者なんですかねー、お宅の人達は毎日のようにバスで出かけてますねー、あーやっていつも遊んでばかりいて、いつ職業指導をなさるのですか？」

（来たあー。これは大変だあーっ）

「私、常日頃、障害者の方には特別関心を持ってまして、あちらこちらの施設を訪問したりしますがねー、正直、お宅のように、そこらをふらふら歩いて遊んでばかりいる施設は、ありませんよ。あれでは、障害者に働く喜びを教えられないじゃないですか。もう少ししじめに、障害者の指導をやってもらいたいですねー」

（この手合は、何を言っても駄目だ。世の中、自分の思っていることがすべて正しいと思っている連中とは、うっかり喧嘩もできないぞ）と、父ちゃんはまた思う。

「あー、もしもし、いろいろご心配いただきましたまして、ありがとうございます。おっしゃる通りです。そうですとも、働く喜びは大切ですよねー。まあーそういうわけで、ただいま作業指導の準備中でして、その前に外出訓練をやってますて、これは社会性をつけてあげるためですて……むにやむにやむにや……」

父ちゃん、言っていることがしっちゃかめっちゃか、嘘も方便とばかりにまくし立ててけむに巻いている。

こうして、何と言われようが、今日もバスが行く。野を越え、山を越えて！

何人かの子供、特に女の子の中に、言葉はかた言なのに、歌を憶えることにかけては天才的なのがいる。

ふみ枝ちゃん、きみ子ちゃん、さっちゃんたどだ。

もちろんテレビで憶えるのだが、そのテレビも、一日のうちに実際にゆっくり見られるのは、風呂上がりの一時間か二時間くらいで、どうやって憶えるのか不思議でしょうがない。中でもピカ一すこいのはふみ枝ちゃん、新曲をだいたい一回か二回で、一言一句もたがわずに憶えてしまう。そのくせ、どうして言葉がうまくしゃべれないのか、これまた不思議でしようがない。

新しいバスは、前とうしろの二カ所に、マイクが備え付けてある。

さて、新車が入っていつの頃からか、バス外出の行き帰りに、マイク片手に園生達の歌が始まった。どうやら歌がうたえるのは、前記の三人に吉川さんくらいなのだろうとたかをくくっていたら、それがさにあらず、職員が適当に子供達にマイクを渡すと、ほかの連中まで結構「アーアーウーウー」とうなるのである。

したがって、バスの中はやたらとうるさく、にぎやかで、笑いが絶えない。だんまり組の政あき君、まち子ちゃん、たあちゃんにいたるまで、笑いに巻き込まれてにこにこし出し、手拍子や足踏みすら出る。

バスが通る街道の住民から、また何か言われやしないかと、父ちゃんははらはらし通しである。

久しぶり、今日はバス運転の役が父ちゃんにまわってきた。

開園当初の頃は、大型免許所持者が父ちゃんだけだったので、いつも運転手役に狩り出されたものだが、三年のうちに大型免許所持者が五人にもなったので、なかなかやらせてもらえない。

しかし、勤務割りの都合で、今日に限って父ちゃんが引っぱり出されたのである。行く先を聞くと、鹿野山のお花見だと言う。春うらら、福祉施設のアニコバスなどと、父ちゃん、だじゃれを飛ばしながら、バスをスタートさせる。

園を出てから五分もたたないうちに、バスの中は宴会場になる。

最初は、さっちゃんだ。

何を歌っているのかさっぱりわからない。時々「クイッ、クイッ」という発音が聞こえる。ハンドルを握りながら、「おい、今のクイックイッというのは、何の歌だあー？」と職員に聞く。

後部座席の、さっちゃんの隣にいる職員から、マイクで答が返ってくる。

「クイックイッじゃたくて、スイスイですよ。つまり、めだかがスイスイの、スイスイですよ」

「なーるほど、クイックイッじゃたくて、スイスイかー」

次は、さっちゃんのお母さん。

「私、愛染かつら、歌うわ」

若い職員達、「えーっ？随分古い歌、知ってるねー」と茶化す。

「はーなもあらずもー、ふーむこーえーで」栃木弁である。職員達、腹をかかえて笑う。

さてその次は、ふみ枝ちゃんの番だ。

「北のー、チャカバ通りにはー、ニヤガイー、髪の子が似合うー」

赤ちゃん言葉だが、歌は次々と正確に出る。

ひと区切りつくと、今度はマイクが奪われるようにして、子供達の間を渡っていく。そしてそのたびに、「わあーっ」とひと騒ぎ起きる。もうその頃になると、「うわーうわー、うー、うー」とか「デーデー」とか「ギャーギャー」の奇声が幅をきかせてしまつて、車内は騒然となり、手拍子や足踏みまで出る始末！

車は、鹿野山の頂上付近の山道を走っている。時は春四月、バス走る山道に、染井吉野の花吹雪舞う。

「あー、いいお花見だなあー」と、父ちゃん思わず、ひとり言をつぶやく。

ニッサンディーゼル八六〇中型バスは、軽快なエンジン音を響かせながら、四十人の子供達と七人の職員を乗せて、ただいま鹿野山、桜トンネルの中を疾走中である。

(一)

開園の時、父ちゃんが職員達に最初に指示した言葉の中に、「手を握って、眼を見て、語りかけろ」がある。

実際に、最重度知恵おくれの子供の多くは、人との交際が極めて少ない状態で生きている。中には、ものすごい対人嫌悪症の子もいる。そして、嫌悪症とまではいなくても、自閉傾向の子は多い。こちらからいくら働きかけても、まばたきひとつしない者などもめずらしくない。社会的な触れ合いのないまま、言葉のない世界に二十年も生きていけば、むしろそれが当然なのかもしれない。

子供達が続々と入園してきた頃、父ちゃんは、素人ばかりの職員達に対して、この重い障害者達にぶつかっていくために、いったい何と言って励ましたらいいかわからなくて、悩んでいた。

そして、ある時、電車の中で、生まれたばかりの赤ん坊を抱いている母親の姿を見て、感ずることがあった。

前の座席に座っていたそのお母さんは、まだ瞳さえ動かないと思われる赤ん坊の眼を見て、小さな手を握って、しきりにあやしていた。

「あばば、あばば」と声をかけている姿をはたで見ていると、それはまったく一方通行の会話であり、行為なのだが、お母さんにとっては何の疑いもない、我が子との自然な語り合いの姿であった。

「よし、これだ！これが光生園の出発だ」と思った父ちゃんは、翌日の職員会議で、「手を握って、眼を見て、語りかけろ」と、力強く訴えた。

(二)

第二部の「入園者達」の項で紹介した、まち子ちゃんのその後の話をしよう。

二人部屋にどっかとあぐらをかいて座り込んだまち子ちゃんは、まるで猛獣のようにな人を寄せつけない。手を握るところか、さわることさえ無理な状態だ。覗き込んで語りかけようとしようものなら、「うぎゃー」という大声を出しながら、むしやぶりついてくる。時にはかみつこうとして、歯をむき出していることもある。

女子職員が、それでも、失禁などで着替えをさせようとして近づくと、顔をかきむしられたり、衣服を破かれたり、髪の毛を引っかく抜かれたりで、さんざんな目に会う。

しかし、食事だけはどうやら受け入れがあるようで、職員達は食事時を狙って、二、三人で近づく。もちろん、全面介助だ。

「まち子、まち子、おいしいか」食べさせてもらっている時は、おとなしい。食べ終わったあとも、しばらく機嫌がいい。職員達は、この時とばかりに人海戦術で、数人がそろって「まち子、まち子」と呼ぶ。

あまり「まち子、まち子」とやっているもんだから、ほかの子供まで真似をして、かた言ながら「まち子」と呼ぶ者が現われる。

まち子ちゃんのいる部屋の前では、「まち子」合唱がいつも聞こえてくる。

人間嫌いのまち子ちゃんは、普段は手ぬぐいを手に持って、顔を隠して目までふさいで座っていたのだが、あまりの「まち子」合唱にたまにかねたのか、それとも心を開く気になったのか、ひと月もすると、時々手ぬぐいを少し下にずらして、周囲を見たりするようになった。そして、時には呼びかけに反応するように、ちらつと眼線が合うようになった。

それからしばらくすると、またびっくりすることが起きた。あれほど二人部屋に頑強に座り込んでいた彼女が、その辺をふらふらと歩き出したと思ったら、みんなのいる八人部屋のほうに、座る場所を移してしまった。

入園後、三カ月を過ぎたある日のことだった。

今日は、遠藤先生がまち子ちゃんに対して、何か企んでいる様子だった。彼、父ちゃんのとこに、にこにこしながら近づいてきて、「ちょっとすいません」と言う。「何だ？」と聞くと、「決死の覚悟で、まち子ちゃんを外に連れ出して、散歩させたいのです」と言う。そして、うまくいったら一杯おこれと言うのだった。

もちろん父ちゃんは大賛成で、「成功を祈るぞ」と言って激励した。

さて、遠藤先生のまち子ちゃん外出大作戦の模様を紹介しよう。

さて、父ちゃん以下、数人の職員達の見守る中、遠藤先生、什度して現われ出たその姿！ゴム手袋を両手にはめ、腕に手甲がわりの繃帯を巻き、頭にヘルメット、顔には頬かむり、衣服は破られてもいいようによれよれの作業服！まさに完全武装だ。

職員達、「ぷーっ」と吹き出してしまふ。

遠藤先生、どうやらやっとな関まで連れ出してきたまち子ちゃん相手に、柔道の試合のように手の取り合いをやっている。

まち子ちゃん、ここでも動かんぞと言わんばかりに、頑張っている。見ると、二人共、すごい形相だ。

「遠藤先生、頑張ってー」と女子職員の応援の声。「遠藤君、おまえさん、顔つきが悪いぞーっ」と父ちゃんの注意。「顔が悪いのは、親のせいだよ」と男子職員。とたんに「わっはっは、わっはっは」とみんな笑い出す。

まち子ちゃんまで、何を思ったか「キャハハ」とひと声！

その時、両者の対決の姿勢が急にくずれて、遠藤先生「にたっ」と笑うや、するするーとまち子ちゃんの手を引いて外に出る。

「わーい、まちちゃんが外に出たぞーっ」と、園内から歓声とどよめきが起こる。さて、まちちゃん、四年過ぎた今の様子も話さねばなるまい。彼女、すっかり人間らしくなり、御飯は自分で食べる、トイレは定時排尿を卒業して、半目立にまでこぎつける。集団行動もほとんど抵抗なく参加できるなど、別人のようになってしまった。

(二)

父ちゃんの息子政あき君は、入園の時、十八歳だった。

「手を握って、眼を見て、語りかけろ」を実践して、一番効果があったのは、何といても政あき君であったことは、父ちゃんにとって、内心「やった!」と思うことのひとつだ。

入園した当時の彼は、一日中寝っころがったままで、左手の指を口に入れて口の中をかきまわしながら、右手の拳で頭を叩くという、常動行動ばかりだった。そして、食事は全介助、泣きも笑いもせず声もなし、語りかけても覗いても眼も見ないという最悪状態で、おまけにおしっこ漏らしが十分おきぐらいで、パンツを一日数十枚も取り替えるという具合であった。

さて、その政あき君に向かってぼちぼち始めた職員達の特訓の様子を紹介する。

「手を握れなければ、少なくとも体にはさわってあげろ。眼を見る時は上から見おろすな。相手が寝てれば、自分も寝っころがれ」という父ちゃんの指示に従って、職員達はまず、笑わない政あき君を笑わせるために、くすぐり作戦を開始した。

「政あき、コチョココチョ」「コチョココチョ」政あき君と向かい合って横に寝っころがった職員の声の合間に、「エヘヘ、エッヘッヘ」という彼の笑い声がしばらくして聞こえ始めたのは、言うまでもない。

一年も過ぎると、彼はめざましく進歩した。

今まで寝てばかりいたのに、時々園内を一人でふらふらと散策するようになった。もちろん指しゃぶりはすでに卒業、残る頭叩きだけをやりながら、一階から二階まで、園内のあらゆるところをまわって歩いていった。もう定時排尿で、おしっこも三時間おきになり、時には一階の開けてある窓から、運動場に向かって飛び出すこともできるようになった。

そんな時の彼は、見事に宙を飛んで、地上に着地して見せた。

「うわー、政あきが、一人で外に出たあーっ」と言って喜ぶ職員もいたが、中にはまだまだ一人歩きは危険だと首をかしげる職員もいた。

月に一度の親の面会日だった。親達がたくさん来て、園内がざわめいていた。職員達は、猫の手も借りたいと言わんばかりに、忙しく飛びまわっていた。

誰もが、ほんのいつ時、政あき君の存在を忘れた、そんな時に限って大変な事件

が起きた。

「政あき、飛べー」という職員の違いが通じ過ぎてしまったのか、それとも、政あき君にとっては、一階を攻略し終わったので、次は二階と思ったのか、一階の窓から運動場に向かって飛び出した時と同じ要領で、二階の窓から空中に向かって飛び出したのであった。

「バターン」何か大きなものが落ちる音がして、「何かが落ちた！」と直感した職員が急いで現場に駆けつけて見ると、彼が虫の息で地上に横たわっていた。

「担架、担架持ってこーい」

「車を、玄関に横づけにしてくれーっ」

「誰か、病院に大至急、電話してくれーっ」

こんな時の職員の動きは、まるで火事場の消防士のようなのだ。

そして、病院に送り出したあとは、みんな心配のあまりにうなだれて、しょんぼりしてしまふ。付き添いで病院に向かった職員からの第一報を、今か今かと待ちわびるのである。

病院からの第一報が入った。電話口の職員の声はずんである。

「不幸中の幸い。ちよっと肩の骨を外したようですが、今、整形医が、その手当を終えました。本人、わりあい元気です」

「うわーい、政あき、大丈夫ですってよ」と言いたがら、女子職員の中には涙ぐんでる者もいた。

(四)

散歩は、子供達にとっては重要な意味を持つ。必ず、二、三人ずつ手をつないで歩かせる。

当然、職員が一番重い子の手を握って歩くのだが、手を握るより、握らせるように仕向ける。互いに手を握って歩くことは、連帯感を育てるために、ぜひとも必要なことである。

特に、比較的重い障害者と軽い障害者のペアーを組ませることは、日常生活の上でも、軽度の者に重い者の介助や手助けを習慣づけて、助け合って生きていくことを憶える意味で、効果がある。

子供達は子供達同士の、何か特別な関係を持つようで、時々、見ている者がほほえましく思えるような状況も出現する。すなわち、誰も教えないのに、車が通ると軽い者が重い者をかばって車の通る側に立つなど、職員達、すっかり感心してしまふのである。

父ちゃんは、うちの子供達は重度も軽度も、よその基準ではみんな重度なんだから、「死ぬまで共に生きていくことを想定して、活動をおこなえ」と、職員達に言

って聞かせる。

多分、こんなことを言うと、やりもしないで勝手なことばかり言う一部の福祉評論家から、グループ別、能力別にやるべきだとか、社会復帰させるための訓練をすべきだとか、作業指導中心にやるべきだとか、いっせいに攻撃されること間違いなしと思われるが、言いたい人には言わせておけばいいと思っている。

社会復帰は、流れる水が溜まってあふれ出るようなもので、これからの園の歴史の中で、いくら止めても、子供達の中にはそれを越えて行く者もいるかもしれないが、無理にはやらせまいとも思っている。

すなわち、当面の目標は、決まっている。「この場所で、共に生きる」ことである。だから、散歩の目標は、共に生きるための助け合いを憶えることなのである。さて、散歩の様子をも少し話そう。

じゅん子ちゃんは入園して来た時、百メートルを満足に歩けなかった。いや、歩けなかったというより、歩かなかったと言ったほうが正しいかもしれない。

それに、入園時に歩けなかったのは、じゅん子ちゃんに限ったことではなく、やっちゃんも、みつ夫君も、まち子ちゃんも、きみ枝ちゃんも、しも条さんも、やはりまともに歩けなかった。最後に入園してきたみつ夫君などは、三步、歩いただけで、立ち止まってふらふらしていた。そのため、職員達がいくら上手に散歩のペアーを組ませても、遅い者、速い者、よく歩ける者、歩けない者というふうに差が出てしまうのだったが、四年過ぎてみると、一応どうやらまとまりつつある。

今では、一番歩けないじゅん子ちゃんさえ、ゆうに二キロメートルは歩く。散歩の距離は、じゅん子ちゃんのコンディションに合わせる。じゅん子ちゃんが歩ける限度いっぱいまで、全員が歩く。だから、ことのほか足が達者な政あき君は、いつももっと歩きたがる。そんな時、職員は彼に対し、途中で引き返させて、また戻るように仕向ける。散歩のスピードはわりあいゆっくりだが、歩くことが達者な者には、砂入りリュックを背負ってもらうこともある。

さて、今日も、ラジカセの音楽を鳴らしながらの午前中の散歩が終わろうとしている。正確には、すでにみんな終わって園舎の中に入ってしまったのに、じゅん子ちゃんだけが園の前の土手を歩いている。じゅん子ちゃんが遅くなるのは、骨盤の変形で足運びが不自由なため仕方がないのだが、それでも職員が、じゅん子ちゃんにきびしく声をかける。

「じゅん子、ほら、速く歩かないと、昼御飯に間に合わないよ。どうだ、お腹すいたろ?」

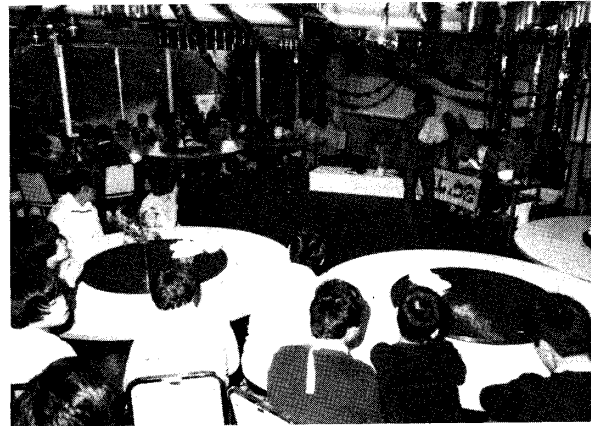
じゅん子ちゃんは、声をかけられた途端に立ち止まって、首を横に振りながらしやがみ込んでしまっ。

多分、「いけない、自分が行くまで食事するのは待ってほしい」と言っているのかもしれない。

こんな時、職員は、じゅん子ちゃんの正面に出て両手を握って、一緒にしゃがみ込む。そして、彼女の眼をにらみつけて、大きな声で怒る。
「じゅん子、一生懸命歩かなくちゃ駄目じゃないか。いつもびりなんて、最低だよ」と言ってる。
怒る時も、「手を握って、眼を見て、語りかけろ」が応用される。



▲秋の運動会。父ちゃんと政あき君の二人三脚は速いぞ。



▼月に1度の誕生会。

(五)

二年目の春、父ちゃんは職員達に向かって、「きびしさとやさしさの両方を、使い分けろ」と指示した。

そして、きびしさの裏側にあるやさしさこそ本当のやさしさで、やさしさばかりでは単なる甘やかしだと言った。また、その逆のきびしさばかりでは、子供達にとっては、単なる鬼にしか過ぎないとも言った。

初めに、父ちゃんのきびしさの実践が開始された。それは、木村まー君の食事時のしつけであった。御飯のたびに食べたものを「ベエーッ」と吐き出し、つばを交

せて食べ直す彼の癖は、女子職員達の眉をいつもひそめさせたし、おかずの中から野菜を全部拾い出して外に放り出す癖は、長年の栄養障害で顔に吹き出ものを出させ、痔を悪化させて脱肛にまでなる始末で、何としても捨てておけない状態だった。職員達はこのことを気にして、やかましく言うのだが、一向に改める気配がなかった。

もう、こうなったら、徹底的にやるしかないと思った父ちゃんは、食事のたびにまー君の隣の席を確保した。

そして、食べたものを食器の中に吐き出すたびに、「びしゃーん」と叩いた。しかし、「びしゃーん」と叩いても、とても間に合わないほど、彼は出し方が上手だった。

父ちゃんは彼の様子をしばらく見ているうちに、どうやら、口の中にほお張った食べものの量に問題があることに気づいた。

それ以来、少し余計にほお張り過ぎたと見るや、「飲み込めーっ」と声をかけながら、後頭部を「びしゃーん」と叩くことにした。

彼はそれをやられると、「うっ」と飲み込んでしまうので、しまいには「びしゃーん」なしでも、「飲み込めーっ」だけで、食べものを出さなくなった。

次は野菜食だ。最初、トマトジュースから始めることにした。食事が終わる頃になると「おい、みんな手伝ってくれーっ」と言って、近くで一緒に食べている男子職員に、手を貸してもらうことにした。三人がかり、四人がかりで、無理矢理に押えつけてでも、トマトジュースを飲んでもらおうという寸法だ。これも、徹底的にやった。

時々、やっと飲ませたトマトジュースを、「ブーッ」と吐き出されてしまって、父ちゃんも職員も、着ている服にトマトジュースを浴びて、見るも無残な姿となったが、一向にやめようとしなかった。

しまいには「父ちゃん、こりゃー駄目かもしれませんよ」と言われても、父ちゃんは黙って続けた。

そして、だんだん飲ませ方も上手になって、□に流し込んだら、すぐ口をふさいで、鼻もふさいでしまう。そうするとまー君、苦しいもんだから、「ごくん」と喉を鳴らす。途端にジュースは胃の中に入ってしまう、という具合にまでなった。

がしかし、敵もさるもの、一度飲んだジュースを、食事が終わってからプレールームの先のほうまで行って吐き出すという、高等戦術に出た。しからは父ちゃんもと、今度は食後でなく、食前に飲ませることにした。

こうして、ついにトマトジュース戦に、父ちゃんが勝った。そして、もうその頃になると、全職員が、まー君を徹底的にマークするようになった。野菜食は、あれよあれよという間に卒業した。

じゅん次君が、どういふわけか、近頃、怒りっぽい。

彼は中度の知恵おくれだが、耳が聞こえない。障害判定書には筆談可能と書いてあるが、実際にはあまり役に立たない。

ちなみに、職員が小さな黒板にチョークで「ドウシテ、オコッタノカ」と書いて渡すと、同じく「ドウシテ、オコッタノカ」と書いて返してよこす。

「いい加減な判定だな。これじゃ、ただ字が書けるだけで、筆談にならないじゃないか」と職員達、判定のずさんさにあきれている。

さて、じゅん次君がなぜ怒るのかわからないでは、対策の立てようがない。

しかし、様子を見ると、食事時がほとんどなので、どうやら、食事に対するわがままが原因らしいことがわかる。

多分、家にいる時、母親から「あれ食うか？これ食うか？」とやってもらっていた習慣が、施設に来てからは、できない、してもらえないという不満となって現われているのかもしれない。

当然、施設では、そんなことはできないし、ある程度、出されたものを我慢することができないと、本人のためにも困ることになる。

父ちゃんは、彼の隣で食事をしながら、潮時を待つことにした。頂点に達した時に、少し思いつきやることだとも思っていた。

そして、ある日、その時が来た。

夕食が終わろうとしていた。ほとんどの子供が食事を終えて、あと片づけを始めたのに、じゅん次君だけがぐずっていた。

ちらつちらつと横にいる父ちゃんに視線を送っては、食べものが入ってる食器を持ち上げて、カタンカタンと音をさせて、テーブルの上に放り出していた。

「まだだ！」と父ちゃん、心に言い聞かせて待っていた。じゅん次君は、いつものように挑発しようとしているらしい。相手を怒らせて、自分も怒るというパターンだ。

今度は、これでもかと言わんばかりに、父ちゃんの顔を覗き込みながら、円形テーブルの上にのせてあるターンテーブルを、持ち上げて見せた。

おかずが入れてある大皿や、その他の食器類が、ザザッとすべって、向こう側にいるほかの子供に降りかかっていった。

「今だっ！」と思った父ちゃんは、「ぼしっ」と一発、横びんたを、じゅん次君めがけてくらわせた。

それから、大人同士の喧嘩みたいに、めちゃくちやになった。それは、喧嘩といってもまったく一方的で、父ちゃんの横びんたがしつっこく数を重ねるだけで、じゅん次君はもがきながら手をぐるぐるまわすだけ、それも次第に収まり、あとは父

ちゃんのなすがままであった。

しばらくして、二人は静養室に対峙して、椅子に腰かけていた。じゅん次君はまったくおとなしくなって、下を向いたままである。

父ちゃん、彼をじーっと見ているうちに、「やり過ぎた」という感情にとらわれる。

「最初のびんた一回はいいとしても、あとの続きはやり過ぎた」という自責の念にかられ、自分に対していやけさえさしてきている。

「ただ、こここの権力者としてしか彼と交われない自分は、何とおろか者なんだろう」とも思う。

父ちゃんは、今の自分の気持を素直に彼に伝えたいと思った。そして、静かに立ち上がると、黒板のところからチョークを持ってきて、床に大きく「ゴメンナサイ」と書いた。

すると、父ちゃんが使ったチョークを、今度はじゅん次君が拾い上げて、「ゴメンナサイ」と書かれた横に同じく、「ゴメンナサイ」とゆっくり書いた。

二人共、見つめ合った。

父ちゃんは、いつものように同じ字が書かれたけど、これだけは、お互いの気持がそれぞれ書かれたのだと、確信できると思った。

涙がまぶたにじわーっと浮いてくるのを感じた。視線がかすんでいく先に、じゅん次君の顔があった。そして、その眼にも涙が溜まっているように見えた。

(七)

このところ、としひろ君の破壊活動に対し、職員集団が総攻撃を開始する。

戦闘の火蓋を切って落としたのは「殿下」こと館野先生である。

殿下、すなわち職員達の中で一番クールな主任さんも、どうやらたまりかねたらしく、満を持しての応戦ぶりである。

がしかし、相手は大変な人物、体重七十五キロ、身長百七十五センチの大男で、おまけに、ブレスラーのように、一日中腕をぶるんと振るわせながら、こぶしを握り肩をいからせる、という動作をしているので、やけに上半身が発達して、見るからに強そうだ。

片や殿下はというと、名が示す通り、どちらかというとやさ男。

体力では、闘いが始まる前から勝敗の結果はわかっていると思いきや、いざ運動場で弁慶と牛若のように対決した二人、いきなり小さいほうが大きいほうに向けて、足がけ一発！柔道の大内刈りである。

見ていると、殿下の足がけはとどまるところ知らずで、大きいほうがころころと、面白いようにころばされている。

「よしよし、それでよし」見ていた父ちゃん、思わずにやりとなる。さんさんにやられたとしひろ君、殿下様の言うことは、どうやら素直に聞けるようになったらしい。

さて、昼過ぎになると、大男が異様な姿で、プレールームをのそりのそりと歩いている。よく見ると、こまかく破いたシャツやパジャマをじゅず玉のように縛ってロープを作り、これを体中に巻きつけてある。

父ちゃん、思わず「ぷーっ」と吹き出しそうになるのを堪えて、「いったい、この格好はどうしたの」と聞く。

殿下は落ち着きはらって、「シャツやパジャマを破いたから、もう着替えない。だから、自分が破いたシャツとパジャマをつないで、しばらくぶら下げている、とまあ、そういうわけですよ」と言う。

「なるほど、で彼、おとなしく着てるかい？」とまた聞くと、「いやー、どうも、自分で格好の悪いことがわかっていゝらしく、しきりに取ろうとするので、取っては駄目だということになってるんですよ」と言うのである。

としひろ君は、職員の誰彼かまわずに、「取ってくれ」と言わんばかりに近づいていくが、こんな時の職員達は結束が見事で、女子職員でさえ、「あんた、それ、似合うわよ。しばらくそうしてなさいよ」なんて言いながら、くすくす笑っている。

彼はよほど参ったらしく、しまいはしよんぼりしている。

夕方、殿下が「もう破いちや駄目だよ」と言っただけで聞かせながら、パジャマシャツロープをほどこいてあげると、彼は神妙な顔で、その場にへたり込んでしまった。としひろ君はそれ以来、めったにシャツを破かなくなった。

さて、次は風呂場荒しだ。

シャツ破りをやめた彼が次の攻撃目標としたのは、風呂場の石鹸箱、洗い桶、座り台などのプラスチック製品だった。

彼、これらをまとめて、そのでっかい足で踏んづけるのであるから、たまったもんじゃない。「バリバリン」という、音と共に、あっという間におしゃかだ。

買ってきて補充するが、とても間に合わない。こだわり出すとそれ専門にという変な癖であるから、職員達も風呂場を守ることに必死になるのだが、風呂場の鍵を何かの都合でちよつとはずすきを一日中狙っているらしく、どうしても防げない。時には、引き戸二枚を、その腕力にものを言わせて、そっくり外してのご乱行である。

次は父ちゃんの出番だ。

要領は、前回殿下が示した通りで、大風呂敷に例の壊したプラスチックのかげらを山のようにつめて、これを背中に背負わせようという作戦だ。

今度は子供達まで、被害者としての自分達の立場をちゃんとわかっているらしく、「あいつのために、自分達が使う風呂桶が壊されてしまった」という憎しみを込

めて、彼のうしろについて歩きながら、時々背中の風呂敷つつみを「ガシャッ、ガシャッ」とひっぱたく。半分は遊びで、半分はこらしめのつもりらしい。

としひろ君、たまりかねたらしく、走って逃げて歩くのだが、子供達はどこまでも追いかけていく。何とか外してもらおうと職員に近づくと、職員達もにたにた笑いながら、例の風呂敷つつみをさがさとゆすり上げる。

この時はもっと結果が早かった。

二時間もすると、彼は大粒の涙をこぼしながら、プレールームの真ん中にどたりとしやがみ込んだまま、もう動こうとしない。

そこへ子供達がいったかつて、風呂敷つつみをこづく、叩く、ゆすり上げるで、わいわいがやがやとやっている。

としひろ君、これまた、それ以来びたりとプラスチック破壊をやめる。

さて、その次は絨毯だ。

プレールームとロビーには絨毯が敷いてあるのだが、彼はある時、これを破る技術を身につけた。

すなわち、絨毯の端を持ってぐにゃぐにゃと揉むと、その場所がやわらかくなる。

そこへ指を突っ込んで、力まかせに引き裂いてしまうのだ。

怒っても、少しくらいぶつても、聞くもんじゃない。絨毯をいくら買い替えても間に合わない。

彼独特の、目じりを下げてじーっとものを見てる時が、危険信号なのだが、何せ一日中、朝から晩まで狙っているので、これもまた防げない。

このたびは加藤園長の出番だ。

次なる必勝の手は、絨毯の簀巻きである。

園長先生、子供達に手伝わせて、巨大な「としひろのり巻」を作る。これをころがして、またまたみんなで「ギャー、ギャー」と騒いでいる。

としひろ君、またもやお手上げ！

彼、いろいろとこたわって破壊活動が続けたが、そのたびに職員と子供達の十字砲火を浴びて、こっぴどい目に会わされるので、もうすっかり自信を失ってしまったのか、それともおとなしくなったのか、借りてきた猫のようになってしまった。

そして今では、むしろみんなと一緒にお手伝いをしたりして、一日中機嫌よく、時々笑顔まで見られるようになったのである。

(一)

光生園では、人園者四十人中三十二人が、抗テンカン薬や抗精神薬を服用している。

中でも、重積テンカン症状を持った者が数人いるが、なおと君とふみ子さんの場合はものすごい。こんなの見たことがない、聞いたこともないというほどの、記録破りの症状を示す。

ちなみに、ふみ子さんの場合、五分おきの連続発作を二日間、四十八時間も続けた記録があるし、なおと君の場合は、三十秒サイクルの大発作を、五時間連続という、それぞれ超弩級の記録がある。

開園して間もなくのことであった。

ある日、加藤園長と父ちゃんは、夜中の三時頃まで議論し合っていた。

それは議論というより、むしろ、父ちゃんの一方的な要求であった。すなわち、重度者優先処遇のことで、彼に改善を迫っていたのだった。

結局、父ちゃんは、子供達のグループ分けのことで、彼に従来の考え方を改めさせようとしたのだが、父ちゃんがあくまでも重軽混合の中の重度者優先処遇を主張するのに対し、園長は、職員から上がってきている意見通り、重い者は重い者同士で集め、軽い者は軽い者同士で集めた上で、職員を配置する時に重度者のほうへ数を余計にまわせば、それで重度者優先処遇になる、という意見であった。

父ちゃんは一步も譲らなかった。

重い者を助けて、みんなと一緒に生きていこうとする暮らしそのものに、重度者優先処遇の概念があるのであって、グループ分けして別々に処遇したら、従来の施設と少しも変わらないと言ったのだ。

豊岡の九月の朝はさわやかである。

朝日が昇る時、樹木の夜つゆに濡れた葉がいつせいに光をはじき返す様子は、一瞬まばゆく感じるほどの美しさだ。

父ちゃんゆうべの議論に少し疲れたようだが、朝のすがすがしさに助けられ、気分よく早番で出勤する。

朝七時は、職員にとっては仕事の始まりである。とにかく、気分よくスタートするに限る。「おはよう」と声をかけながら園に入ると、早く起き出してきた数人の子供達が、いつせいに笑顔を返してくる。何も言えなくても、笑顔が一番の挨拶なのだ。

早番の職員達、子供達を排便に連れていったり、顔を洗わせたり、歯みがきを教えたりで、忙しくきびきびと働いている。

「おはようございます」の声が、あちこちの職員から起る。

八時、朝食が始まる、

慎二先生が、なおと君のそばに座り、その向かい側に父ちゃんが座る。

今朝は、なおと君、少しむずかっている様子で、『ピーポーパー、ピーポーパー』と、パ行音を盛んに発している。最重度のなおと君は、パ行音以外に声が出ない。興奮してる時の合図でもある。

食事が始まっているのに、彼、今朝はどうしたとか、一向に食べようとしない。隣の慎二先生は半介助の方法で、少し無理にでも、最初のひと口を食べさせようとしている。

すると、どうしたとか、急になおと君が、ぼったり椅子からころげ落ちるようにして、床に倒れてしまった。

「あれれ、なおと、どうしたんだ？」と慎二先生、あわてている。

なおと君は倒れるや、いきなり足をぴーんと突っ張って、痙攣発作を始めた様子だ。

「発作だーっ」という誰かの大声がすると、食堂の中は騒然となったが、慎二先生、落ち着いた様子で、テンカン発作時の常識通り、すぐ目の前のテーブルから口拭きタオルを取って、なおと君の口の中に入れてあげながら、発作がやむのを待っている。

しかし、どうしたとか、彼の痙攣は、一向に止まらない。

いったん収まらねば、ベッドにも運べない。がくんがくんと大きく体をゆすったあと、痙攣はだんだん小さくなるのだが、途中で、またぶり返してくる。五分くらい続いたが、止まらない。慎二先生、弱っている。父ちゃんの眼を見て、指示を仰いでいる様子だ。

父ちゃんは、「ベッドに、このまま運んでしまおうよ。これじゃ、いつまでたっても終わりそうもないよ」と言っただけ。

二人部屋のベッドに移して、寝かされたなおと君は、激しく痙攣し、痙攣と痙攣の合間も体を硬直させていた。そして、その硬直している間の一瞬に、大きく深呼吸を二度して、また同じ動作に戻っていくということを、繰り返していた。

すでに、顔面にチアノーゼ（血液中の酸素が欠乏して、皮膚や粘膜が青色になる状態）が現われ、医療に経験のない父ちゃんにも、彼が今、生命の危険にさらされていることが直感できた。

（急いで医者に連絡しなければ、このままでは命が危ない）そう思って、二人部屋から事務所に戻った父ちゃんは、先月、囑託契約をしたばかりの、T病院精神科に電話を入れる。

「もしもし、子供が一人、テンカンの痙攣発作を起こして止まらないのですが、どうしたらいいでしょうか？」

のちによくわかったことなのだが、実際に相談を受ける側にしてみれば、こんな程度の話では、どう対処せよと言えるはずがない。

しかし、その時の父ちゃんにしてみれば、施設を開園してまだ数カ月、何もかも初めてで、先ほどの慎二先生のなおと君に対する処置にしても、数週間前にテンカンに関する講習会をおこなって、やっと身につけたもので、とにかく、わからないことばかりの最中のことであつた。

父ちゃんは必死だつた。何とか、なおと君の症状を正確に伝えてみようと、努力していた。そして、その必死さが電話の向こう側の医者に伝わらないもどかしさを感じていた。

医者は患者が見えないから、勝手なことを言っていた。

「痙攣発作は、そつとしておけば、いづれ止まります。落ち着いたら、一度こちらへ本人を連れてきてください。脳波検査などをやってみないと、こちらとしても、今のところ、どうしなさいとも言えません。あ、そうだ、その子がそちらに来る前に、かかつていた病院があるでしょう」

「はい、多分あると思います」

「その病院に連絡して、今までそういう時にどうしていたか、聞いてみてください。あ、それから、血圧と脈拍を測って、看護婦に報告させてください」

「はい、わかりました」

何とももどかしい話だ。こちらは、なおと君が今にも死にそうだと思っているのに、どうも、様子がうまく伝わらないのか、医者は一向に腰を上げてくれる様子がない。

さあ、それからが大変。父ちゃん、まず親に電話を入れる。どういうわけか自宅は留守で、連絡が取れない。福祉事務所にも電話を入れてみたが、父親の勤め先も、なおと君のかかりつけの病院もわからない。

それではというので、今度は光生園に来る前にいた施設（これがまた大変なところで名前は〇〇育成園というのだが、個人経営の無認可施設で、聞くところによると、先生一人にお手伝いさん二人で、重度障害児七人を、入所者の親が費用を全額自己負担というスタイルで、経営されているそうだ）に、電話をする。

最初、さっぱり要領を得ない。

今まで、なおと君がかかつていた医者を教えてくれと言ってるのに、返事の内容が、しどころもどろろなのだ。

父ちゃん、持ち前の短気を爆発させる。

「あんた、何を勘違いしてるんだあーっ。人の命にかかわることだぞ。何も、なおとを、おまえさんの施設に送り返そうというわけじゃないんだよ。俺はなあー、彼が今にも死にそうなので、前にかかつていた医者に、どうしたらいいか聞きたいと思って、その医者がどこの誰か知りたくて、電話しているんだ。わかったかあーっ」

「すみません」

「すみませんじゃないよ。かかりつけの医者は、いるのかいないのか、どっちだよ」

「います」

「いたら、教えろよ」

「でも」

「何が、でもなんだあー」

母ちゃんが、そばでおろおろしてる。

「あなた、そんなに大きな声を出さないで、もう少し静かに話したら」と言いながら、しきりに父ちゃんをなだめようとする。

父ちゃんは、「うるさい。あっちへ行つてろ」と、もうなかばやつ当たり気味だ。

どうやら、やっと教えてもらって、先方の医師に連絡が取れる。話の内容では、なおと君のテンカン抑制剤は、頼まれて調査して出しているが、患者のことはあまりよく知らないという返事だ。

さあ、いよいよ万事休すである。

父ちゃん、何が何だか知らないけれど、やたらに腹が立って仕方がない。もちろん、最重度障害児に対する処遇が、あまりにもいいかげん過ぎる世間一般に対する怒りもあるが、主に自分の無力さに対するものだ。

そうしてるうちにも、職員が一人、駆け込んでくる。

「先生、なおと、まだ止まりません。あれから一時間です」と言って、また駆け出していく。

父ちゃん、気を取り直して、また先ほどの施設に電話する。

「頼むから教えてください。お宅では、なおと君はテンカン発作がありませんでしたか？」と、さっき怒ってどなりつけた相手に、今度は哀願調でくだがっている。もう父ちゃんは、恥も外聞もない。

しばらく相手は電話の向こうで黙っていたが、ぼつりぼつりと話し出した。

「なおと君は、うちでも連続発作がありました。疲れた時や、季節の変わり目や、興奮した時にあるのですが、長い時は三時間に及ぶこともあり、そんな時は私のほうでも、最初の頃は医者で電話をしたりしたのですが、一度も往診してもらえず、仕方がないので、そのまま放っておきました」

「そんなばかなあー、それでは、そのまま死んでしまうかもしれないではないですか」

「はい。死んでしまうかもしれませんが、私どもでは正直言って、それ以上、手の施しようがありませんでした」

聞き終わった父ちゃんは、受話器をぼとりと落とすように置いた。もう一度、T

病院の精神科に電話しようかどうかと迷いながら、しばらくそこに立っていた。そして、いたたまれない気持ちを鎮めようとして、たばこに火をつけてみたが、途中でそれを灰皿にぎゅうぎゅうと押しつけて揉み消すと、まだ発作が続いているはずの、なおと君の部屋に急いだ。

彼は、最悪の状態であった。

付き添っている慎二先生が、父ちゃんの顔を見るなり、「病院、どうでしたか？」とあせり気味に聞いたが、父ちゃんは、ただ首を横に振っただけで、何も答えようとはしなかった。

そして、気を取り直すように顔を上げると、「心配するな。テンカン発作くらいで、人が死ぬもんか」と言った。多分、それは、慎二先生を力づけるためだけに、自分に言っただけの言葉だった。

目の前で、がくんがくんと、大発作が始まっていた。そしてすぐに、なおと君の四肢に硬直が走った。眼が引きつり、顔が歪み、見ている者の胸をしめつけるようなものすごい光景が、そこに出現した。

慎二先生が必死に、しがみつこうにして、なおと君の両腕を押えているのを横目に見ながら、父ちゃんはまた、部屋を飛び出していった。

電話の向こうで、工病院の精神科医は困っている様子だった。

鎮静剤や抗痙攣剤の投与は、すでに看護婦の小原さんが指示を受けて実施済みだったし、これ以上ほかに打つ手はないようで、あとは待つのみという結論が出ているのだった。

「先生、来ていただけませんか？」

「鈴木さん、お気持はわかります。しかし、私がそちらに行っても、患者さんにしてあげられることは、もう何ひとつありません」

「でも、先生あれから二時間も続いているのですよ」

「……」

「このままでは、死んでしまうのではないかと……」

「……」

医者は、しばらく黙っていた。電話の向こうで、躊躇しているようでもあった。そして、父ちゃんに向かって、厳かに、宣言するような調子でしゃべり出した。

「鈴木さん、これからも当然あることでしょから、言っておきます。テンカン発作が続いている間は、患者は動かさせません。ですから、入院させることができません。入院できないということは、そちらで、患者の発作が収まるまで処置しなければならぬのです。とにかく、収まるのを待って、患者をすぐこちらに連れてきてください。いろいろ検査をしなければ、正直、先ほど指示したこと以外は、どうにも対応の方法がないのです」

二時間、じたばたやきもきしたことは、すべてこれで終わった。

あとは、なおと君のそばで、じっと見守るしかないと思った父ちゃんは、加藤園長に家族との連絡を頼んで、まともや二人部屋に入っていた。

慎二先生に交替をうながして、看護婦と一緒に彼のそばに付き添ってみると、改めて発作の恐ろしさを感じるのだった。

なおと君は「ピーパー」とパ行音をひと声発して、大きくひと息深呼吸をしたあと、おそらく数百回目だろうと思われる大発作に、また突入していった。がくんがくんと膝がゆれて、指先が青黒くなるほど、全身に力が入っていった。

それから、時間が限りなく長く感じられて、秒きざみで時が過ぎていくのを待っていた。長い長い、半日であった。

なおと君の発作がどうやら収まったのは、午後の二時過ぎだった。その後、本人はいびぎをかきながら、深い眠りに入っていた。

ひと休みしたあと、父ちゃんは看護婦に病院との連絡を頼んで、外に出た。運動場の足洗い場のセメント塗りをするためだった。

そこへ先ほどの慎二先生が、「僕も手伝いますよ」と言って現われた。彼は仕事を手伝いながら、ぼつりとひとり言でもいうように、父ちゃんに向かって話しかけてきた。

「先生は、テンカンのことをよく知ってますねー」

「いや、知らないよ」

「えー？うそー、だってさっきは、テンカン発作じゃ死なないと言ったじゃないですか。それに、何だかばかに落ち着いていて、僕はてっきり、鈴木先生が落ち着いているから、これは大丈夫なんだと、そう思ったけどなあー」

「そうかい。俺はあわてていたぞー。てっきり、なおと君が、あのまま死ぬんじゃないかと思っていたがなあー」

「うわー、これはひどいや、まるでペテンだ」

「あつはつは、あつはつは」

二人共、笑っていた。人の命を守りきった幸福感に酔っていたのかもしれないかった。

「慎二先生、教訓をひとつ言おうか」

「えー、お願いします」

「いいかい、指導者たる者はどんな時でも、自分があわてていても、決してそれを見せない。見すかされないこと、泰然としていることだというんだがね」

「なるほど、それで先生は、あんなに自信ありげに、テンカン発作中は死なないなど言ったのですね」

「いや、違う違う。あれは、俺のなおと君に対する、祈りみたいなもんだよ」

「そうですか、それにしても、俺はてっきり、もうなおと君が危ないと思っていたから、あのひと言で、びしっとしたのですがねー」

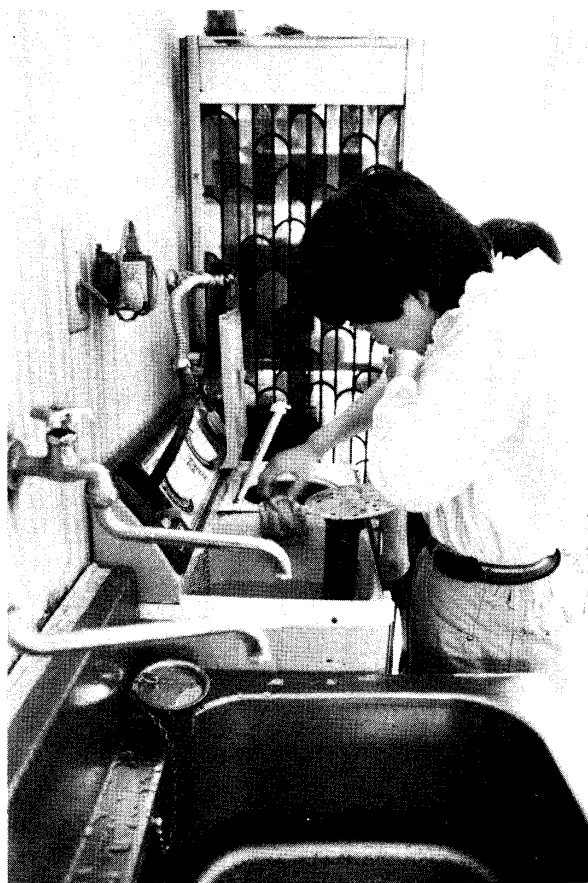
「なるほど、そいつは怪我の功名だったなあ」

「あっはっは、あっはっは」

二人は、また笑った。

父ちゃんは、いい青年と一緒にこの仕事を始めた幸福感にひたっていた。

夕暮れの赤い太陽が西の山に、今まさに沈むところであった。晩夏の熱い一日は、いつまでも終わることを忘れてしまったようで、大地は真昼のように熱気をほとばしらせていた。



▲さあー、食事が終わった。ぞうきんを洗ってあと片づけ。手でも洗えるけど、洗濯機の方が便利だよ。

(二)

開園してすぐ翌月のことだった。てる雄君という子が入園してきた。

県北の児童施設を十八歳になる前に、どちらかという追いつめられるようにして、光生園に入ってきたのだった。

彼は、重度知恵おくれと躁鬱病の合併症で、扱いにくさにかけては、当時、園内一だった。

てる雄君は、前の施設でも手に負えない状態であつたろうと推測された。そして入園した日から、「ヘビ、ヘビ、ヘビ、ベルト、ベルト、ベルト、鈴木さん、鈴木さん、六時に起きる」などという、まったく意味のない言葉を口から泡が出るほど口走りながら、廊下を全力で疾走するという具合であつた。

翌日の晩のことだつた。本人、一向に寝ようとしないので、当直職員が二日も寝ないことを心配して、少し無理にでも寝かそうとすると、急に職員に向かって殴りかかってきた。

当時、父ちゃんは園の二階の一室にずーっと泊まり込んでいたのだが、夜中の十二時頃、階下があまり騒がしいので、目がさめて起き出してしまった。急いで騒いでいる現場に駆けつけると、てる雄君と職員が、つかみ合いの喧嘩の真っ最中だつた。

彼は、ほとんど大人と変わらない体力と、相当、他人を攻撃する能力を持ち合わせているらしく、どうやら、職員のほうが遠慮がちのため、旗色が悪い。だんだんあどずさりして、ついに窓際まで追いつめられたようだ。ちよつと見ていた父ちゃんは、ドアを開けるなり、サンダルを脱いで片手に持つや、走り込んでいつて、てる雄君の背中に「バシッ」と一撃をくれてやった。

「こらーっ」「先生にはむかうとは何事だあーっ」と、夜中の居室に大声が響きわたつた。

てる雄君は、父ちゃんの大声と一撃が応えたのか、急におとなしくなつて、へなへなとその場にしゃがみ込むと、今度は「わーわー」と声を出しながら、泣き出してしまった。

さあ、それからが大変。なかなか泣きやまないの、ほかの子供が起き出したら困ると思つた父ちゃんは、彼を外に連れ出した。すると、何を思つたのか、外に出た途端に一目散に走り出してしまつて、父ちゃん、追いかけるという具合になつてしまつた。

園を出ると、だらだら坂道があり、小さな峠があるのだが、彼は、その峠まで一気に走つた。

そして、峠の頂上まで来ると、急に立ち止まつて、「ヘビ、ヘビ、ヘビ」と、例のうわ言を繰り返した。

追いかけて来た父ちゃんは、しばし息をととのえと、「てる雄、帰ろうよ」と言いながら、彼の手をゆつくりと握つた。

冷たい手であつた。父ちゃんは、心が冷えている彼に、どうしたら受け入れてもらえるだろうかと考えていた。

星がきれいだった。そして、少し離れて見る園も、城のように美しかった。

「みんな寝ているんだよ。起きているのは、おまえだけなんだよ」と言つて聞かすと、彼はわかつたのか、しきりに首を縦に振つて見せた。先ほどまであばれていた

ことが、嘘のようだった。

入園後、二週間たったある日、てる雄君がいなくなった。

父ちゃんが、何日も園に泊まり込んで少し疲れたので、久しぶりに家に帰って寝た、その翌日の朝だった。

「あなた、大変よ。てる雄君が行方不明になったと電話がありましたよ」と言われて叩き起こされた父ちゃんは、園まで寝巻のまま走った。

子供がいなくなったのは、園では初めてのことなので、職員達もみな、どうしたらいいかわからなくて、ただうろうろと、その辺を捜しまわるだけだった。

父ちゃんの大声が、園内に響きわたった。

「職員は、みんな玄関前に集まれー」

「半分は園内把握。半分は俺と一緒に捜索に加わる。一人ずつ方面分担をする。慎重二先生、鴨川方面、運転手は館野先生、車は園のライトバン。遠藤先生、大山旧街道方面、運転手は岡田先生、車は自家用車。俺は天羽方面に向かう。あと残りは、園内外と付近の捜索をする。それから居残り組は、今、園長が自宅からこちらに向かってるので、到着次第、その指示に従うこと。捜索隊全員は、十五分間隔で、必ず園と電話連絡をする。いいなっ」

職員達、やっとうと統制が取れて、きびきびと動き出した。

本格的な捜索が開始されて、約一時間過ぎた。職員達は、捜さねばならないと思いついたところは、ほとんど全部走りまわってしまった、もうくたくたになっていた。

父ちゃんは、（我々だけでは、もう手に負えない。地元の消防団にでも頼んで、山狩りをしなければならぬ）と心に決めて、園の事務所に戻った。すると、ちょうどその時、約三キロ離れた農家から、電話が入った。

「あのう、多分、お宅の園の子供さんだと思うんですが、今、うちに来てますよ」と言われて、膝ががくがくと曲がってしまった。

加藤園長に捜索隊引き上げの連絡を頼んだ父ちゃんは、お礼の酒一升瓶をぶら下げて、てる雄君を引き取りに向かった。

彼のまよい込んだ家は、大きな門構えの庭の広い農家だった。庭には、今朝早く畑から取ってきたらしいスイカが二十個ほど、むしろの上に置いてあって、その前にてる雄君がしゃがんでいた。

そして、「一個、二個、三個、五個、八個」などと、でたらめに数えていた。

父ちゃんは、農家の主人らしき人に知らせてくれたお礼を言い、受け取れないと頑張っているのを無理に、ぶら下げてきたお酒を差し出してから、てる雄君を連れて農家をあとにした。

二人共、両手には今しがたまで数えていたスイカが、おみやげとしてぶら下がっていた。

騒ぎ出してから、三時間が過ぎていた。

夏の朝十時の太陽は、もう頭の真上まで来ていて、汗が二人の背中にしみて流れた。

樹木がまったく動かない林道をとぼとぼと歩きながら、彼も父ちゃんも、ひと言もしゃべらなかった。

躁鬱病は、躁と鬱が波のように繰り返す症状である。

てる雄君の場合は、鬱の時はどうやらおとなしく、別段これといった問題はないのだが、躁の時が大変なのであった。波は、今のところ二週間おきで、最悪状態と普通の状態が交互にやってきた。比率は半々だった。すなわち、二週間は職員が気が休まるが、あとの二週間は地獄になるというわけで、良い時は職員の指示で簡単なお手伝いまでできるほどなのだが、悪い時は手がつけられないのだった。

ここ数日、彼は荒れていた。

当直職員の眼が赤くただれて張れぼったいのは彼のせいで、夜、一睡もしないだけでなく、他人まで寝かせないのだった。

ある朝、父ちゃんが出勤すると、てる雄君が最悪の状態になっていた。

「鈴木さん、鈴木さん」と言うので、「何だ、俺に何か用か？」と近づくと、付き添っていた職員が、「違う、違う」と、手で合図して見せた。鈴木さんとは、どうやら父ちゃんのことではないらしく、昔の彼の知り合いの様子で、口から生つばの泡を吹き出しながら、盛んに「鈴木さん」を連呼していた。そして、ものを言わなくなる、盛んに園内を全速力で走りまわるのだった。

当直者の報告によると、やはりタバも一睡もせずだったらしく、顔面は蒼白で、息は荒くて速いし、脈拍も速そうだった。

さっそく医者に電話をすると、折り返し脈拍と血圧を測って、すぐ報告しろと指示があった、入院についても検討することになった。血圧は上が二百を越している、脈拍も一分間百二十を打っていた。

しばらくすると、父ちゃんにT精神病院から連絡が来た。入院させなければならぬのだが、今、空き部屋がないとのことだった。そして、そのかわり、ここから約三十キロ離れたK市の精神病院を紹介するから、そこへとりあえず入院させなさい、とすすめてきた。

父ちゃんは、緊急職員会議を招集した。

腹は決まっていたが、職員達の意見も聞いておきたかった。職員会議では、入院賛成組と反対組がまっぴらに分かれて、いつ果てるともない議論が延々と続いた。父親に電話しても、ただ「おまかせいたします」としか言葉が返ってこなかった。

会議での入院賛成組は、もうこれ以上は我々の手に負えないということであったし、反対組は、鍵と鉄格子の部屋に、てる雄君を預けることがかわいそうだという意見だった。さりとて、反対組に、どうしたらいいという意見はなかった。

父ちゃんが、最後に結論を出した。園ではどのみち本人の命が守れないということを職員達に言つて聞かせ、納得してもらつた上で、入院させることにした。

最初からわかつていたが、いざ、彼を精神病院に送り込むとなると、父ちゃんも職員達も、胸を痛めた。彼は予想通り、病院の鉄格子の窓がついた小さな部屋に収容された。

そこには、三度の食事がカネのお盆で運ばれ、部屋の片すみにむき出しの便器がひとつ置いてあるだけで、あとは何もなかった。まるで監獄のようなどころだった。

最初の頃、見舞いに行つた女子職員は、帰つてくると父ちゃんのところに来て、「ひどいわ、ひどいわ」と言つて泣いたりした。

父ちゃんも、時々面会に出かけた。

十分くらいしか、彼のそばにすることを許されなかったが、いったいこのままで、彼が良くなるのだろうかと思ひしくなるほど、病院と施設の待遇の違いを感じた。てる雄君は、面会に行くたびにきたなくなり、人間らしさを失っていく様子だった。看護婦が言うには、近頃では、大便を手でこねて、それを口に持つていくなどの行為が見られるとのことで、彼に会つたたびに、父ちゃんはすっかり打ちのめされて帰つてきた。

入院して一カ月が過ぎた。

てる雄君は、すっかり変わつていた。

やせて骨と皮ばかりとなり、真つ黒な顔の中の穴のようにくぼんだ眼が、白く濁つていた。まるで死人のようだった。もう起きて歩くこともなく、一日中、寝ていると言われた。

主治医に面会すると、黙つて首を横に振つて見せた。

「駄目ですか？もとのようにもたらないのですか？」

父ちゃんは、聞いてみても無駄なような気がしたが、聞かずにいられたなかった。

医者は、申しわけのように、「薬がきかないのですよ。あの子は、どんな薬も受け付けないのですよ。せめて、夜、二、三時間でもいいから眠ってくれば、助かるのですがねー」と言つて、ため息をついた。

「でも、あーして寝てるではありませんか」と、あんなふうになつてしまったことに対する、なかば憤りのようなものを込めて、少し怒りっぽく、父ちゃんは話した。

「いや、寝てることと睡眠とは別のことでして、人間が一睡もせずにいるということとは、それだけで死につながるのですよ」そう言つて、医者はもう一度、処置なしだと言わんばかりに、首を振つた。

あとは、二人共、黙つていた。

黙礼をしたあと、扉を開けて廊下に体を押し出してから、うしろを振り返つた父ちゃんは、とっさに「先生、どうせ駄目なら、子供を一度、親もとに帰してあげたらいかがでしょうか」と言つて、また部屋に戻つた。

医者は「考えてみます」と言い、下を向いたまま、もう顔を上げようとしなかった。

廊下に出ると、中庭にまぶしいほどの陽が射していた。

芝生の向こうに、患者と看護婦がバドミントンに興じる姿があった。

父ちゃんの頬に、涙が光っていた。

「てる雄、頼むから生き返って、戻ってきてくれ」と、心に祈るようにつぶやきたがら、いつまでもその場に立ちつくしていた。

十一月の連休で家にいた父ちゃんに、てる雄君の父親から朝、電話がかかった。ぼそぼそと、何を言ってるのかさっぱりわからなかったが、最後に「ゆんべ、死にました」という言葉だけ、はっきりと聞き取れた。

最初に父ちゃんが思ったのは、(あの時、入院させなければ、死ななかったかもしれない)ということだった。心の中のもう一方では(仕方がないではないか)という弁明があったが、(でも、俺が入院させなければ)という煩悶が繰り返されていた。

てる雄君の家に向かう車の中で、女子職員が「入院させなければよかったのに」と口走るなり、急に「おいおい」と、声を出して泣き出してしまった。その横で(てる雄君の父親は、俺のことをさぞかし恨んでいるだろうなあー)と思いながら、とてもやりきれない気持で、父ちゃんは黙りこくっていた。

てる雄君は、二日ほど前、親が急に病院に呼び出されて、二、三日の帰宅を許されたのだが、家に帰るとすぐ高熱が出て、近所の医師の往診を頼んだりしたが、そのまま帰らぬ人になってしまった。

父親は、「死にに帰ってきたんだ」と、しきりに周囲の人達に説明していた。そして、光生園に対しては、最後に少しの間だったけど、とてもよい施設に入れてもらえて、本人も楽しかったはずだと言って、いい印象を持っていることがわかり、少しばかり父ちゃんの心の救いとなった。

その日の晩、お通夜があつて、父ちゃんと彼の父親は、奥の部屋の前で話していた。いや、話していたのは父親のほうのみで、父ちゃんは、むしろ聞くだけだった。

「小さい時に、おっ母に死なれてなあー、それから病院ばっかかかって、薬を飲んで飲んで、どれくれえ薬さ飲んだか、わかんねーだよ」

「……」

「どういふもんか知んねーけど、二人いる子供のうち、あればっかさ気にさかかって、前の施設さ行ってる時も、腹さへってるんじゃねーか、あばれて怒られてるんじゃねーか、病氣してんじゃねーかって、どのくれえしんぺえーしたかわかんねーだよ」

「……」

「だども、やっとさ光生園に入れてもらって、今度は近ぐだし、いつでも会いにさ行くべーと思ってたがなあー」

「……」

「先生、てる雄、死に際になあー、俺に『父ちゃん、頼む』って言っただよ」

「……」

「どういう意味だべなあー」

「……」

「あの精神科の医者なあー、てる雄が死にそうだから来てくんねーかと頼んだけど、ついに来なかったよ」

「……」

「先生はあの医者に、どうせ駄目なら、一度 家にけえしてあげると、頼んでくれたんだってなあー」

「ありがとよ。本当にありがとよ。先生は、やっぱり人の親だよ」

「……」

「父ちゃん頼むって、何を頼む気だったべなあー」

「父ちゃんは、口を開くのを最後までこらえていた。何か言えば、てる雄君に対して、申し開きをしてしまいそうな気がしてならなかった。医療と福祉の話をしてみても、始まらないとも思っていた」

そして、この二カ月間、てる雄君の扱われ方に対し、何が何だかわからない、誰にも言えたい怒りが、胸の中で燃えていた。

(二)

開園一年目の年が明けて、よし雄君二十四歳が入園して来た時のことだった。

彼は、重度脳性麻痺、運動機能障害、重度知恵おくれ、テンカン症状持ち、言葉なしで、三度の食事を、母親が全介助で食べさせていたらしく、スプーンも満足に使えなかった。そして母親は、こぼすのが面倒だから食べさせていたとも言った。

園では最初の日から、食べることを自分でやらせることにした。

見ていると、顔を天井に向けて、そこへスプーンを高く持ち上げて、落とすように口の中へ運ぶので、脳性麻痺特有の体のゆれと相まって、なるほど、食べものが半分も口の中に入らないで、ほとんど外にこぼれてしまうのだった。

職員達は、すぐ彼の特徴をつかむと、まず「食べものを見ろ」と指示し、あわせて、体のゆれを止めるため、左手をテーブルの上にのせて、自分の体を支えるように教えた。本人は飲み込みがわりと早く、あっという間にわりあい上手に食べられるようになった。

光生園では、半数近くがそうなのだが、よし雄君も食べものをかまずに、う飲み

にしている様子で、園長からは、こうしたう飲み専門組の子のために、厨房に対してきざみ食を出すように命じてあるが、確実にきざみ食が、また一人増えた感じだった。

入園後三カ月ほどは、よし雄君にとっては施設生活がどうやら気に入ったらしく、笑顔を見せての穏やかな暮らしぶりだった。お母さんは人一倍、子煩悩であるらしく、用もないのに園に訪ねてきては、洗濯を手伝ったり部屋の掃除をしてくれたり、父ちゃんも園長も、時々顔を合わすと、「すいませんねー」などと礼を言っていた。

ある朝、看護婦の小原さんが真っ青になって、父ちゃんのところへ走ってきた。

「先生、大変よー、よし雄君がトイレで血を吐いてますよ」

「何いーっ、血を吐いたってー?」

父ちゃんは、血を吐いたと言われたので、てっきり結核を連想してしまったのだが、トイレに急いで行くと見ると、どうも様子が違った。

「何だこりゃあー、うわ臭い」 便所の中は、嘔吐物がそこら中に飛び散り、すごい汚れようであった。

小原さんが横で、しきりに父ちゃんに説明してくれていた。「先生、これは胃の中の食べものと血液が混じって酸化したためのもので、そのために、チヨコレート色なのです」

どうやら、嘔吐しながら、よし雄君、便もしたらしく、便の色も黒っぽいチヨコレート色だった。朝食時に出たひじきも混じっていたので、なおのこと黒さが目立った。

一面に汚物が飛び散っていて、ものすごい不快なおいが、あたりに充満していた。

さっそくK病院の内科に電話して事情を説明すると、医者の意見も小原さんと同じで、すぐ入院させることになった。

たまたま母親が来ていたので、医者の意見を伝えて、すぐ入院させるからと言うと、「よし雄は、わりあい胃腸が丈夫だから、そんなはずはない。吐いたものは血などではなく、ひじきだけで、入院なんか必要ない」と言って頑張っていた。

「検査してみても、何でもなければ帰ってこられるのだから」と言っただけで、どうやらしぶしぶだが、一緒に行ってもらったことになった。それから職員の付き添いは、病院経験の一番ある渡辺先生にやってもらったことになった。

しばらくして、K病院に向かった渡辺先生から、第一報が入った。

「胃穿孔、腹膜炎の恐れあり、至急手術の必要あるも、今協議中。患者は輸血により、わりあい元気である」という内容だった。

何を協議しているのか、それから数時間たっても連絡は来なかった。父ちゃんがじりじりしているそばで、加藤園長が「先生、患者が重度精神薄弱、CP（脳性麻

痺による運動機能障害)、言葉なし、テンカン症ということで、手術をびびっているんじゃないでしょうか？」と言いながら、腕を組んで考え込んでいた。そして、

職員達は仕事が手につかないらしく、父ちゃんと園長がいる事務所を覗きに、出たり入ったりしていた。

夕方、渡辺先生が、入院のための必要品を取りに園に舞い戻ってくるなり、心配そうな顔つきで事務所に駆け込んできた。

「父ちゃん、あちらの院長先生が、あの病院では手術できないと言ってます」

「どうしてだ」

「あんな患者は初めてで扱ったことがないから、何があるかわからないと言ってるんですよ」

「やはり、園長が心配してた通りだな。で、君、何て言ったんだ？」

「手術しないと命が危ないと言うので、僕がずーっとついているから、手術をしてくださいと頼みました」

「そしたら？」

「そういうわけにはいかない。とりあえず輸血で時間を稼いでいるうちに、何か方策を考えると言ってます」

「何か方策って、どんな方策があるんだ」

「知りません。とにかく、早く手術しないと手遅れになると、看護婦さん達も言ってます」

父ちゃんは、どうしたものかと、少し考えていた。そして、やおら顔を上げると、厳かな口調でしゃべり出した。

「いいか、これからK病院に戻ったら、俺の言う通りにしろ。人ひとりの命がかかっているから、そのつもりでやれ」

「はい、間違いなく、言われた通りにします」

「それでは、K病院に戻ったら、よし雄のことは母親にまかせておいて、君は院長をマークしろ。院長が手術を引き受けるまで、くい下がれ。いいな、一步もあとに引くなよ。しつこいと嫌われてもいいから、かまわず若さでくい下がるんだ。頼むぞ」

「わかりました。命がけでやってきます」

「よし、手術をすることになったら、交替を出す。それまで君にすべてをまかす。いいな」

「はい、じゃあー行ってきます。手術にならなかったら、僕、帰りませんから、家にそのように連絡しといてください」

まるで特攻隊の戦闘員でも送り出すような騒ぎだが、正直、父ちゃんにとって、その時の心境は穏やかではなかった。

手術できないということは、うつかりやると死につながるという意味なのか、そ

れとも、患者が精神薄弱のため、扱いかねているのか、渡辺先生の報告を聞いただけではまだよくわからなかったが、常識的に考えて、手術は一刻を争うべきなのに、やらないでいることに對するあせりを感じていた。

一夜、明けた。

朝十時、渡辺先生が電話の向こうで、明るい声をはずませていた。

「今、院長とC大附属病院の間でやっと連絡がついて、よし雄君はC大に転院することが決まりました」

た。さっそく救急車でこれから出発しますが、このまま僕も一緒に行きます。大丈夫です。医師と看護婦が救急車と一緒に乗って、僕が輸血器を持ったままで行きますから」

どうやら、一難去ったようだ。C大附属は一流中の一流総合病院で、もちろん精神科もある。

「よし、これで万全の策だ」

父ちゃん、思わずにっこりする。

電話でK病院の院長を呼んでもらう。

「いろいろお骨折りくださいまして、ありがとうございます。うちの若い職員が無礼を申し上げたと思いますが、どうかお許しください」と言う、「いや、子供さんの命を守ろうとして必死になっている気持がこちらにも伝わってきて、とても感動しましたよ。渡辺さんは頑張り屋ですねー」と言って、かえってほめられてしまった。

今度は、父ちゃんもC大附属病院に向かうことにした。それにしても、重い知恵おくれの子供の命を守るといふのは大変なことだと、改めて感じていた。

C大附属病院に行くと、よし雄君の両親が、心配そうな顔で廊下に立っていた。病室には、誰も入れさせてくれないらしいかった。

着くとすぐ、母親が近よってきて、父ちゃんに意見を求めた。

「先生、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫ですよ。ここは日本でも有数の総合病院ですから、先生達にまかせておきましょうよ」

「そうですか？でも、さっき廊下で、お医者さん達が言い争ってましたよ」

「何をですか？」

渡辺先生がいつの間にか来て、横から口を出した。

「何でも、検査機械の管をかんてしまったら大変だとかで、随分もめてますよ。だから、まだ実際には、検査が始まってないみたいですよ」

一難去って、また一難だ。

どうやらここでも、重度精神薄弱者を扱いかねているらしい。何でも、最新式の数千万円もする胃カメラらしいのだが、それを検査の際に飲み込む時、ケーブルが

入った管をかみつぶす恐れがあるということ、内科医は麻酔をすればいいと言い、麻酔医は検査には麻酔はやらない規則だと言い、検査医は検査の機械が破損する恐れがあると言って拒否するという、三者三様の異議がからみ合って、ナース室の中は、今、議論の真つ最中であるとのことだった。

「ちくしょう。またここでも、障害者を人間扱いしないつもりか」

腹にすえかねた父ちゃんは、ナース室に向かって、ずけずけと断りもなしに入っていた。

多分、顔には少し怒っている表情が現われていたに違いないが、心の中では「押えて、押えて」という声がして、できるだけ平静をよそおうとしていた。

「子供の保護施設の者ですが」と言いながら名刺を片手に近づくと、四十年配の白衣を着た三人のうちの一人が、父ちゃんのほうへ歩み寄ってきて、軽く会釈した。

ひと通りの挨拶をすませてから、「何か問題があるようですが、子供のことを私に少し説明させてください」と切り出すと、あとの二人も父ちゃんのそばに寄ってきた。父ちゃんは言葉を選んで、ゆっくりと話した。「私もは、あの子を施設に預かって数カ月になります。確かに言葉はありませんが、おとなしくて聞きわけのあるいい子です。かた言なら、こちらから話す言葉はほとんど聞き分けますし、よほど我慢もできると思います。いかがでしょうか、私から本人によく言って聞かせますので、ほかの患者と同じ条件で、検査をしていただけませんかでしょうか」

父ちゃんは、話し終わって医師達の顔を見た。三人のうち、あとから加わった二人は、とても信じられないとばかりに、少しいやな顔をした。そして、その一人が、「ただの検査だけではないのよして」

と言いながら、やっぱり駄目だと言わんばかりに、大きく首を横に振って見せた。しばらく、父ちゃんを含めたその場の四人は、黙って立っていた。

それから、三人の中で一番年配の、あとで内科医と紹介された医者が、ちょっと顔を上げて、「二、三、聞きたいことがあるのですが」と、急に改まった様子になった。「何でしょうか」と、父ちゃんも改まった。

「あの子供さん、テンカン症状があるそうですが、術中に発作を起こす心配はないでしょうか？」

「さあ、それはわかりませんが、しかし薬を飲んでいる限りでは、今のところ大発作は来ないようですよ」

「大発作以外の発作があるのですか？」

「あります」

「それは、どういう発作ですか」

「そうですね。うちの精神科嘱託医の意見によりますと、時々眼がうつろになるのが、ひよっとしたら発作のたぐいじゃないだろうかということですよ」

「なるほど。で、先ほど性格はおとなしいとおっしゃいましたが、まったく暴れる

心配はありませんか」

「はい、今まではまったくありませんでした。母親からも、あばれたり怒ったりしたとは聞いておりません」

またしばらく、会話が途切れた。

今度は、父ちゃんが聞いた。

「あのう、今、よし雄は、どんな具合でしょうか？」

内科医がうなずきながら、それに対して答えてくれた。

「一応、吐血は止まっております。まだ胃の中の出血は、多分、いくらかあると思いますが、問題は、内視鏡で胃の中の出血場所を捜すことです。それに今は、大きな潰瘍でなければ、内視鏡と一緒に電気メスが胃の中に入るようになっていて、そのメスで出血を止めたり簡単な手術をしたりすることもできるのです」

「そうですか。では、内視鏡の管を飲むことが、まず最初ということですね」

「はいそうです。患者の容態から察しても、早いほうがいいと思います」

「では先生、何とかお願いします。内視鏡の検査を実施してください。患者が万一、内視鏡の管をかみつぶした時は、私どもが弁償いたします。ですから、お願いします。お願いします」

父ちゃんは、こめつきバッタのように頭を下げて、哀願していた。よし雄君の命を救うためには、金なんか問題じゃないとも思っていた。

三人の医者は、少し父ちゃんから離れた。改めて協議をするつもりだった。

最初、三人の医師たちはぼそぼそと小さな声で話していたのが、先ほどから一番好意的だった内科医が、途中から大声になった。

「君達は、いったいそれでも医者か！、人の命を救うのに、機械がなんだっ、そんなことを怖がってて、医者が勤まるか！。あちらの先生だって、もし万一のことがあったら、自分達が弁償するまで言ってるじゃないか！。ただけだな！、あーそうですか、それでは患者が機械を壊したので患者が弁償してくださいなんてことが、医療の世界に通じるか！、通じないだろう。俺が責任を持つ、やってくれ！」

「通常通りの検査ですか？」

「そうだ、あちらの先生の言うことを、俺は信じていいと思う。麻酔なしだ」

父ちゃんはその言葉を聞いて、心が次第に熱くなるのを感じた。そして、この内科医が、世の中のどんな医者よりも一番立派に見えた。それから、医師達に案内されて、よし雄君を見にいった。

無菌室の中で、彼はおとなしくしていた。

父ちゃんを見ると、心細かったのか、それとも何かを訴えたかったのか、「うーん」と言いながら起き上がろうとした。

父ちゃんは、それをそっとやさしく制しながら、彼に向かって精一杯の心を込め

て語りかけた。

「よし雄、痛いかな？でも大丈夫だよ。いいかい、この先生方がなあ、今、おまえの病気を治すために、ちよつとばかり痛いことをする。しばらくの間我慢すれば、すぐ良くなるよ。いいなつ、先生や看護婦さんの言うことを、よく聞くのだぞ」「いいなつ」「いいなつ」

よし雄君は、話しかけている父ちゃんの顔をじーつと見ていたが、わかったらしく首を縦に振ってうなずいて見せながら、にっこりと笑ってくれた。

医師達も看護婦達も、父ちゃんとし雄君のやりとりを見ていて感ずるところがあったらしく、急にその場の雰囲気明るくなった。

「言葉がよくわかるみたいですな」と言いながら、先ほどの内科医がにこにこしていた。

父ちゃんは、よしつ、これでうまく行くぞーつと内心思いながら、「みなさん、よろしくお願いします」という挨拶を残して、廊下に出た。

内視鏡検査は時間がかかった。

渡辺先生に労をねぎらって帰ってもらったあと、父ちゃんとし雄君の両親は、廊下で長い時間を耐えて待った。

父親は、時々父ちゃんのそばに来て、「助かるといいですねー」という同じ言葉を、何回も繰り返した。そしてそのたびに、父ちゃんはあの胸の透くような唸声を切った内科医の顔を思い浮かべて、「大丈夫ですよ、助かりますよ」と言った。

夕刻から始まった検査が、夜中になってやっと終わり、医師団が出てきた。

「終わりました。胃の中に潰瘍がありまして、その潰瘍のために血管が切れたのが、大量吐血の原因でした。一応、電気メスで止血してありますが、今度また出血するようなことがあれば、その時は多分、開腹手術ということになるでしょう」という説明を聞きながら、父ちゃん達は何回も何回も、ただひたすらに「ありがとうございました」を繰り返していた。

手術することになれば、また大変なことになると予想されるだけに、このまま治ってくれることを祈らずにいられなかった。

内視鏡騒ぎがあった翌日、園では、病院に付き添っている親からの一報を首を長くして待っていた。

やっと昼頃、母親からの電話が入った。

どうやら、その後の経過は思わしくなく、午前中に二回ほど、また吐血があったとのこと、いよいよ開腹手術？と思わせるふしがあった。そして、吐血したものが前から出ていたものか、それとも新たなものかまだわからないらしく、このままもう少し様子を見るということになっているらしい。

職員達は、朝のうち父ちゃんの説明を聞いて胸をなでおろし、昼には母親の連絡を聞いて不安な気持になった。

女子職員の何人か気の早い連中は、父ちゃんのところに来て、よし雄君を見舞いに行く許可を求めたが、そのたびに「まだ駄目だ。絶対安静、面会謝絶だよ」と言われ、しぶしぶ引き下がった。

夕刻、母親から、その日二度目の電話が入って、三度目の吐血が大量にあったと知らせてきた。

父ちゃんは（今夜が山だな）と感じて、医者に、何か動きがあったらすぐ知らせてくれと頼んだ。

夜、職員達は寮に帰っても眠れないらしく、父ちゃんの家が集まってきた。そして、よもやま話をしているのだが、結局は、話題がよし雄君のことに集中してしまつて、表情がこわばってしまうのだった。もしかして、このまま死んでしまうのでは？という不安を、どうすることもできなかった。

真夜中の十二時、「リーン、リーン」と、電話器が心臓を鷲つかみにするような調子で鳴った。

父ちゃんは「何か、あったな」ととっさに思いながら、受話器を取った。

よし雄君の母親であった。

声が泣き声だったが、意味はよくわかった。大吐血があつて、いよいよ開腹手術をすることになった。手術は今から一時間後の午前一時開始予定で、よし雄君は今、危篤状態と言った。

受話器を叩きつけるように置いた父ちゃんは、そのまま飛び出していった。

車のエンジンが、ものすごい音を真夜中の静かた山々に響かせていた。

とにかく、急いでいた。別に早く行ったところで、自分にはどうすることもできないと知りながらも、手術前にひと目会ふことが、彼の命にかかわりがあるような気がしてならなかった。父ちゃんは、ある種のジंकスを感じたのかもしれないかった。

C大附属病院までは、ここ豊岡からゆうに七十キロはある。

その間を真夜中とはいえ、車は一時間で走り抜いていた。尋常ではなかった。多分、連続百キロを越す猛スピードで走ったに違いなかった。

病院に着くと、今まさに、彼が手術室に向けて運び出されるところだった。

ストレッチャーの上の彼は軽く目を閉じたままで、まるで死人のような顔色が、吐血のすごさを物語っていた。

「間に合った。きつと生きるぞ！」

父ちゃんの胸の中には、ジंकスに勝ったという心のしびれがあった。そしてもう一方では、「よし雄、生きるんだ。頑張つて生きるんだ」という祈りみたいなものがあった。

母親は、連日の看病の疲れと、今また目の前で大難関に立ち向かつていこうとしている息子の姿を見て、耐えられなくなつてしまつたらしく、へなへなとしゃがみ

込んでしゃくり上げ始めていた。

父親が、「ほか、泣くなよ。まだ死んだわけじゃない」と言っていましめていたが、彼の目にも涙が光っていた。

手術中という赤いランプが、手術室の入口にパツとついた以外、夜中の大病院は物音ひとつしないまま、時間が過ぎていった。

時々、よし雄君の父親は、父ちゃんに向かって、息子の生まれた時の想い出話などをしていたが、母親はショックに耐えられなかったらしく、あれからうずくまったり、動こうとしなかった。

二日前のように、長い長い待ち時間が、またゆっくりと過ぎていった。

いつの間にか廊下の窓の外が明るくなり出し、朝を迎え始めたようだが、今か今かと見上げる赤ランプは、一向に消えなかった。どうやら、手術は難航しているらしかった。

もうすっかり明るくなり、東の空が赤くなり始めた頃、突然、ランプが消えて、

医者が一人、手にビニール袋を持って中から出てきた。

父ちゃんとよし雄君の父親が、その人に向かって駆け寄っていった。

父親が「よし雄は、よし雄は、無事でしようか？」とせき込むように聞くと、その外科医は、何もなかったように、「手術は、終わりました。これが摘出物です。見ますか？」と言いながら、ビニール袋を差し出して見せた。

二人共、そんなものは見てもしょうがないと言わんばかりに首を横に振ると、その外科医は、ふーっとため息をひとつつきながら、「あの方、血が止まらない体質なんですわー、止血に恐ろしく手間がかかりました」と、ぼそりと話した。

そして、さも何でもない仕事を一つ終えたという様子の足どりで、二人の前をすたすたと通り過ぎて行ってしまった。

「どうやら、助かったらしい」

父ちゃんは、腹の底からじわじわとせり上がってくる感動を、かみしめていた。

父親は、目がしらを押えながら、ついに横になってしまった母親を、起こしに行った。

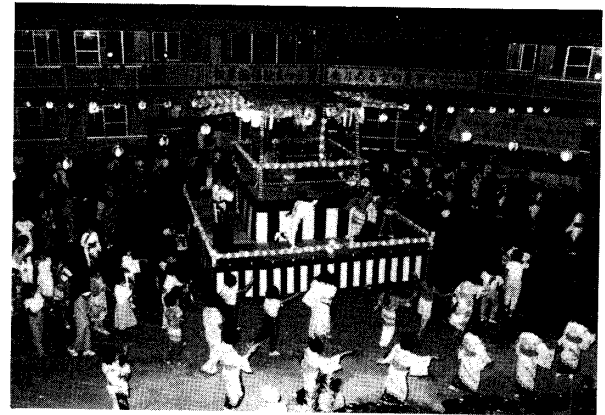
夫婦は、誰もいない大病院の廊下で、抱き合ったまま泣いている様子だった。

窓を開けると、夜明けの新鮮な空気が、父ちゃんの胸の中いっばいに吸い込まれて入ってきた。

「人の命の、何という力強さよ、しぶとさよ」と思うと、じーんと目がしらが熱くなって、止めどもなくあふれ出るものがあった。



▲海水浴。海からあがってひと休み。



▼豊岡福祉まつり。盆おどり風景。

175

親子・ごみ山を背に

(一)

言葉のない子供を持つ母親は、お母さんという言葉にあこがれる。父ちゃんは親達の意識を高めるために、親の会の席上で切々と訴える。人は、言葉がないとうまく意思を伝えられない。何はともあれ、いつの日か、この子供達の一人でも多くが、「お母さん」と呼べるその日のために、頑張ろうではないかと。

「お母さん」

まだ赤ちゃんの頃
お母さんは
いつもおまえに 話しかけていた

「ほら 花よ
ほら 星よ
ほら 青いお空だよ」

やがて おまえが大きくなったら

「お母さん」と 呼んでもらいたくて

幾千幾万の 愛の言葉を そそいできた

風が流れ 雲が流れ 時が流れて

あの頃の 想い出が

杭のように 心に突きささった

あー「お母さん」

なんと素晴らしい 言葉だろうか！

どんなにか 待っていただろうか！

うっとり 夢の中で呼びかけられて

何度も 枕を濡らした

眠られぬ夜

「お母さん」

毎日 どこかで繰り返される

この聞きなれた言葉

「お母さん」

でも ついにおまえから

一度も聞けなかった この言葉

「お母さん」

「お母さん あかねー」

「お母さん 今日 学校でねー」

夢のつづきを見ながら 今日思う

命ある限り

この子のため 働いて働いて

何でもしてあげたいと

(二)

豊岡光生園の親の会は、毎月第一土曜日の晩に開かれる。

必然的に、親はみな泊まりがけになる。

家が遠い人の中には、園から百キロも離れたところから、車を飛ばして半日がか

りで来る人もいる。

毎月、親達は、ひと目、我が子の元気な姿を見たさに、たいがいは必ず来てくれるが、中には来ない人もたまにいます。

父ちゃんは、来ない親に対して、ものすごく怒る。怒る理由は、はっきりしている。

いつもは元気な子も、ほかの子の親が来て自分の親が来ないと、見ている者の胸をしめつけるほど、しおれてしまうからだ。

もの言えぬ子が、親を待って玄関にじっと立っている姿を見かけると、父ちゃんも職員達も、いたたまれない気持ちになってしまうのだ。

私のお願い

親の会の日

言葉のない この子の眼が

「先生 どうして ママ来ないの？」

「ねー どうして ママ来ないの？」

と 聞いているように見える

何と答えたらいいいのか

私に はわからない

この三月のあいだ

ずっと来なかった母親にかわって

この子の頭を

何度も何度も なでてあげるしか

私には 何もできない

なでているうちに

母を恋しがっている

この子の血のぬくもりが

手のひらから 胸につたわって

急に悲しさが 込み上げてくる

「お母さん」お願い

一度でいいから

この子に 会いにきてください

一度でいいから

この子を 抱きしめてあげてください

(一)

春休み、夏休み、冬休みと、年に三回、子供達はそれぞれの家に帰って、十五日くらい過ごす。

帰れない子は、父ちゃんの家や職員達の家引き取られる。今のところ、まるつきり帰る家がないのは吉川親子だけで、あとは親の病气などが帰れない原因になる。そんなわけで、休みに施設に残る子は数人しかいない。その数人が職員の家に引き取られていくと、父ちゃんの家も親子四人水人らずとなる。

しかし、三日も過ぎると、さあ一大変。政あき君もよう子ちゃんも、じっとしていられなくなってしまう。

家庭は、確かに彼らにとって、あこがれの間ではあるが、日頃の園の生活が変化ある楽しさに満ちていればいるほど、彼らはすぐに退屈してしまう。

それが証拠に、喜びながら家に帰ってきてても、三日もたつと、政あき君は家のせまい廊下をうろうろ始めるし、よう子ちゃんは外に出たいという意思を表わすために、玄関行行ってしゃがみ込むのだ。

九十九里の浜辺で

その一

正月 子供達が

二人そろって 施設から 家に戻る
毎日 おもちばかり 食べて暮らす

この子達を連れて

どこか行ける場所など

そうさらに あるわけがない

「みんなで 冬の手に行こう」

たまりかねて

親子四人 家を出る

冬の九十九里の浜辺には
だあーれもない

砂浜を歩かせながら
足を取られて よろける姿に
この子達の 運命を思う

人のいない場所には
ごみが 山と積まれてる

どこに行こうが
ごみのように のけ者にされた
哀しき習性が
ごみ山を背に
ひっそりと四人で 時を過ごす
手作りの お弁当を開いて
食べることにしか能のない
子供達の 顔色をうかがう

家族の幸福なんて
吹き抜けていく 潮風のようなものと
あわてて深く 息を吸う

九十九里の浜辺で

その二

母親は
二十の息子に ひざ枕させて
海の彼方に 眼を向ける

父親は
十八の娘の 手を引いて
浜辺を歩く

浜辺の 砂の中から
白い貝殻がひとつ
もの言わぬ娘 に拾われる

しなやかな 娘の手の中で
揉まれ いつくしまれて

貝の命が よみがえる

命よみがえりし
哀しき貝の片びらと 娘に
父親が そつと つぶやく

「おまえ達 もの言えぬことは
なんと 苦しきことか
なんと 痛ましきことか」と

九十九里の浜辺で

その三

遠い 海の彼方を見 てると
遠い 昔の想い出が うかばれる

黙っている この娘は
六月生まれ

きらめく光の中に
希望 があつた

あー 暖かな陽射
命の芽生え
愛の喜び
それから続いた 深い悲しみ

……

そして十八年は
フィルムのコマのように 過ぎた

休み中、時々、職員達が父ちゃんの家遊びに来る。田舎に帰ってゆっくり休んでくればいいのにと、母ちゃんが心配する。

しかし、職員が来て政あき君やよう子ちゃんと遊ぶ姿は、二人の親にとっては、何よりもうれしく眺められる。

まるでそれは、そよ風に向かってまわっている風車でも見ている時のように、夫婦がわきに追いやられるいつ時でもある。

風車

言葉のない 子供のことで
パパも ママも
同じ願いを 持っている

「パパと 呼ばれてみたい」
「ママと 呼ばれてみたい」

この願い この望み
多分 遠い はるかな夢と知りつつ
あきらめきれない

「先生 言葉の訓練って
どのように するのですか？」

と聞いて教えてもらった
口吹き風車！
買って与えた
いつか 遠い昔の 想い出

まわれ 風車
いとし子のために！
パパと ママの 哀しみを込めて
やさしく 静かに まわれ

壁のつたい歩きを
二十年も 昔に 憶えたのに
お手々つないで 散歩を
はるかな昔に できたのに

我が子よ！
あれから 今日まで
限りなく 呼びかけてきた
この親の 愛の言葉を
五十円の花車にたくして
もう一度 もう一度だけ

想い出しておくれよ

吹きかける 息が
あきらめの ため息に 変わらぬうちに！

(四)

休みの間 家に帰っていた子供達は、親にたっぷり可愛がられて帰ってくる。

職員達は、家で甘やかされて帰ってきた子供達の姿を見て、悪くなった、悪くなったと嘆く。そして、〇〇ができたのにやらなくなったとか、××の癖が激しくなったとか言って、園長や父ちゃんにご注進に及ぶ。

父ちゃんはそれを聞きながら、「いいじゃないか。またすぐもとに戻るよ」と言って、職員達を慰める。

しかし、職員達はいつも、子供が家に帰ったら、あーしてほしい、こーしてほしいという望みを抱いている。限りなく伸ばしてあげたいという、教育者としての願望なのかもしれない。

そして、親は親で、施設の職員に対し、いつも思う。何とか、これだけでも教えてもらえないだろうか、あれだけでもできるようにしてもらえないだろうか。

父母の願い

家から 園に戻る日

父と母と子が

三人で 手をつないで

施設の門をくぐる

「決して この子を

捨てに来たのでは ありません」

と 心に 言い聞かせながら

つないでいた手をそっと放す

喜びながら

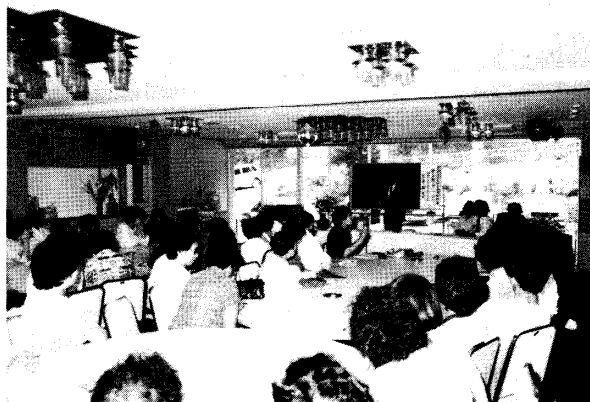
飛び込んでいく

我が子を 眼で追いながら

心に 手を合わせて 祈る



▲家族ぐるみ、全園あがての1泊旅行。鬼怒川温泉にて。



▼父兄会。職員と一緒に合同研修を行う。

「先生 お願い
うちの子 何も言えないから
きつと 目をかけてあげてください」

「先生 お願い
うちの子 さみしがり屋だから
一人ぼっちに しないでください」

(一)

父ちゃんにも母ちゃんにも、園長にも職員達にも、みな同じ悩みがひとつある。自閉的傾向の強い子や、情緒障害の子供達のことである。

最重度心身障害児(者)達は、たいがい、単なる重い知恵おくれだけでなく、二重、三重の重荷を背負って生きている。

その重荷の中でも一番やっかいな代物が、この自閉的傾向と、情緒障害や情緒不安定という、精神的なものから来るものである。

どんなに職員が楽しいことを用意しても、それに乗ってこなければ、何にもならない。

誕生会をやっても運動会をやっても、遠足をやっても旅行をやっても、福祉祭りをやってもクリスマスパーティーをやっても、いつもすみのほうに逃れてしまう子がいる。

父ちゃんはそれを見ながら、ため息をついている。

職員達ももちろん、何もしないで手をこまねいているわけじゃない。何とかその場の雰囲気になじませようと、それはもう大変な努力をするのだが、どっこい、相手はそう簡単には動じない。

そして、職員達が、何とかしようとあせればあせるほど、彼らは逆にかたくなになるようで、そのへんが言うに言われない、やるせないところなのだ。

彼らのほとんどは、入園以来、徐々に落ちていくはきてるが、時々何の理由もなく(もしかしたら理由があるのかもしれないが、今のところ、我々にはどうもわからない)パニック状態になる。

たとえば、その症状の現われ方は様々であるが、ざっと紹介すると、次の通りだ。

ふみ枝ちゃんやよしひろ君は、時々食事をまったく受けつけないし、たあちゃんやよろず君は、自分の顔をやたらに殴りつけるし、としひろ君は破壊を始めるし、よう子ちゃんとはにかくすすべてのことを拒否するといった具合だ。

特に、父ちゃんの娘よう子ちゃんは、職員達にとっては、難問中の最たるものであるらしく、彼らは、いつもよう子ちゃんを相手に、「むずかしい」「むずかしい」を、連発している。

たとえば、日常、次のようなことは時々あることだ。

今日も今日とて、月一回の誕生会。

職員達は、その月の誕生者のためにパーティーを準備するわけだが、食堂の中に金銀の紙くさりや、赤、青、黄のテープを張りめぐらして精一杯の飾りつけをし、レコードをかけ、一生懸命、雰囲気盛り上げようと頑張っているのに、なぜかよ

う子ちゃんだけ、その場からしきりに逃げ出そうとしている。

顔を真っ赤にして今にも泣き出しそうになりながら、何とかなだめて引き止めようとする職員の手を振り払うようにして、食堂から飛び出していく。

「う子ちゃん、みんなと一緒に 노래를 부를 거예요」と、担任の三宅先生がいくら話しかけても、彼女はまったく無視したままであるばかりか、どんどん逃げていって、ついには誰もいない廊下に、一人でしゃがみ込んでしまう。

そして、それだけならまだいいのであって、時々彼女は、それはもうまったく突然、病的に何もかも駄目になってしまい、食事はもちろんのこと、自ら立っている場所にまで拒否反応を示し、たとえば、ある時などは、彼女がこの世の中でかろうじて許容できる場所が、玄関前の一階から二階に向かう階段の決められた、たった三段だけだぞという状態にまでなってしまう。

これが始まると、職員も父ちゃんも母ちゃんも、壮絶な闘いをいや応なしにせざるを得ない。

相手も二日、三日と、体力の続く限り眠らないのはもちろんのこと、ふらふらになりながら、たった二、三段の階段を日中昇ったり降りたりするからである。そして、それを止めることができないのである。

すなわち、止めようとすればするほど、憑かれたようになって階段にしがみつき、昇り降りを続けようと必死にもがくため、かえって彼女をふらふらにしてしまうという具合なのだ。

もちろん、囑託精神科医に診察してもらって、鎮静剤や精神安定剤を投与したりするのだが、こういう時は医者も手に負えぬらしく、どうにも打つ手がなくなってしまう。

そして、こだわりや拒否反応は、単に階段に限ったことだけでなく、園の食堂の椅子や、家に帰った時の台所の板の間と座敷の境界などといった具合で、そのつど、変化していくのである。

(二)

春は、光生園の真ん前の山から、急に訪れてくる。

フキノトウが枯れ草の間から勢いよく飛び出したのがついこの間だと思っていたら、もう桜が咲き乱れ、その桜が花びらを風に散らされるそばから、木々の新緑が始まる。

湖畔に渡る風も、心なしか暖かく感じられる。

園生達、木の芽時になると、どういふわけか少し騒がしくなる。特にテンカンや自閉症、情緒障害には、この時期が何かと問題が多いらしい。

なおと君が重積テンカンで入院したあと、ふみ枝ちゃんが拒食症になり、次によ

う子ちゃんが昨日から様子がおかしい。夜も寝ない。

母ちゃんがずーっとついているのだが、どうやら食事と排尿がうまくいかないらしく、無理に引っ張ってでも行動させようとすると、まるっきり「ギーッ」となってしまうようだ。

そして、午前中から始まった階段の昇り降りが、午後になってもやみそうにない。

母ちゃんはぴったりよう子ちゃんに付き添って、一緒に階段を昇り降りしているが、たちまちのうちにばててしまつて、男子職員中一番体力のある栗原先生に、バトンタッチする。

栗原先生もふらふらになつて、慎二先生に引き継ぐ。

もう、その頃になると、最初は一階から二階まで全部の階段が使われていたのが、ついに限られた、たった三段だけの昇り降りとなり、本人は顔面蒼白、汗びっしょりとなり、おまけにまるつきり三食抜き拒食でふらふらになつていて、時々ぼったり倒れてしまつたりするのだが、すぐ起き上がつて、また同じ行動を開始するといった具合で、付き添いの職員も泣き出したい心境なのである。

「よう子ちゃん、休もうよ」「頼むから、座ってくれよ」「このままじゃ、死んでしまふよ」と、慎二先生、半泣きの声を振りしほっている。

父ちゃん、見るに見かねて、精神科のお医老さんに連絡をして、見てもらうことにする。

投薬が始まると、少し落ち着いたようだが、だらしなく口をぽかーんとあけたままになり、よだれがたらたら落ちる状態となる。

二日目も、夜はまったく寝ない。相変わらず、階段の亡霊にとりつかれたままらしい。

父ちゃんは、てる雄君のように死んでしまふのではないかと心配しながら、今朝はのっぴきならない用事で、千葉市まで外出する。三日目である。

「いいかい、医者と間断なく連絡してくれよな」と、母ちゃんに言い残して、うしろ髪を引かれる思いで出かけていく。

午後、大急ぎで光生園に帰ってくると、よう子ちゃんはすでに完全に危険状態になつていた。

急いで彼女を車に乗せて病院に向かったが、医者はただ見ただけで、「危険なので、これ以上、投薬も、注射もできません」と言つた。

そして、「安静にする以外は、手の打ちようがありません」とも言われた。

父ちゃんは医者に向かつて、「安静にできれば、苦勞はありませんよ」と言い返しかけたが、思わずその言葉をぐっと飲み込んでしまった。

何としても安静にすることが娘を助ける唯一の手段だと思つと、今さら医者と言ひ合つてゐる場合じゃないとも考へた。

頭の中に、一瞬、ひらめきがあつた。

ひよっとしたら、うまくいくかもしれないと思うと、急にあわただしくよう子ちゃんの手を引いて、病院の廊下を駆け出していた。

医者に礼を言うのも忘れていたらしい。
ものすごい勢いで彼女を外に連れ出すと、父ちゃんは、車を無我夢中で発進させていた。

「止まらないで、走るのだ」

「そうだ、どうして、こんな簡単なことがわからなかったのだろうか」と思いながら、アクセルを力強く踏み込んでいた。

そして、「音楽だ!」「それも、静かな音楽だ!」と、また思った。

もうこうなったら、日頃彼女が好んでいたことを、限りなく続けてあげるしか、方法がないと考えたのである。

小さい時から、よう子ちゃんは、車に乗ることが一番好きだった。そして、音楽にはどうやら特別な興味があるらしく、ことに静かな曲を好んでいる様子だった。(よう子ちゃんの好きな音楽) そうだ、喜多郎のシンセサイザーのテーマを、かけてあげよう)

父ちゃんは、もう夢中になっていた。

その日、夕方から走り出した四十九年型ニッサングロリアは、墨道湊鴨川線と国道十六号木更津間を、限りなく往復していた。

彼女は、どうやら車が走っている時だけ、中腰の状態でじっとしていた。そして、静かな喜多郎の音楽が、親子をまるで砂漠の中に誘い込んでしまったように、無言のまま時が流れた。

時々信号で車が止まると、彼女は前方のダッシュボードに手を出して、体を前めりにさせながら立ち上がりとした。

実際に、ガンリンスタンドで給油をした時には、かなりパニック状態になってしまったが、また走り出すと、静かに落ち着いてくれた。

「あとは、眠ってしまうまで走るぞ」そう心に言い聞かせながら、父ちゃんはアクセルを踏み続けた。

夜ふけになると、父ちゃんは自らの睡魔と闘っていた。朦朧とした眼でかたわらの娘を見ると、いつの間にかビニールの紐をどこかで見つけたらしく、それを盛んに揉み続けていた。それは普段、園にいる時の癖で、これをやっている時は、わりあい落ち着いていることを示しているのだが、父ちゃんはそれを見て、むしろはっとした。「よう子ちゃんが正常に戻りつつある」そう思うと嬉しくて、眠けがいっぺんにすつ飛んでしまった。

それから、また時間が過ぎていった。

父ちゃんは、遠い昔のことを思い出していた。検見川のアパートに暮らしていた、十八年も前のことだった。

あの頃、よう子ちゃんは生まれたばかりで、政あき君が三歳だった。政あき君は、毎日、夜になると、それはよく泣いたものであった。

大声で何時間も夜泣きをするので、父ちゃんも母ちゃんも、アパートの人々に迷惑がかかるのを恐れて、夜になるといつも、はらはらし通しだった。そして、夫婦のうちどちらかが必ず、泣いている我が子を抱いて、夜の町に出ていった。

泣きじゃくる我が子を抱いて、町をあてもなくさまよい歩いているうちに、夜が明けてしまったことが何度もあった。

「あー、あれから十八年、まだ俺は、子守りを終えていない」

そう思うと、父ちゃんは急に悲しくなった。

喜多郎の曲が、エンドレスでまだ続いていた。父ちゃんの悲しい気持ちをなぞるように、車内に響きわたっていた。そして、涙が静かに流れ出していた。

十八年の万感の想いに胸を打たれてしまって、もうこれ以上は、どうしても車を走らせることができなかった。

トリップメーカーは、途中からとはいえ、すでに一千キロを越して、新たな数字を刻み始めていた。

「終わった」「聞いが終わったのだ」「とにかく、昨日からの聞いが、これで終わったのだ」父ちゃんは、そう心に言い聞かせながら、静かに車を止めて、助手席のよう子ちゃんを確かめた。そして、彼女が軽いいびきをかきながら眠っているのを見つけた。

「助かったー!」

急に、吹き上げてくるような新たな感動のいなすまが、父ちゃんの胸を一気につらぬいていった。

「神よーあなたは娘を助けてくださったのですね。そうですね」と、誰かに問いかけるように、ひとり言をつぶやきながら涙をぬぐうと、フロントガラスの向こうの東の空が、くれない色に美しく染まっていた。

(二)

プレールームで職員が子供達を集めて何かを始めると、必ず逃げ出していく子がいる。よしひろ君だ。

逃げられても逃げられても、職員は彼を連れ戻しに行く。

もうこの三年、同じことがどのくらい続いたかわからないが、この関係はまだまだ終わろうとしない。

今では、見ている父ちゃんですえあきれるくらいなのだが、互いに意地の張り合いをしている様子だ。

今日も、みんなが喜ぶバスの日だ。

昼御飯が終わって、あと片づけが終わると、子供達は何となくそわそわしている。すでに、午後からバスに乗れることを知っているからだ。かしこいほうは玄関に出てきて、靴までそろえてくれる。

自分のほもちろんのこと、お友達の方まで、ちゃんと持ち出してきて並べてくれる。

「みんな、靴をはいて、外に出なさい」と、女子職員のかん高い声が園内に響きわたると、「わーっ」となだれるように、子供達は玄関に殺到していく。

いつの間にか、もたもたしている重い子の手を、軽いほうがつないで、一緒に連れていくようにもなっている。

そして、その時である。

待っていたかのように、よしひろ君はさっと身構えると、みんなを尻目に、玄関とは逆方向の、二階の階段めがけて走り出す。

駆け足で階段を一気に昇りつめると、女子便所に向かって一目散に逃げ込んでしまうのだ。

「おーい、よしひろ」「出てこいよ」

今しも、それを目ざとく見つけて追いかけてきた男子職員が、鍵をかけて便所の中にうずくまっているよしひろ君を、外で呼んでいる。

こうして、今日もバスの発車が遅れてしまうのだが、決して彼がバスを嫌っているのではない。それが一証拠に、職員にどうやら便所から引き出されてバスに乗ると、途端に、にこにこしているのである。

恒例のことながら、事務所で見ている父ちゃんにしてみれば、なぜ、素直に乗らないのだろうか、首をかしげてしまうのだ。

困っていることはこれだけではない。どういうわけか、いたずらにかけては、異常な興味を持っているらしく、彼が一人でそこそこの辺をうろついている時は、職員達も気が気じゃない。

友達のパンツを集めてきて、便器の中にぎっしり詰め込んでおいて水を出して流まうなんていうのは朝めし前で、時にはオモチャのブロックや人形などを入れて流してしまう。

これをやられると大変なことになる。園の下水は三次処理という複雑な機構で湊川に放流しているので、これらの品物がどこかの機械に巻き込まれると、お手上げになってしまう。たとえば、最初の一次側でオモチャが引っかかったとしても、カッターの刃をぼろぼろにしてしまうので、その交換修理だけで数十万円が吹っ飛ぶ。そんなわけで、便器がつまったり、あるいはよしひろ君が便器に何か突っ込んだという情報が事務所にもたらされると、父ちゃんはすぐ下水屋さんに連絡をする。

便所の地下にもぐって便器からパイプをはずし投入物を取り除く作業は、すでに専門家の仕事で、これだけで一回三万五千円の料金を払わされてしまうのだ。

よしひろ君は入園以来、いたずらの方法や種類を次々と変化させてきた。今は便器に物を投入することで職員達を悩ませているが、もう少し前は、便の壁塗りとかベッドを引き出しておしっこをひっかけるとかだった。

どうやら彼の行動心理は、うんと叱られてみたいという異常願望にあるようで、職員がいくら怒っても、並大抵のことでは通じない。むしろそんな時は、にこにこ気味悪く笑って見せるのである。

そして拒食だ。

よしひろ君についてただひとつ職員側が勝利を収めたのは、この拒食との取り組みであつたので、そのことを少し話しておこうと思う。

入園時の福祉事務所からのケース記録によると、こう書かれてあつた。

「自閉傾向あり、時々食事を拒否する」

母親にくわしくたずねてみると、前の児童施設では、食べなくなると一週間も十日も食べない状態が続いて、ついに施設に母親が呼ばれるのであるが、その時、どういうわけか最初に食べるのはカステラで、それも文明堂のカステラに限るとのことだった。

拒食があつたのは、彼が入園して一カ月目だった。朝、父ちゃんが出勤すると、食堂で二、三人の職員達がよしひろ君を相手に騒いでいた。

「どうしたんだ」と父ちゃんが仲間に入ると、「よしひろ君がタベから、御飯を食べないんです」と言いながら、目の前の食器を指さして見せた。

よく見ると、ひと口かふた口ほど食べたあとがあつた。

「まったく食べないわけじゃないらしいな」と言いながら職員達の顔を見渡すと、

「そうなんです。ひと口かふた口食べて、あとは食器を前のターンテーブルに投げ出すのです」と、処置に困ってる様子だった。

それから三日過ぎた。よしひろ君は相変わらず、ひと口かふた口しか食べない拒食を続けていた。時々職員が無理矢理に口をこじあけて食べものの中に入れてみたが、「うえー、げーっ」と吐き出す始末で、対応策が見当たらずだった。

（やつこさん、どうやら最低ぎりぎりのところで生きられる程度の拒食を続けるつもりだなー）と父ちゃんは思い、いよいよケース記録通りの症状が始まったことに對する対応策に苦慮していた。

「父ちゃん、お母さん呼びましようよ」と、早くも園長は前の施設での例にならおうとしたが、父ちゃんは首をかしげていた。

「よしひろは、ひよっとしたら、母親を呼び出すコールサインで、拒食をして見せてるんじゃないかなあ」と、ひとり言のようにつぶやいた。

夜、臨時ケース会議が開かれた。

意見はまっぴらだったが、父ちゃんは、母親を呼ばないほうに賛成した。そして翌日の朝、町にカステラを買いに出かけた。文明堂のカステラは、上総湊の町に

は売ってなかった。父ちゃんは三十キロほど先の木更津市内まで車を飛ばして、やっとお目当てのカステラを手に入れて園に戻った。

よしひろ君は一人食堂に残って、慎二先生がそばについていた。ちょうど昼御飯が終わって、子供が食堂から引き上げてしまったあとだった。

「慎二先生、木更津まで行ってカステラを買ってきたよ」と言って買ってきたものを手渡すと、彼はそれを受け取りながら、何か感ずるところがあるらしかった。そして、食堂の中に、割れがねのような大きな声が響きわたった。

「この野郎、食え！食え！食わないとぶつ殺すぞ！」「今まで四日間やさしくしてきたけど、もう許せない。父ちゃんが朝から半日もかけて、わざわざおまえのために買ってきたカステラが食えねーと言うのか！」「食わないと許さないぞ！」

それは見ていると、施設職員と入園者という風景ではなく、どちらかと言うと、男同士喧嘩としかみえなかった。

よしひろ君は、大声でどなられてびっくりしたのか、逃げ出そうとして腰を宙に浮かせたまま、黒い大きな眼をばちばちとしばたいて見せた。

「こらーっ、食ってからだ、食わないと、ここから一歩も出さんぞ」

慎二先生は真つ赤な顔になって、またとなりながら、今度は大きなげんこつでこつんと一発、よしひろ君の頭を叩いた。

瞬間、よしひろ君の表情がさつと青ざめた。ものすごい速さでテーブルの前のカステラが驚つかみにされるや、彼の口の中はいっぺんにカステラでいっぱいになった。

よしひろ君は奇跡が起きたように、あれよあれよと見てる前で、テーブルに置いてあったカステラをもぐもぐと食べ出したのであった。そしてそれ以来も時々拒食をして見せるが、そのたびにこっぴどく怒られて、豊岡光生園では彼の拒食がだんだん通じなくなった。多分、今までの児童施設でも、拒食をすると怒られたりなだめられたりされたとは思うが、本気で怒られたことがなかったのではないかと思われた。そして不思議なことに、いたずらその他のことは、どんなに怒られても怒られても、少しづつ減ってはいるが、今もまだ続いているのだ。

もう一人、困っている子のことを話そう。ふみ枝ちゃんである。

この子も時々、どうしても、御飯を上手に食べられないらしい。これが数日続くと、顔色まで悪くなる。母親に聞くと、ひと夏ずーっと食べないで、十数キロもやせてしまうことがざらだそうで、食べられなくなると、職員達、必死である。

今日も、朝倉先生が、ふみ枝ちゃんの食事が終わるのを待っている。

一緒のテーブルの他の子は、すでに終わって待っているのだが、中には待ち切れずに立ち上がる者もいる。朝倉先生は「ふみ枝ちゃんが終わるまで、待ってあげようね」と言いたが、立ち上がるうとした子供の肩に手をかけて、座らせている。

ふみ枝ちゃんは、人を待たせて置きながら、御飯をひと粒ずつ口に運んでいる。彼女、普段は上手に箸を使って食べられるのだが、状態が悪くなってしまうと、これを始める。つまり、状態が悪いということは、ふさぎ込んでしまった時である。彼女、いよいよ悪くなると、めし粒を口に含んだまま、喉を通せない状態になってしまうらしい。

「ふみ枝ちゃん、みんなで待ってるからな」と、ほっぺをふくらませた彼女に、朝倉先生がまた声をかけている。

彼女は、声かけに励まされるらしいので、初期症状はたいがいこの方法で治してしまうが、時には駄目な場合もある。

食事が始まって四十分も過ぎると、ほかのテーブルがみんな終わってしまって、ついにふみ枝ちゃんのテーブルの残り七人の子供が、待てなくなる。

頃合を見て、朝倉先生は一度みんなに、ごちそう様をさせる。

そしていよいよ、先生とふみ枝ちゃんだけが、別のテーブルに移動する。

彼女が茶碗一杯の御飯を食べ終わるには、それからまた数十分もかかることになるのだが、どの職員も彼女のテーブルについた時は、完全に終わるまでおつき合いをすることになっている。

さて、次は不眠症だ。

これがまた厄介な症状で、たいがい極端に睡眠時間が短い子だとか、興奮しやすい子だとか、夜昼が逆になってしまいう子だとか、ホームシックだとか、それぞれ理由があるわけだが、眠れない彼らは、当直職員にとっては頭痛のたねだ。

しかし、方法はひとつ、とにかく抱き寝でも何でもして、眠らせることだ。すなわち眠る癖がつくまで、限りなく職員が忍耐を要求されるのである。

そして、その次は自傷行為、これは特に対応がむずかしい。ひとつには、一般の人の貧乏ゆすりのように、本人も知らないうちについ顔などに傷をつけて、そこをむしっているというたぐいのものと、反抗する時に相手に攻撃を向けられず、つい自分を痛めてしまうという、二通りがある。

とにかく、徹底的に傷を治してしまうことが第一だ。傷があるから、ついそこに手がいつてしまうという、悪循環を断ち切ることから、始めねばならない。しかし、次のような場合もある。

じゅん子ちゃんは入園当時、顔が菱形に見えた。すなわち、両手で頬骨を連続で叩くので、頬が異常に腫れ上がってしまって、その腫れた場所をまた叩いて、紫色に変色している状態だった。

じゅん子ちゃんの頬骨叩きが始めると、女子職員達が見ちゃいられないとばかりに、「やめてー」と金切り声を上げて押えにかかったりしたもののだが、一向にやめようとしなかった。

どうも様子を見てみると、彼女が頬骨を叩く時は、むしろくしゃした時とか、他

人に怒られた時とか、自分の思うようにならない時など、内攻性のものとして考えられたが、これをいかに防ぐかとなると、正直、方法が見つからなかった。

ある朝、これがあまりひどくて、すでに皮が破れて血が出るところまで来てしまっていた。廊下でしゃがんだまま、盛んにやっていると、二人の女子職員がしがみついて格闘していた。

彼女、ぎゃーぎゃー声を張り上げながら、しがみついている女子職員達の手を振り払ってまた叩き始めたところを、ちょうど母ちゃんに見つかってしまった。

「じゅん子、そんなに叩きたければ、ほれ、私がかわりに叩いてあげるよ」と言いながら、母ちゃんはとっさに、血が飛び散っているじゅん子ちゃんの頬を叩き始めた。

すると、どうしたことが、急に彼女はおとなしくなって、下を向いたまま静かになってしまった。どうやら自分ではいくらでも叩くが、人に叩かれるのはいやらしい。それ以来じゅん子ちゃんは、頬骨叩きを始めると職員達に「手伝ってあげるよ」と言われるので、叩けなくなってしまうた。

子供達はそれぞれ強い個性の持ち主である。その強い個性に立ち向かうためには、様々な実験やこころみが必要である。

自傷行為ひとつ取ってみても、園には治った者とまだ続けている者の両方がいる。いまだに続けている者に対する取り組み実験は、これから限りなく続くと思われる。

楽しいことが生きることだ

(一)

父ちゃんは職員に向かって、仕事を楽しんでやれるようにしろと言う。

事あるごとに、「こんな山の中にまで、わざわざ来て働いてるのだから、楽しくなければ息がつまってしまうじゃないか」と言う。

そんなわけで、光生園では、ことさらに何々指導などといきまぐ職員はいないが、みんなどこかへ行って、野外バーベキューパーティーをやるうとか、フェリーボートで海を渡ってみようとか、どこそこのお祭り見物に行こうなどという小行事から始まって、誕生会、運動会、遠足などの中行事、福祉祭り、クリスマスパーティーなどという大行事にいたるまで、すなわち楽しく遊ぶことに関しては、園全体が熱中するのである。

年度始めに計画されている年間行事は、十回ほどある。

だが、その行事の中間に、途中で追加されるものがどのくらいあるかわからない。

そんなわけで、年中、何かの企画がなされ、これが実行されているわけである。

つまり、そのためというわけではないが、園には特別活動の係がいて、今は五十七年採用の朝倉先生と宮下先生がこれを担当しているのだが、企画が面白くないと職員全体からブーブー文句が出る。担当者はそんなわけで、いつも悩んでいる。

昭和五十八年十月、園全体の一泊旅行があった。行き先は静岡県富士急ハイランドで、旅行は二度目である。

入院中の子供三人を除いて、園生三十七人に職員二十四人、父母三十六人、福祉事務所からの応援職員二人、嘱託病院からやはり応援の看護婦さんが一人、そしてボランティア数人という百人以上の団体で出かけた。

数からいうと、子供一人に付き添い二名以上の割合だ。こうなると、日頃人員不足でできないなどと言っていたことが、何でも可能になる。

ちなみに、当日、最重度の政あき君の身の上になんかことがあったか、紹介しておこうと思う。

父ちゃんの息子は、あの富士急ハイランドの乗物を片っぱしから乗り継いで、最後に、世界最大、最高が宣伝文句である、ムーンサルトスクランブルという超ウルトラ級のジェットコースターにまで乗ったという次第である。例の空中三回転ひねり宙返り、高さ七十メートルという、ものすごいやつである。

もちろん、彼はジェットコースターに乗るのも、ちょっとしたその他の様々な危険な乗物に乗るのも、今回が初めてである。

政あき君は今まで、遊園地に行っても、せいぜい高いところで、ゆっくり昇っていく観覧車くらいが関の山で、ジェットコースターなど、とてもじゃないが及ぶもつかなかったのだが、当日、彼に付き添った父ちゃんと慎二先生はやる気充分で、最初、小さい子供向けの乗物から乗せ始めると、彼がにこにこ笑って喜んでいるのを見るや、次々とむずかしい乗物にアタックをかけ、ついに帰りの集合時間十分前に、最後の攻撃目標であるムーンサルトの乗場前に到着したというわけである。

「父ちゃん、どうしますかねー」

「慎二先生、怖くないかい？」

「いやー、もちろん僕も怖いですよ。だけど、仕事とわりきって、乗ってみたいよな気がしますねー」

二人で、赤く塗った、空にそびえるムーンサルトを仰ぎ見る。

そばで、政あき君がにこにこしながら、今まで乗り継いできた乗物の興奮に酔いしれた顔をして、足踏みをして見せる。

「えーい、やっちゃいましょー」

慎二先生、決意したらしく、政あき君の手を引いて入場券売場に向かう。

父ちゃん、証拠写真を取るため、カメラの望遠レンズを点検する。

こうして、若者二人、空の彼方の宙返りに向けて、雄々しく？勇ましく？出発し

たというわけである。

さて、ついにムーンサルトに乗ってしまった政あき君の帰りの様子も、少し紹介せねばならない。

旅行の帰りのバスの中は、それは大騒ぎだ。

ながい君のお母さん、多分、ながい君が三十三歳だったから、五十は過ぎているはずなのに、やはり例のムーンサルトに、息子と一緒に乗ってきたと、大はしゃぎしている。

その隣で、ふみ枝ちゃんのお母さんも、すっかり若返ってしまった様子で、どうやら、随分危険な乗物をこなしてきたらしく、これもまた興奮さめやらずだ。

隣に座った職員、「そういうのを、年寄りの冷や水、というのでしょうか」と言っていて、みんなを笑わせている。

そして、政あき君である。

バスに乗車してからも、どうやら生まれて初めての経験であるムーンサルトの感動さめやらずであるらしく、口をポカーンと開いたまま、だらしく笑っている。

よだれまでたらしながら、目がうつろである。

卓見先生が、おやつバナナを口に持っていていつも、まるで反応を示さない。

「おい、政あき、夢の世界に行ったっきりか？」と呼びかけても、にたにた、ただ笑っているだけだ。

「こりゃー、駄目だよ、ムーンサルトでどこかよその世界に行っちゃって、戻ってこないよ」の言葉に、車内はまた爆笑する。

(二)

時々、特活係の朝倉先生の企画で、子供達は今はやりのファミリレストランというところに行く。

ひと騒ぎあるわけだが、その喜んでいる様子につられて、職員達、何があってももう行かないなどとは決して言わない。

コップを落したり食べものをこぼしたりは毎度のことで、時には、食べ終わったあとの食器を、園の食堂と間違えてレジに持っていくって、お店の人をびっくりさせたりするのだが、どこへ行っても、みんなで明るく「わっはっは、わっはっは」と笑って帰ってくる。

外に出るだけでなく、出先でいかに楽しく過ごしてくるかが、課題になっているのである。

先日、三グループに分けた一グループ十数人が、数人の職員の引率で、川に魚を獲りに行った。

彼らに魚が獲れるはずはないが、見せるだけでもという発想のもとだ。

さっちゃん、よう子ちゃん、しん一君など、もちろん重軽混合組である。

豊岡から四キロメートルほど、ダム of 川下に向かうと、川の中に入っても水の深さが足首までしかない、湊川の川原がある。子供達を水遊びさせるには、格好な場所だ。

引率の職員 of 一人、宮下先生、「今夜のおかずに魚をいっぱい獲ってくるからねー」と、わざわざ厨房に声までかけての出發である。

連中、そのいで立ちが本格的だ。
網を持っている者、釣り竿を持っている者、アイスボックスまで肩からぶら下げている者などだ。

送り出すほうの職員達はその姿を見て、吹き出すやら大騒ぎだ。

「魚なんか、獲れるわけないだろう」と、まぜっ返している。

引率の職員達も、負けていない。「こちゃこちゃ言わんで、待ってなよ。でっかいやつを、ひとしよ獲ってくるから」などと、わいわいがやがややっている。

實際、魚は一匹も獲れなかったらしいが、帰ってきた職員、「いやー、魚はいるにはいたが、おしいところで逃げられてしまったよ。動きが速くて、とてもつかまらないよ」

これで、またひと騒ぎある。

「予算がしみたれてるから、いい道具が買えない」とか、「道具じゃなくて、腕のせい」とか、「光生園につかまる魚は、よほどまぬけだ」とか言って、「わっはっは、わっはっは」と笑っている。

川に行ってきた園生達、魚（ハゼとかメダカとか沢ガニがいたようだ）を見てきたらしく、眼のかがやきが違ふ。

「さっちゃん、魚いたか？」と聞くと、「うーん、いた、いた。クイックイット」と言う。クイックイットはスィスイのことである。

生まれて初めて見た川 of 魚に、彼女、びっくりしている様子だ。

(二)

冬 of 一日は、この山奥にとつては、特に日が短い。平地より日の昇るのが遅く、日の暮れるのが早いから、当然である。

職員達に言わせると、「何するひまもないうちに、日が暮れてしまう」そうだ。すなわち、夜なべ仕事に適しているというわけだ。

十二月に入ると、恒例 of クリスマス行事の準備が始まる。子供達が何も作れないかわりに、職員達、この時とばかりに夜なべ仕事に精を出す。

今年のクリスマステーマは、光ある家にちなんで「光」だそうだ。どんな「光」を見せてくれるのか、父ちゃんも楽しみにして待っていると、大行事委員長に選出

された鳥居先生が来て、詩を書いてくれという。何でも、クリスマスの晩に明かりを消して、サーチライトで「光ある家」を照らし出し、そこに雪を降らせながら音楽を流し、その音楽に乗せて詩を朗読するという凝った趣向なんだそうで、どうしてもその詩を、父ちゃんに頼みたいと言うのである。

さあー大変。むずかしい注文が入ってしまった。父ちゃん、三日うなっても四日考えても、注文に合わせたの詩作などできるはずがない。

だいたい父ちゃんは、何かに合わせてものを書くことが、大変にが手だ。それが証拠に、日記などはいっさい駄目でもともと父ちゃんのもの書き方というのは、題材と時を選ばずに、思いつくままに書き捨てておいて、それを忘れた頃にあとで編集するというやり方なのである。

それに父ちゃん、もうひとつ困ったことが出現した。

それでも何とか注文に応じようと、原稿用紙を前にしてみると、この三年間、職員や子供達と、わーわーぎゃーぎゃー騒いで暮らしてきたせいか、すっかり詩心なんてものが消え失せてしまったらしい。どうしても、一字も一句も浮かばない。

コーヒー飲んで、トイレに行ってきた、原稿用紙とにらめっこ。

またコーヒー飲んで、トイレに行ってきた、原稿用紙とにらめっこ。
出るのは、ひたいからの脂汗だけ！

職員達、リハーサル役割をすっかり決めて待っているらしく、時々「まだですか？」と言いながら、覗きに来る。

しまいには、「早く書いてくださいよ。何やってるんですか」なんて、失礼千万なことを言ってくる者もいる。

こうして、どうやらやっとできあがった詩に合わせて、光生園の食堂に紙の雪を降らせるクリスマスの晩が来る。

近所の農家からいただいた、本物の大きなもみの木にイルミネーションをつけて、食堂の正面に飾りつけ、左側に特設ステージを設け、その隣に間口二メートルほどの山谷の模型が作られている。模型の中心には紙でできたミニチュア光生園が、カテル光線を浴びて浮かび上がっている。

明かりを消して、きよしこの夜の音楽を場内に流し始めると、子供達、父兄、職員、ボランティアの約百五十人の人達がいっせいに、「わあーっ」というため息混じりの歓声を上げる。

素晴らしい、きらめきの夜の始まりである。

ミニチュアセットの裏の扇風機がまわり出し、その風に乗って、光の中を紙吹雪が舞っている。光線がひとときわあざやかに、「光ある家」を照らし出すと、父ちゃん

の詩の朗読が始まる。

曲が、いつの間にかクリスマスキャロルのもみの木合唱曲に変わっている。

子供達、みんなおとなしく、しーんと息をつめて聞いている。

……

「森の入口に

枝の曲がった かわいそうなもみの木が
一本 さみしく 立っていました

そのもみの木は

毎年 冬が来ると

仲間が 都会に行くのを

うらやましげに 見送っていました

遠い 都会のはなやかさに

あこがれていたのです」

……

音楽は北欧の教会、ミサを想像させながら、次第に聞いている者を、えも言われぬ荘厳な世界に導いていく。

紙の雪が本物に見えてきて、電熱器の上のフライパンにのせたドライアイスが、ふわーっと白い雪けむりを場内にただよわせる頃になると、みーんな、ただもう感きわまって、手に汗を握っている。

音楽の流れに乗って、詩が朗読されていく。

……

「そして今年も

森に 冬が来ました

木こりが たくさんのクリスマスツリーを

そりに乗せて 通りかかりました

『もしもし木こりさん

私も一緒に 連れていってください』と

もみの木が 頼みました

しかし 木こりは

彼をひと目見るなり

『お前さんは 枝が曲がっていて 売り物にならないよ』と

すげなく 断りました」

……

川崎先生の朗読はよどみなく流れ、食堂の外で雪をまき散らしている朝倉先生のひたいには汗がにじみ、音響を調整している岡田先生は、ボリュームつまみを握った手先に思わずぐぐつと力が入る。

大合唱曲がクライマックスにさしかかる。

……

「木こりが 通り過ぎたあと
森に 雪が降り始めました

絹のような 白雪が

もみの木の上にも

どんどん 降り積まりました

夜通し 雪が降ったあと

森は 晴れわたった朝を迎えました

見渡す限り 銀世界の中に

朝日を浴びて きらきらかがやく

本当の クリスマスツリーが

森の入口に一本だけ

静かに 神々しく

立っていました

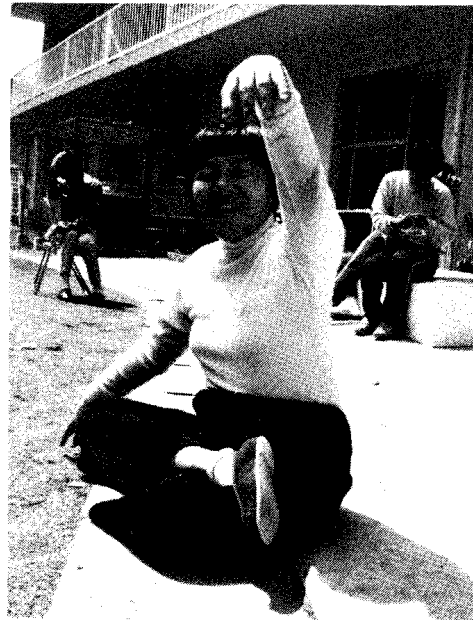
もう曲がった枝など

少しも気になりませんでした」

……

曲が鐘の音に変わり、終わりに近づいたのに、百五十人の人々は、誰も声ひとつ出さずだった。

第三章 素人福祉論



開園の翌年は国際障害者年ということで、見学者が特に多かった。

見学に来た人の顔ぶれは、婦人団体、民生委員、その他福祉団体、養護学校、障害児親の会、同業施設職員などだった。

施設にとって見学者というものは、正直、不思議なもので、あまり来過ぎるとまたかあーとうんざりするし、来なければ来ないで、寂しい気持ちになる。

それこそ、月に五組も六組も来ると、いきおい、こちらも扱い方がひどくなって、居室と子供達のまわりをぐるぐるつとひとまわりして、「はい、それでは苦勞様でした」とやってしまう。

お互いに、意義など何も感ずることなしで終わってしまう。

おまけに、光生園は生活指導を中心にしてやってるから、特別な製作物や作業指導による展示品がない。これがないということは、見せるものがないということだ。

父ちゃんに言わせれば、施設や障害者は見世物じゃない、ということなのだが、それでも、見に来る人があとを断たない。

そして、こっちが、見せるものはありませんよと言ってるのに、ただ見るだけの目的で来るのだから、勝手にしやがれという気持ちになってしまう。

施設側は、公益事業をやっている手前、見学者を拒むことはできない。しかし、ただ障害者をじろじろ見られるだけでは、何とも氣づまりな話だ。

どこそここの施設を何のために見るのか、何を学ぼうとしているのか、どんな人どんな話をしたのか、何を聞きたいのかをはっきりさせない施設見学は、無意味だと思っ。

つまり、施設を見た上で、施設の人と語り合うために来てもらいたいのだ。

今まで、施設は見学者達に対して、うちはこれこれしかじかの作業種目を持っていて、その訓練指導の成果をこたに出してます、障害者も世のため人のため頑張っております、決して税金のむだ使いなどはいたしておりません式の見せ方を、戦後三十数年間、ずーっと続けてきたため、見るほうも見せるほうも、そればかりの感がする。

ある時、父ちゃんは銀座のショールームで開催された、重い知恵おくれの子供達の作品展に招かれた。そして、その作品に、強く惹きつけられるものがあった。

それから、以前、栃木県のある施設の農園を見せてもらったことがあり、その時も、見事な管理、見事な作業風景に、感心して帰ってきた。

北海道でも、道路工事に出ている施設の子供達に会ってきた。

がしかし、こう言っちゃ何だけど、うまくやればやるほど、こっちがやれないひがみを言うわけじゃないけど、どうだ、どうだ、たとえ重い障害者でも、仕込めば

こんなになるぞといった、やらせる側の魂胆が見え透いていて、何とも、障害者に対するあわれを感じないではいられなかった。

そして、ひとつ言わせてもらおうなら、いいか悪いかは別として、施設建設の参考のために見せていただいた何十もの施設の中には、今日は子供達がみんなで遊びに行ってしまうって、誰もいませんよ、という豊岡光生園のような施設には、お目にかかれなかった。

施設では、以前はおしめをしていた子なのですが、今はしてません、などということ、見学者に見せることはできない。

最重度者の大小便訓練や、食事のこと、着脱衣のことなどは、どれも見せられない。すなわち、それらはすべて、その時その時の生活の場面において、時の流れと共に、過ぎ去っていくものだからだ。

人間の生活の中で一番肝心なのは、食べることにじゃないかと思う。食べることに、ものすごく気を使っています、などと言ってみたところで始まらない。食べてしまったものは、見えないからだ。

時の流れや人の心は、見せて見えるものじゃない。見せられないのに、見学者が押しかけてくるのは、父ちゃんにとっては悲しいことだ。

はつきり言う。豊岡光生園は、人に見てもらうための施設じゃない。障害者が、楽しく暮らすための施設だ。そして、こうも言いたい。見学者達よ、来るなら来い。何も見せるものはないが、来て、父ちゃんと語り合おうじゃないかと。

先日、こういうことがあった。

ある同業施設の見学者達を迎えた時のことだった。見学者の中の一人が、加藤園長の日常生活の説明を聞いて、子供がお風呂に毎日入っていること、それも夜、入っていることを、とても不思議がって、質問したのである。

「施設の入浴などというものは、職員の勤務の都合で、夜は入れないのが当たり前で、自分のところは週二回、昼間に入れています。お宅のような重度者に、それも毎晩なんて、嘘じゃないですか」と、こう言うのである。

説明していた園長は、その時、かんかに怒って、「冗談言っちゃ困りますよ。こっちが当たり前で、あんた達がおかしいのと違いますか。いったい世間じゃ、誰が昼間っから入りますか？ 昼間入浴する人は、小原庄助か、夜昼逆の商売の人ぐらいじゃないですか」と言っていてやったそうである。

(一)

近頃、だんだん増える傾向にある見学者に、入園希望の親子連れがいる。もちろん、うちをわざわざ見に来るからには、みな重度者達である。

「うわー明るい。きれいな施設ですねー。うちの子も、ここへ入れてくれませんか

ねー」などと素直に言われると、「もう、ここは定員満杯で、社会復帰見込者がいない以上、誰か死にでもしなければ空きがありませんし、うちは、ちょっとやそつとじゃー、死んで出る者はいませんよ」などとはいにくい。言いにくいけど、本当のことを言わねばならない。

うっかり、「えー、まあそのうちに」などとあいまいな返事をしようものなら、それこそ大変。いつまでもくい下がられる。

最近、県内外共、だんだん施設が増設されて、一部地域では施設が空いているところもあると聞く。

いったい、一方ではこうして入園希望者が相変わらずあふれ、一方では空きが出ているのは、なぜだろうか、一考する必要がある。

もともとの原因は、精神薄弱者更生施設とは、字で書いた通り、更生させて社会に出してあげるところだという、厚生省のあの大方針がいけない。いや、全体としてはそれでいいかもしれないが、重度者に限っては、これが迷惑なのだ。

そして、もうひとつの原因は、従来の施設側にもある。施設経営者や施設職員が、『どうせなら、軽いほうが楽だ』と思っている以上、この問題は解決しない。

また、自分達がやっていることを人に見せたがるから、軽度者ばかり集めることになる。『どうだ、俺の教育者としての能力の高さを見てくれ』なんて思ってるようでは、重度者の問題は片づかない。

障害福祉事業は、社会復帰させた障害者の頭数じゃなく、一人の最重度者の命を守ることに、笑顔を見つけて喜ぶことこそ尊いと思う者が、やるべき仕事だ。

確かに、人を更生させて世に送り出すことも大切だが、片方で重度者を置き去りにしたまま、重度で絶対に世に出られない、手もかけてもらえない者の悲しみがわからない、すたわち慈悲の心のない者に、この仕事をやる資格はない。

そして、そういう意味では、日本の従来の福祉事業は、どこか間違っていると言いたい。

先日、全国施設長会議に出席したら、その分科会で、ある施設長から、こんな意見が出た。

「重度、最重度者が、ちまたにあふれているのはわかる。がしかし、我々が長い歳月をかけて築き上げてきた作業指導体制、社会復帰体制そのものを、重度者を入所させることで壊してしまつのも困る」と言うことであつた。

しかも、彼いわく、「ところが、近頃、施設に空席が出て、新しく入所者を捜すと、入所希望者はみな重度、最重度ばかりで、困っている。仕方がないから、空席のままにしているが、いったい、軽度者はどこへ行ってしまったのだろうか」と、こう言うのだった。

まったく、腹立たいとはこのことで、体制とか保身のみが、施設経営者の頭の中だとしたら、ゆゆしき問題だと思う。こんな状態では、施設無用論がまかり通る

のも無理ないと思うし、いったいいつになったら、重度者のぬかるみが終わるのかと嘆きたい。

重度者処遇について

最近、施設職員が集まっておこなう研修会が、花ざかりだ。そして、研修会の内容の中には必ずと言っていいほど、重度者処遇についてという項目がある。

多分、養護学校全就学のあおりが、今頃、こんなところに現われたのじゃないかとも考えられる。

父ちゃんに言わせれば、三十年以上も施設福祉をやってきて、今さら重度者処遇の研究もないだろうということだが、実際には、重度者はともかく、最重度精神薄弱児(者)の処遇は、今まさに歩き出したばかりと言っても、過言じゃない。

昭和四十五年に制定された心身障害児(者)対策基本法の十一条には、こう書かれている。「国及び地方公共団体は、重度の心身障害があり、自立することの著しく困難な心身障害者について、終生にわたり必要な保護等を行なうよう努めなければならない」

がしかし、いくら法律があっても、中身がともなわなければ、すなわち、制度の上でも精神面でも、これを実施できるようになってなければ、何にもならない。

施設処遇がいまだに重度加算一人当たり月額三万円ちょっとばかりの一律では、誰も最重度者の処遇をしようとはしないのであって、制度が実施されてとは言えない。精神面でも、前項「見学者達」で述べた通りである。

戦後だけでも三十年以上も精神薄弱者福祉事業が営まれてきたというのに、今頃、重度処遇を二年も続けて、いたるところで研究のテーマにしなければならぬ実状は、福祉事業をおこなってきた人達が、どこか間違っていたとしか言いようがない。

一番初めにやらねばならないことを、最後の最後に残してしまうようなことをするから、福祉が冷や飯をくわされるのだ。

福祉・父ちゃんの言い分

福祉について、福祉事業について、日頃、父ちゃんが思っていること、感じていることを、話してみたい。

読者の中には、素人が四年ばかりやって何がわかるとおっしゃる方もおられると思うが、まあそこは、言いたいことが言える民主主義の世の中、素人福祉論と断つての発言、間違っていたら教えていただきたいと、先に言っておこう。

さて、福祉という言葉は、幸福を考えるとかおこなうという意味だそうで、人間誰しも、幸福を望まない者はいないのであって、誰もが関心を持って当たり前だと思ふ。

ところが、この当たり前が当たり前でなくなるところに、実は問題があると言えよう。

そして、もうひとつは、福祉をおこなう側とおこなわれる側、する側とされる側、与える側ともらう側に、くい違いの問題がある。

戦後の歴史の中で、我々は重大な反省をしなければならないことがある。

それは何かと言うと、福祉とは金をかけることで、国や自治体が税金を使っておこなうものという風潮を、いつの間にか作り上げてしまったことである。

そして、お役所まかせにしたつけが、今、我々にはね返ってきていることを、思い知るべきである。すなわち、役人は金を使うにあたって制度やしくみを作る。これが幸福の見本だよというものを作るのである。しかし、いつまでやっても、福祉問題がおさまるところか、今では逆に、何十、何百という福祉の見本が、口をあけて金を待っているという現象が出現している。

すなわち、福祉＝金では、問題の解決にならないということなのだ。

福祉関係者の間で、今でも笑い話になっていることがある。
日本の金使いの三大愚行は、戦艦大和と、原子力船むつと、国立高崎コロニーだという、たとえ話である。

高崎コロニーができたいきさつは、昭和三十七年に、作家水上勉さんが時の総理大臣池田勇人さんにあてて、拝啓総理大臣殿という手紙を書き「文芸春秋」に発表したことからはじまったと聞く。

当時、このコロニー計画は、三十五万坪の土地に大施設を建設し、千五百人の重度障害児を収容するという大がかりなもので、関係者達はあっと息をのんだそうである。

しかし、大コロニーなどというものが、人を処遇するという意味で考えるとうまくいくはずがない。

このことの失敗にこりた厚生省は、その後、在宅福祉、地域社会福祉の推進をと、方針を百八十度転換、現在にいたっている。しかし、依然として、金をばらまく福祉に変わりはない。

心身障害児や寝たきり老人の問題は、金をまいてもまいても、どうにもならない福祉の見本と思われる。すなわち、心を求められているのだ。

昭和四十五年に心身障害児（者）対策基本法なるものが制定されたことは前にも書いたが、父ちゃんにとっては、この制定の最中に、二人の障害児のうち息子が九歳、娘が六歳という時期でもあった。

法律ができた時、父ちゃんは、あーこれで我が子達も救われると、実はそう思っ

た。あの当時、子供達は、それぞれがちょうど学齢期を迎え、親としては一番大変な時期であったのだが、子供のことで親身に相談にのってくれるところがなく、息子のほうは三年就学猶予を続けてついに免除、娘のほうは一年目の猶予が始まるといった具合で、この法律に対して、大きな期待を寄せていた。

そして一方では、一人は病院に、一人は施設に世話になるにあたって、その施設や病院に入ることが、いかに至難のわざであったか、想像に絶するものがあつた。すなわち、子供達は、行くところ行くところで入所入院を断られたのだが、その理由は、単に子供達の障害が重過ぎるということだった。

しかし、あれからすでに十年以上も過ぎた今でも、施設や病院で、お宅の子供さんは重過ぎて教育や訓練の対象にならないからとか、重度者は人手不足だからという入所や入院拒否の理由が、当時と同じように言われていると聞く。

しかも今では、各施設がそれぞれ色分けされ、精神薄弱の分野でも、通園作業所、授産所、収容授産所、収容更生施設、通勤寮、福祉ホームなどという具合に、細分化されてきた。

細分化されたことは、表面上では本人の能力や家庭の事情に合わせられるという大変具合のいいことなのだが、裏では能力選別以外の何物でもなく、すなわち、社会復帰のため何々某の訓練をこれ見よがしにやっていると、しかじかの産品を市場に出しているとかいった具合で、そのための労働力の確保のため、比較的軽度者が選別され、奪い合うように施設に入所させられ、重度者や最重度者のみが家庭に残って親を困らせている現象が、現われているのである。

いかに重度者達が、精神薄弱児(者)の施設でないがしろにされてきたか、その証拠を申し述べよう。

父ちゃん達が四年前に施設を開園して、重度の障害児達が続々と入園してきた時、これから学ぼうということで、いわゆる障害児(者)療育の参考書、文献を捜し歩いたわけだが、すでに三十年以上も歴史があるこの精神薄弱者福祉の世界に、最重度者の療育や指導をいかにすべきかという内容のものは、ほとんど見当たらず、何十冊も購入したそれらの文献には、日本の精神薄弱者福祉の中身は、ただ奴隷のように彼らを働かせることしか書かれてなかったという、はた寒い印象しか残らなかったのである。

今、世の中では、普通の子供達を教育するしくみにおいて、落ちこぼれということが大きな問題になっている。世の常として、一等になる者がいれば、びりになる者、つまり落ちこぼれる者もいるわけだ。

この社会がいわゆる競争社会で、生存競争としてこれがおこなわれているのなら、結果として必然的なものかもしれない。

しかし、障害者の世界にまでこの競争の原理が持ち込まれてしまったら、もう何を言わんやである。

たとえば、普通学級でこぼれたら特殊学級、特殊学級でこぼれたら養護学校、収容施設、収容施設でこぼれたら手をかけてもらえないお客様が在宅という図式ができてしまい、世の中で一番重い障害者は、誰も手を差しのべないという論理が成り立ってしまう。現に、寝たきりの動けない重度精神薄弱児（者）などは、今でもほとんど行き場がないのである。

人間は、その生きる能力において、それぞれ能力差というものがある。

その能力差で社会を見渡すと、社会はピラミッド形とよく言われるが、父ちゃんは、そうじゃなくて、菱形だと思う。

その菱形の底辺のところが、すなわち、最も生きる能力のない者のために、テコを入れて持ち上げてやる仕事で、福祉事業だと考えられるのであって、心あらば最重度者から顔をそむけないでほしいと、世の福祉事業者に訴えたいのである。

御殿場コロニーの牛島義友先生は、精神薄弱者は、その存在価値をいくら考えてみても問題の解決にはならないのであって、むしろ無能力に徹することから出発すべきだと言っている。そして、もしも仮に、能力中心主義で精神薄弱者が扱われたら、最重度者はその存在価値がゼロということになってしまっても言っている。

一般に、現在、全国の精神薄弱者施設では、社会復帰のための訓練ということで、たいがい作業指導というものがおこなわれている。

彼らの大半は、お金を使うこともできないことをいいことに、まったく話にもならない金額で、または無給で、袋張り、折箱作り、ビニール・プラスチック製品のバリ取りなど、生産といっても、このコンピューター・ロボット万能時代に照らし合わせてみれば、ささやかな仕事をやらされているのである。そして、もしこれが本人達の手先の機能回復のためとか、集団の仲間意識を育てるためとか、本人が好んでやりたがっているとか言うのなら、父ちゃんも納得できると思う。（がしかし、もう少し楽しいことを考えてみたら、と言ってあげたいところだ）

けれども、これが生産のため、生活のため、ノルマのため、職員や経営者が自己満足するため、人に自慢するためにおこなわれるとしたら、ゆゆしき問題と言わねばなるまい。

先年、父ちゃんが施設作りの途中、全国の施設を見て歩いた時の話をしよう。

ある施設を訪問した時、父ちゃんは、二十歳ぐらいの最重度の子が洗面器に土を入れ、たどたどしい足どりで運んでいる姿に出会った。

ちよどその子が父ちゃんの前に来た時、立ち止まったままおしっこをじゃーと漏らした。見ると、大きなおしめをお尻に当てていたのだが、そのおしめがずれたか、それともおしめでは防げないほど大量であったか、そのどちらかでないかと想像された。その時、その子を引率していた先生が父ちゃんに向かって、「この子が土を入れた洗面器を所定の場所から場所まで運べるようにするのに、八年かかった。だけど、八年目にやっと運べるようになった時は、とても嬉しかった」と、こう言

ったのである。

素直に聞けば、先生の苦勞はいかばかりかと、父ちゃんも感動するところだが、ちよつと思ふことがあって、逆にむかつ腹を立てた。

そして、「なぜ、おむつを取ってあげるほうを、八年かけてやらなかったのですか」と、少し怒り気味に聞いた。

そしたら、その先生は、「やあー、おしめのほうは、最初少しやってみましたが、とうてい駄目だとわかったので、途中でやめました」と言うのだった。

その時、父ちゃんがなぜ怒ったのかと言うと、おしめを取ってあげたら、本人はどんなに気持がいいだろうかと單純に思ったのと、八年間、尻を叩かれながら、ほとんど無意味な土運びをいやいやながら仕込まれた側こそ、いいつらの皮、随分いやだったろうと、こう思ったわけである。

すなわち、やらせる側とやらされる側の論理の違いを、思ったのである。

そして、むしろこのような八年がかりで土運びなどというのは、牛を追いまわす態度と同じもので、障害児の親としては、憤りさえ感じるのである。

先ほどの牛島先生の言葉をもう一度借りれば、幼児や少年を、その能力があるからといって労働の対象とすれば、労働基準法、児童福祉法により処罰される。彼らとて、年齢こそ普通児と同じに数えられるが、精神年齢で推測すると、IQ五十として四歳児ぐらいと考えねばならない。その精神年齢がせいぜい幼児ぐらいの、わずか人口の〇・三パーセント程度の不幸な人々を、なぜ働かせねばならないのか、日本という国が、彼らの労働力まで必要とするほど貧乏国なのか、一度よく考えてもらいたいとも言っている。

福祉関係者や障害児教育家達は、「働く喜びを教える」という言葉をよく口にする。父ちゃんは、その言葉を耳にするたびに、「冗談じゃないよ。遊ぶことが先だよ。遊ぶこともできない者に、働く喜びなど教えられるまいよ」と言葉を返す。「いったい自分の子供の育つ姿を忘れてしまったのか、子供が先に憶えるのは遊びからだぞ」とも言ってあげる。

さて、次に精神薄弱者問題で申し上げねばならないのは、親の問題である。

父ちゃんも親の一人であるから、この問題は一番身近だ。

重度児の親は、一生のうち何度も、死を決意するところまで精神的に追い込まれてしまう。それだけでなく、我が子に対して早死にを期待することなど、しょつ中である。

戦いに負けた者が白旗を振る心境にも似て、どうしてもいいと諦めてしまう者、子供を他人に見せながらない者、世間から引っ込んでしまう者など、様々なのだ。

この子供を生んだ親の悲しみは、はかり知れない。慰めようとて慰められるものじゃない。

たいがいの動物は、障害児が生まれると見殺しにする。人間も一度は切り捨てを

考えたり親子心中を考えたりするが、親達はその苦しみに耐えて、人間であるからこそ、この子達を育てるのである。殺すに殺せないという気持。不欄であるから、なおさらに可愛いと思うのが人の心である。「どうしたら我が子を幸せにしてあげられるか」と悩む姿。すたわち、福祉の基本の心、慈悲の心、母の心がそこにある。「子と共に、親も救わねばならない」

このことが、精神薄弱者問題の最大の課題なのである。

親達はみな、「この子を残しては、死んでも死にきれない」と言う。

そして、福祉施設の経営者達は、誰もこの親に対して、「この子が死ぬまで、面倒みてあげましょう」とは言わないのである。

土に生きる日の夢

この山の中の村に、職員も含めて六十五人の大世帯と一緒に暮らしながら、思うことがひとつある。住めば都とはよく言ったもので、人間、いたるところに暮らしがあるものと、つくづく感心するのである。

そして、父ちゃんと呼ばれ、子供達や若い職員たちにしたわれる幸せは、何ものにも代えがたいような気もする。

障害者たちと共に生きる運動が、ちまたで叫ばれ、今また、ノーマリーゼイションという言葉がはやってる。

時々町の人々に引っ張り出されて、「おまえは、障害者を山の中に連れて行って、囲ってしまっ、それでいいのか」などと討論会の席上で言われて、面くらってしまふこともある。

もののあわれを知らない者と、いくら話し合ってもむだなことと諦めて、「仕方なかったのだ」と言いわけして、尻尾を巻いて逃げてくることもある。

腹の中では「いい気なもんだ。うちに来て、よだれたらたらの子供と一緒に、一度めしを食って見りゃー、わかるさ」などと思ってもいる。

そして、春、桜が咲き、夏、セミが鳴き、秋、柿の実がなる、空気清浄なこの豊岡の大地に住む幸せは、おまえさん達のようなスモッグ村の住人にはわかるはずがないさと、心の中でうそぶいている。

土に生きることを最後の目標にすえて、この地を選んだのだが、何しろ、子供達は重過ぎて、今、それどころではない。

愛する子供達には、当分の間、食べて、着て、脱いで、出すことを、一生懸命にやってもらいながら、楽しく遊んでもらうことにしている。

彼らが一人残らず、みんなで順序よく喜んで畑に立つ日は、あまりにも遠い。

人間、土に生き、土に帰るということが、こんなにはるかな道なのかと、改めてつくづく思う、今日この頃でもある。

光はバスに乗って—成人心身障害者施設豊岡光生園の4年

昭和59年8月20日 第1刷発行 定価1200円

著者 鈴木 栄

発行者 藤根井 和夫

発行所 日本放送出版協会

〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 03(464)7311 振替東京 1-49701

印刷／三和印刷・光村オフセット 製本／田中製本所

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© 1984 Sakae Suzuki Printed in Japan

ISBN4-14-008370-0 C0036 ¥1200E